

通知書

配當利子特別税 配當利子特別税法施行細則

第何號	何年度	大蔵省主管			
租税	配當利子特別税	配當利子特別税	何稅務署		
何縣何郡何町何番地 何會社 代表者 何 某納 (其ノ他之ニ準ズ)					
<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 70%; text-align: center;">Y</td> <td style="width: 30%; text-align: center;">●</td> </tr> </table>				Y	●
Y	●				
昭和何年何月何日領收 日本銀行何店宛 何稅務署長官氏名殿					

第二號書式(用紙適宜輪廓 縦四寸三分二枚接續)

配當利子特別税拂込書

新 法

第一號書式(用紙適宜 縦四寸三分)

第何號	何年度	大蔵省主管			
租税	配當利子特別税	配當利子特別税	何稅務署		
<table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="width: 70%; text-align: center;">Y</td> <td style="width: 30%; text-align: center;">●</td> </tr> </table>				Y	●
Y	●				
頭書ノ金額拂込候也 何縣何郡何町何番地 何會社 代表者 何 某納 (其ノ他之ニ準ズ) 日本銀行何店宛 昭和何年何月何日					

備考 本書ノ年度ハ拂込ノ日ヲ以テ區別シ記入
スベシ

外貨債特別税

○外貨債特別税法 (昭和十二年三月三十日法律第五號)

改正沿革 昭和十三年三月三十一日法律第四十四號(1)
昭和十五年三月二十九日法律第二十八號(2)

第一條 本法施行地ニ住所ヲ有シ又ハ一年以上居所ヲ有スル者ニシテ外貨債ヲ所有スル者ニハ本法ニ依リ外貨債特別税ヲ課ス
 本法ニ於テ外貨債ト稱スルハ外國通貨ヲ以テ表示スル國債及地方債並ニ日本法人ノ發行シタル社債ヲ謂フ

第二條 外貨債特別税ハ外貨債利子ニ付之ヲ賦課ス

所得税法第六條(第一項但書ヲ除ク)ノ規定ハ信託財産タル外貨債ノ利子ニ付之ヲ準用ス(2)

第三條 外貨債利子ハ一月一日ヨリ六月三十日迄七月一日ヨリ十二月三十一日迄ノ各期間中ニ於テ收入シタル外貨債ノ利子金額ニ依ル被相續人ノ收入シタル外貨債ノ利子金額ハ之ヲ相續人ノ

外貨債特別税 外貨債特別税法

年	月	日	債種	金額	備考
昭和十三年	三月	三十一日	國債	100,000	
昭和十三年	三月	三十一日	地方債	50,000	
昭和十三年	三月	三十一日	社債	20,000	
昭和十三年	三月	三十一日	合計	170,000	
昭和十四年	三月	三十一日	國債	120,000	
昭和十四年	三月	三十一日	地方債	60,000	
昭和十四年	三月	三十一日	社債	30,000	
昭和十四年	三月	三十一日	合計	210,000	
昭和十五年	三月	二十九日	國債	150,000	
昭和十五年	三月	二十九日	地方債	70,000	
昭和十五年	三月	二十九日	社債	40,000	
昭和十五年	三月	二十九日	合計	260,000	

昭和十三年三月三十一日現在外貨債特別税課税額

收入シタル外貨債ノ利子金額ト看做ス
外貨債ニ付元本ノ所有者ニ非ザル者ガ利子ノ支拂ヲ受クルトキハ元本ノ所有者ガ支拂ヲ受クルモノト看做ス但シ利子ノ生ズル期間中ニ元本ノ所有者ニ異動アリタルトキハ最後ノ所有者ヲ以テ利子ノ支拂ヲ受クル者ト看做ス

第四條 左ニ掲グル利子ニハ外貨債特別税ヲ課セズ(2)

一 所得税法其ノ他ノ法律ニ依リ所得税ヲ課セラレザル者ノ所有ニ屬スル外貨債ノ利子
二 利率四分以下ノ外貨國債ノ利子

三 利率四分五厘以下ノ外貨國債以外ノ外貨債ノ利子

四 起債者ガ外貨債利子ニ對スル租税ヲ負擔スベキ旨ノ約款アル外貨債ノ利子但シ其ノ約款ガ

昭和十二年一月一日前定メラレタルモノニ限ル

第五條 外貨債特別税ハ外貨債利子金額中外貨國債ニ在リテハ利率年四分、外貨國債以外ノ外貨債ニ在リテハ利率年四分五厘ニ相當スル金額ヲ超ユル金額ニ十分ノ七ヲ乘ジタル金額ヲ以テ其ノ税額トス(2)

第六條 外貨債特別税ニ付納税義務アル者ハ外貨債利子金額ヲ政府ニ申告スベシ

第七條 外貨債利子金額ハ前條ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキハ政

府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

第八條 前條ノ規定ニ依リ外貨債利子金額ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ納税義務者ニ通知スベシ

第九條 外貨債特別税ハ左ノ納期ニ於テ之ヲ徵收ス

一月一日ヨリ六月三十日迄ニ收入シタル利子ニ對スル分

其ノ年七月三十一日限

七月一日ヨリ十二月三十一日迄ニ收入シタル利子ニ對スル分

翌年一月三十一日限

納税義務者納税管理人ノ申告ヲ爲サズシテ本法施行地外ニ住所若ハ居所ヲ移ストキ又ハ法人解散シ清算結了セントスルトキハ前項ノ納期ニ拘ラズ直ニ其ノ外貨債特別税ヲ徵收スルコトヲ得
第十條 收税官吏ハ調査上必要アルトキハ外貨債ノ利子ノ支拂ヲ受ケ若ハ支拂ヲ爲スト認ムル者又ハ外貨債ノ利札ノ賣却若ハ買入ヲ爲スト認ムル者ニ質問ヲ爲シ又ハ其ノ帳簿物件ヲ検査スルコトヲ得

第十一條 前條ノ規定ニ依ル帳簿物件ノ検査ヲ拒ミ、妨ゲ若ハ忌避シ又ハ虚偽ノ記載ヲ爲シタル帳簿書類ヲ呈示シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第十二條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ依リ外貨債特別税ヲ遁脱シタル者ハ其ノ遁脱シタル税金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處シ直ニ其ノ税金ヲ徵收ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出

デタル者ハ其ノ罪ヲ問ハズ

第十三條 外貨債特別税ノ調査ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ調査ニ關シ知得タル秘密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十四條 第十二條ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ規定ヲ適用セズ

第十五條 所得税法第八十四條第一項及第八十五條並ニ法人税法第十條ノ規定ハ外貨債特別税ニ付之ヲ準用ス(2)

第十六條 法人税法第十條ノ規定ハ朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ガ朝鮮、臺灣、關東州、樺太又ハ法人税法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ト合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ガ法人税法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル場合ニ付之ヲ準用ス(2)

朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ住所ヲ有シ又ハ一年以上居所ヲ有スル者ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ外貨債特別税ヲ課セズ

第十七條 北海道、府縣、市町村其ノ他ノ公共團體ハ外貨債特別税ノ附加税ヲ課スルコトヲ得ズ
第十八條 外貨債特別税ヲ課セラルル外貨債ノ利子ニ付所得税ヲ課スル場合ニ於テハ其ノ利子金

額ヨリ外貨債特別税相當額ヲ控除シタル殘額ヲ以テ其ノ利子金額ト看做ス(2)

附 則

本法ハ支拂期ガ昭和十二年一月一日以後ニ在ル外貨債ノ利子ニ付之ヲ適用ス

附 則(1)

本法ハ昭和十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

(第二項、第三項略)

外貨債特別税法第十六條第一項(中略)ニ左ノ但書ヲ加フ

但シ南洋群島ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

附 則(2)

本法ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ第二條、第四條及第五條ノ改正規定ハ支拂期ガ昭和十五年一月一日以後ニ在ル外貨債ノ利子ニ付之ヲ適用ス

○外貨債特別税法施行規則 (昭和十二年三月三十一日勅令第五十五號)

改正沿革 昭和十五年三月三十一日勅令第三百三十八號(1)

外貨債特別税 外貨債特別税法施行規則

第一條 外貨債特別税ニ付納稅義務アル者ハ其ノ所有スル外貨債ノ各銘柄ニ付其ノ名稱、額面總額、利率、利子支拂期日、證券所在地、收入利子金額及收入シタル年月日ヲ明記シ一月一日ヨリ六月三十日迄ニ收入シタル利子ニ對スル分ニ付テハ七月十五日、七月一日ヨリ十二月三十一日迄ニ收入シタル利子ニ對スル分ニ付テハ翌年一月十五日迄ニ所轄稅務署ニ申告スベシ

外貨債特別稅法第九條第二項ニ該當スルトキハ前項ノ規定ニ準ジ直ニ申告スベシ

第二條 稅務署長外貨債特別稅法第七條ノ規定ニ依リ外貨債利子金額ヲ決定シタルトキハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ

第三條 收稅官吏外貨債特別稅法第十條ノ規定ニ依リ帳簿物件ヲ檢査スルトキハ檢査章ヲ携帯スベシ

第四條 所得稅法施行規則第九十九條及第二百二條乃至第二百四條ノ規定ハ外貨債特別稅ニ付之ヲ準用ス(イ)

第五條 朝鮮、臺灣、關東州若ハ樺太ニ住所ヲ有スル者又ハ外貨債特別稅法施行地ニ住所若ハ一年以上居所ヲ有セズシテ朝鮮、臺灣、關東州若ハ樺太ニ一年以上居所ヲ有スル者ノ外貨債利子ニ付テハ左ニ掲グル場合ヲ除クノ外外貨債特別稅ヲ課セズ

一 外貨債特別稅法施行地ニ住所ヲ有スル者外貨債利子金額決定後朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺

太ニ住所ヲ移轉シタルトキ

- 二 朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ住所ヲ有スル者朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依ル外貨債利子金額決定前外貨債特別稅法施行地ニ住所ヲ移轉シタルトキ
- 三 外貨債特別稅法施行地、朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ住所又ハ一年以上居所ヲ有スル者ノ住所又ハ居所ニ付前二號ニ準ズベキ事由ノ生ジタルトキ

附 則

本例ハ支拂期ガ昭和十二年一月一日以後ニ在ル外貨債ノ利子ニ付之ヲ適用ス

附 則(イ)

本令ハ昭和十五年法律第二十八號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

地 租

地租法 (昭和六年三月三十一日法律第二十八號)

改正沿革 昭和十五年三月二十九日法律第三十四號 (1)

第一章 總則

第一條 本法施行地ニ在ル土地ニハ本法ニ依リ地租ヲ課ス

第二條 左ニ掲グル土地ニハ地租ヲ課セズ但シ有料借地ナルトキハ此ノ限ニ在ラズ

- 一 國、府縣、市町村其ノ他勅令ヲ以テ指定スル公共團體ニ於テ公用又ハ公共ノ用ニ供スル土地
- 二 府縣、市町村其ノ他勅令ヲ以テ指定スル公共團體ニ於テ公用又ハ公共ノ用ニ供スルモノト決定シタル其ノ所有地但シ其ノ決定ヲ爲シタル日ヨリ一年內ニ公用又ハ公共ノ用ニ供セザルモノヲ除ク

- 三 府縣社地、郷村社地、護國神社地(一)
- 四 墳墓地
- 五 公衆用道路、鐵道用地、軌道用地、運河用地
- 六 用惡水路、溜池、堤塘、井溝
- 七 保安林
- 第三條 土地ニハ一筆毎ニ地番ヲ附シ其ノ地目、地積及賃賃價格(無租地及免租年期地ニ付テハ賃賃價格ヲ除ク)ヲ定ム
- 第四條 稅務署ニ土地臺帳ヲ備ヘ左ノ事項ヲ登錄ス
 - 一 土地ノ所在
 - 二 地番
 - 三 地目
 - 四 地積
 - 五 賃賃價格
 - 六 所有者ノ住所及氏名又ハ名稱
 - 七 賃權又ハ百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ノ目的タル土地ニ付テハ其ノ賃權者又ハ地

上權者ノ住所及氏名又ハ名稱

本法ニ定ムルモノノ外土地臺帳ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 地番ハ市町村、大字、字又ハ之ニ準ズベキ地域ヲ以テ地番區域トシ其ノ區域毎ニ起番シテ之ヲ定ム

第六條 有租地ノ地目ハ土地ノ種類ニ從ヒ左ノ如ク區別シテ之ヲ定ム

第一類地 田、畑、宅地、鹽田、鑛泉地

第二類地 池沼、山林、牧場、原野、雜種地

無租地ノ地目ハ第二條第三號乃至第七號ノ土地ニ在リテハ各其ノ區別ニ依リ、其ノ他ノ土地ニ在リテハ其ノ現況ニ依リ適當ニ區別シテ之ヲ定ム

第七條 地積ハ左ノ各號ノ規定ニ依リ之ヲ定ム

- 一 宅地及鑛泉地ノ地積ハ平方メートルヲ單位トシテ之ヲ定メ一平方メートルノ百分ノ一未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ
- 二 宅地及鑛泉地以外ノ土地ノ地積ハアルヲ單位トシテ之ヲ定メ一アルノ百分ノ一未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ但シ一筆ノ地積一アルノ百分ノ一未滿ナルモノニ付テハ一アルノ一萬分ノ一未滿ノ端數ヲ切捨ツ

第八條 地租ノ課稅標準ハ土地臺帳ニ登錄シタル貸賃價格トス

貸賃價格ハ貸主ガ公課、修繕費其ノ他土地ノ維持ニ必要ナル經費ヲ負擔スル條件ヲ以テ之ヲ貸賃スル場合ニ於テ貸主ノ收得スベキ一年分ノ金額ニ依リ之ヲ定ム

第九條 貸賃價格ハ十年毎ニ一般ニ之ヲ改訂ス第一回ノ改訂ハ昭和十三年ニ於テ之ヲ行フ前項ノ改訂ニ關スル事項ハ其ノ都度別ニ之ヲ定ム

土地ノ異動ニ因リ貸賃價格ヲ設定シ又ハ修正スル必要アルトキハ類地ノ貸賃價格ニ比準シ其ノ土地ノ品位及情況ニ應ジ之ヲ定ム

第十條 地租ノ稅率ハ百分ノ二トス(一)

第十一條 地租ハ毎年左ノ納期ニ於テ之ヲ徵收ス

一 田租(一)

第一期 翌年一月一日ヨリ三十一日限

年額ノ二分ノ一

第二期 翌年三月一日ヨリ三十一日限

年額ノ二分ノ一

二 其ノ他(一)

第一期 其ノ年八月一日ヨリ三十一日限

年額ノ二分ノ一

第二期 翌年一月一日ヨリ三十一日限

年額ノ二分ノ一

特別ノ事情アル地方ニシテ前項ノ納期ニ依リ難キモノニ付テハ勅令ヲ以テ特別ノ納期ヲ定ムルコトヲ得

第十二條 地租ハ納期開始ノ時ニ於テ土地臺帳ニ所有者トシテ登錄セラレタル者ヨリ之ヲ徵收ス

但シ質權ノ目的タル土地又ハ百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ノ目的タル土地ニ付テハ土地臺帳ニ質權者又ハ地上權者トシテ登錄セラレタル者ヨリ之ヲ徵收ス

第十三條 土地ノ異動アリタル場合ニ於テハ地番、地目、地積及貸賃價格ハ土地所有者ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ若ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキ又ハ申告ヲ要セザルトキハ稅務署長ノ調査ニ依リ稅務署長之ヲ定ム

第二章 土地ノ異動

第一節 有租地及無租地ノ轉換

第十四條 本法ニ於テ無租地ト稱スルハ地租ヲ課セザル土地(免租年期地、災害免租地及小農耕免租地ヲ含マズ)ヲ謂ヒ有租地ト稱スルハ其ノ他ノ土地ヲ謂フ(一)

第十五條 無租地ガ有租地ト爲リタルトキ又ハ有租地ガ無租地ト爲リタルトキハ土地所有者ハ三十日內ニ之ヲ稅務署長ニ申告スベシ但シ有租地ガ無租地ト爲リタル場合ニ於テ之ニ關シ豫メ政府ノ許可ヲ受ケ若ハ申告ヲ爲シタルモノ又ハ官公署ニ於テ公示シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在

府ノ許可ヲ受ケ若ハ申告ヲ爲シタルモノ又ハ官公署ニ於テ公示シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在

府ノ許可ヲ受ケ若ハ申告ヲ爲シタルモノ又ハ官公署ニ於テ公示シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在

府ノ許可ヲ受ケ若ハ申告ヲ爲シタルモノ又ハ官公署ニ於テ公示シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在

府ノ許可ヲ受ケ若ハ申告ヲ爲シタルモノ又ハ官公署ニ於テ公示シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在

府ノ許可ヲ受ケ若ハ申告ヲ爲シタルモノ又ハ官公署ニ於テ公示シタルモノニ付テハ此ノ限ニ在

ラズ

第十六條 新ニ土地臺帳ニ登録スベキ土地ヲ生ジタルトキハ當該地番區域内ニ於ケル最終ノ地番ヲ追ヒ順次其ノ地番ヲ定ム但シ特別ノ事情アルトキハ適宜ノ地番ヲ定ムルコトヲ得

第十七條 新ニ土地臺帳ニ登録スベキ土地ヲ生ジタルトキハ直ニ其ノ地目ヲ設定ス

土地臺帳ニ登録セラレタル無租地ガ有租地ト爲リ又ハ有租地ガ無租地ト爲リタルトキハ直ニ其ノ地目ヲ修正ス

第十八條 新ニ土地臺帳ニ登録スベキ土地ヲ生ジタルトキハ直ニ之ヲ測量シテ其ノ地積ヲ定ム

土地臺帳ニ登録セラレタル無租地ガ有租地ト爲リタルトキハ直ニ其ノ地積ヲ改測ス但シ其ノ地積ニ異動ナシト認ムルトキハ之ヲ省略スルコトヲ得

第十九條 國有財産法第二十一條ノ規定ニ依リ賣拂又ハ讓與ノ豫約ヲ爲シタル土地ニシテ開拓ノ事業成功ニ因リ賣拂又ハ讓與ヲ受ケ有租地ト爲リタルモノニ付テハ土地所有者ノ申請ニ依リ有租地下爲リタル年及其ノ翌年ヨリ二十年ノ開拓減租年期ヲ許可シ年期中ハ其ノ原地（開拓前ノ土地）相當ノ賃賃價格ニ依リ地租ヲ徵收ス
前項ノ年期滿了スルモ尙地味成熟セザル土地ニ付テハ更ニ十年内ノ年期延長ヲ許可スルコトヲ得

宅地又ハ鑛泉地ト爲リタル開拓地ニ付テハ其ノ情況ニ依リ稅務署長ハ開拓減租年期ヲ短縮スルコトヲ得（一）

第二十條 國有財産法第二十一條ノ規定ニ依リ賣拂又ハ讓與ノ豫約ヲ爲シタル土地ニシテ埋立（干拓ヲ含ム）ノ事業成功ニ因リ賣拂又ハ讓與ヲ受ケ有租地ト爲リタルモノ又ハ公有水面埋立法第二十四條若ハ第五十條ノ規定ニ依リ埋立地ノ所有權ヲ取得シ有租地ト爲リタル土地ニ付テハ土地所有者ノ申請ニ依リ有租地ト爲リタル年及其ノ翌年ヨリ六十年ノ埋立免租年期ヲ許可ス前項ノ年期滿了スルモ尙地味成熟セザル土地ニ付テハ更ニ十年内ノ年期延長ヲ許可スルコトヲ得

宅地又ハ鑛泉地ト爲リタル埋立地ニ付テハ其ノ情況ニ依リ稅務署長ハ埋立免租年期ヲ短縮スルコトヲ得（一）

第二十一條 前二條ノ規定ニ依リ開拓減租年期又ハ埋立免租年期ノ許可ヲ受ケントスル者ハ有租地ト爲リタル日ヨリ六十日内ニ開拓減租年期又ハ埋立免租年期延長ノ許可ヲ受ケントスル者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ稅務署長ニ申請スベシ

第二十二條 開拓減租年期中ニ於テ地類變換ヲ爲シタルトキハ開拓減租年期ハ消滅ス
開拓減租年期中ニ於テ地目變換ヲ爲シタルトキハ其ノ地目ヲ修正スルモ其ノ賃賃價格ハ之ヲ修

正セズ

埋立免租年期中ニ於テ地目變換、地類變換又ハ開墾ニ該當スル土地ノ異動アルモ地目變換、地類變換又ハ開墾ナキモノト看做ス此ノ場合ニ於テハ免租年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ地目ヲ修正ス

第二十三條 開拓減租年期地又ハ埋立免租年期地ニ付テハ土地所有者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ年期滿了申告書ヲ稅務署長ニ提出スベシ

第二十四條 無租地ガ有租地ト爲リタルトキハ直ニ其ノ賃貸價格ヲ設定ス

開拓減租年期地ニ付テハ有租地ト爲リタルトキ直ニ原地相當ノ賃貸價格ヲ設定シ開拓減租年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ賃貸價格ヲ修正ス

埋立免租年期地ニ付テハ其ノ年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ賃貸價格ヲ設定ス

第二十五條 開拓減租年期又ハ埋立免租年期ノ滿了ニ因リ賃貸價格ヲ設定シ又ハ修正スル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ地積ヲ改測ス

第二十六條 無租地ガ有租地ト爲リタルトキハ賃貸價格ヲ設定(第二十四條第三項ノ設定ヲ含ム)シタル年ノ翌年分ヨリ地租ヲ徵收ス

開拓減租年期ノ滿了ニ因リ賃貸價格ヲ修正シタル土地ニ付テハ其ノ修正ヲ爲シタル年ノ翌年分

ヨリ修正賃貸價格ニ依リ地租ヲ徵收ス

第二十七條 有租地ガ無租地ト爲リタルトキハ其ノ申告ヲ要スルモノニ付テハ申告アリタル後ニ開始スル納期ヨリ、其ノ申告ヲ要セザルモノニ付テハ稅務署長ガ其ノ事實ヲ認メタル後ニ開始スル納期ヨリ地租ヲ徵收セズ

第二節 分筆及合筆

第二十八條 本法ニ於テ分筆ト稱スルハ一筆ノ土地ヲ數筆ノ土地ト爲スヲ謂ヒ合筆ト稱スルハ數筆ノ土地ヲ一筆ノ土地ト爲スヲ謂フ

第二十九條 分筆又ハ合筆ヲ爲サントスルトキハ土地所有者ハ之ヲ稅務署長ニ申告スベシ

第三十條 一筆ノ土地ノ一部ガ左ノ各號ノ一ニ該當スルニ至リタルトキハ前條ノ申告ナキ場合ニ於テモ稅務署長ハ其ノ土地ヲ分筆ス

- 一 別地目ト爲ルトキ
- 二 無租地ガ有租地ト爲リ又ハ有租地ガ無租地ト爲ルトキ
- 三 所有者ヲ異ニスルトキ
- 四 賃權又ハ百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ノ目的ト爲ルトキ
- 五 地番區域ヲ異ニスルトキ

第三十一條 分筆シタル土地ニ付テハ分筆前ノ地番ニ符號ヲ附シテ各筆ノ地番ヲ定ム

合筆シタル土地ニ付テハ合筆前ノ地番中ノ首位ノモノヲ以テ其ノ地番トス

特別ノ事情アルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラズ適宜ノ地番ヲ定ムルコトヲ得

第三十二條 分筆ヲ爲シタルトキハ測量シテ各筆ノ地積ヲ定ム

合筆ヲ爲シタルトキハ合筆前ノ各筆ノ地積ヲ合算シタルモノヲ以テ其ノ地積トス

第三十三條 分筆ヲ爲シタルトキハ各筆ノ品位及情況ニ應ジ分筆前ノ賃貸價格ヲ配分シテ其ノ賃貸價格ヲ定ム

合筆ヲ爲シタルトキハ合筆前ノ各筆ノ賃貸價格ヲ合算シタルモノヲ以テ其ノ賃貸價格トス

第三節 開墾

第三十四條 本法ニ於テ開墾ト稱スルハ第二類地ヲ第一類地ト爲スヲ謂フ

第三十五條 開墾成功シタルトキハ土地所有者ハ三十日以内ニ之ヲ稅務署長ニ申告スベシ

第三十六條 開墾ニ著手シタル土地ニ付テハ土地所有者ノ申請ニ依リ開墾著手ノ年及其ノ翌年ヨリ二十年ノ開墾減租年期ヲ許可シ年期中ハ原地(開墾前ノ土地)相當ノ賃貸價格ニ依リ地租ヲ徵收ス但シ地類變換ヲ爲シタル後五年内ニ開墾ニ著手シタル土地ニ付テハ之ヲ許可セズ
二十年内ニ成功シ能ハザル開墾地ニ付テハ前項ノ年期ハ開墾著手ノ年及其ノ翌年ヨリ四十年ト

ス

前項ノ年期滿了スルモ尙地味成熟セザル土地ニ付テハ更二十年内ノ年期延長ヲ許可スルコトヲ

得

宅地又ハ鑛泉地ト爲ス開墾地ニ付テハ其ノ情況ニ依リ稅務署長ハ開墾減租年期ヲ短縮スルコト

ヲ得

第三十七條 前條ノ規定ニ依リ開墾減租年期ノ許可ヲ受ケントスル者ハ開墾著手ノ日ヨリ三十日

内ニ、開墾減租年期延長ノ許可ヲ受ケントスル者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ稅務署

長ニ申請スベシ

第三十八條 開墾減租年期中ニ於テ開墾成功シタルトキ又ハ其ノ成功地ニ付地目變換ヲ爲シタル

トキハ其ノ地目ヲ修正スルモ其ノ賃貸價格ハ之ヲ修正セズ

開墾減租年期中ニ於テ其ノ原地ニ付地目變換ヲ爲シタルトキ又ハ其ノ成功地ニ付地類變換ヲ爲

シタルトキハ開墾減租年期ハ消滅ス

第三十九條 開墾減租年期地ニ付テハ土地所有者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ年期滿了

申告書ヲ稅務署長ニ提出スベシ

第四十條 開墾成功シタルトキハ(開墾減租年期中ナルト否トヲ問ハズ)直ニ其ノ地目ヲ修正ス

第四十一條 開墾成功シタルトキハ開墾減租年期地ヲ除クノ外直ニ其ノ賃貸價格ヲ修正ス

開墾減租年期地ニ付テハ其ノ年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ賃貸價格ヲ修正ス但シ年期滿了スルモ尙開墾成功セザル土地ニ付テハ開墾成功シタルトキ直ニ其ノ賃貸價格ヲ修正ス

第四十二條 開墾ニ因リ賃貸價格ヲ修正スル場合ニ於テハ其ノ地積ヲ改測ス但シ其ノ地積ニ異動ナシト認ムルトキハ之ヲ省略スルコトヲ得

第四十三條 開墾ニ因リ地目又ハ賃貸價格ヲ修正シタル土地ニ付テハ其ノ修正ヲ爲シタル年ノ翌年分ヨリ修正地目又ハ修正賃貸價格ニ依リ地租ヲ徵收ス

第四節 地目變換及地類變換

第四十四條 本法ニ於テ地目變換ト稱スルハ第一類地中又ハ第二類地中ノ各地目ヲ變更スルヲ謂ヒ地類變換ト稱スルハ第一類地ヲ第二類地ト爲スヲ謂フ

第四十五條 地目變換又ハ地類變換ヲ爲シタルトキハ土地所有者ハ三十日內ニ之ヲ稅務署長ニ申告スベシ

第四十六條 二十年内ニ成功シ能ハザル地目變換地ニ付テハ土地所有者ノ申請ニ依リ地目變換著手ノ年及其ノ翌年ヨリ四十年ノ地目變換減租年期ヲ許可シ年期中ハ原地(變換前ノ土地)相當ノ賃貸價格ニ依リ地租ヲ徵收ス

前項ノ年期滿了スルモ尙地味成熟セザル土地ニ付テハ更二十年內ノ年期延長ヲ許可スルコトヲ得
宅地又ハ鑛泉地ニ變換スル土地ニ付テハ其ノ情況ニ依リ稅務署長ハ地目變換減租年期ヲ短縮スルコトヲ得

第四十七條 前條ノ規定ニ依リ地目變換減租年期ノ許可ヲ受ケントスル者ハ地目變換著手ノ日ヨリ三十日內ニ、地目變換減租年期延長ノ許可ヲ受ケントスル者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ稅務署長ニ申請スベシ

第四十八條 地目變換減租年期中ニ於テ其ノ原地又ハ變換地ニ付地目變換ヲ爲シタルトキハ其ノ地目ヲ修正スルモ其ノ賃貸價格ハ之ヲ修正セズ

地目變換減租年期中ニ於テ地類變換ヲ爲シタルトキハ地目變換減租年期ハ消滅ス

第四十九條 地目變換減租年期地ニ付テハ土地所有者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ年期滿了申告書ヲ稅務署長ニ提出スベシ

第五十條 地目變換又ハ地類變換ヲ爲シタルトキハ(地目變換減租年期中ナルト否トヲ問ハズ)直ニ其ノ地目ヲ修正ス

第五十一條 地目變換又ハ地類變換ヲ爲シタルトキハ地目變換減租年期地ヲ除クノ外直ニ其ノ賃

貸價格ヲ修正ス

地目變換減租年期地ニ付テハ其ノ年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ貸價格ヲ修正ス但シ年期滿了スルモ尙地目變換セザル土地ニ付テハ地目變換シタルトキ直ニ其ノ貸價格ヲ修正ス

第五十二條 地目變換又ハ地類變換ニ因リ貸價格ヲ修正スル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ其ノ地積ヲ改測ス

第五十三條 地目變換又ハ地類變換ニ因リ地目又ハ貸價格ヲ修正シタル土地ニ付テハ其ノ修正ヲ爲シタル年ノ翌年分ヨリ修正地目又ハ修正貸價格ニ依リ地租ヲ徵收ス

第五節 荒地免租

第五十四條 本法ニ於テ荒地ト稱スルハ災害ニ因リ地形ヲ變ジ又ハ作土ヲ損傷シタル土地ヲ謂フ

第五十五條 荒地ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ荒地ト爲リタル年及其ノ翌年ヨリ十五年内ノ荒地免租年期ヲ許可ス

前項ノ年期滿了スルモ尙荒地ノ形状ヲ存スルモノニ付テハ更ニ十五年内ノ年期延長ヲ許可スルコトヲ得

海、湖又ハ河川ノ狀況ト爲リタル荒地ニ付テハ前項ノ延長年期ハ二十年内トス其ノ年期滿了スルモ尙、湖又ハ河川ノ狀況ニ在ルモノハ本法ノ適用ニ付テハ海、湖又ハ河川ト爲リタルモノト

看做ス

第五十六條 前條ノ規定ニ依リ荒地免租年期ノ許可ヲ受ケントスル者ハ稅務署長ニ申請スベシ

荒地免租年期延長ノ許可ヲ受ケントスル者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ稅務署長ニ申請スベシ

第五十七條 荒地免租年期地ニ付テハ免租年期許可ノ申請アリタル後ニ開始スル納期ヨリ地租ヲ

徵收セズ

第五十八條 荒地免租年期中ノ土地ガ再ビ荒地ト爲リ免租年期ノ許可ヲ受ケタルトキハ前ノ年期ハ消滅ス

第五十九條 開拓減租年期、埋立免租年期、開墾減租年期又ハ地目變換減租年期中ノ土地ニ付荒地免租年期ヲ許可シタルトキハ其ノ許可ヲ爲シタル年ヨリ荒地免租年期滿了ニ至ル迄ハ開拓減租年期、埋立免租年期、開墾減租年期又ハ地目變換減租年期ハ其ノ進行ヲ止ム

前項ノ規定ハ他ノ法律ニ依リ一定ノ期間地租ノ全部又ハ一部ヲ免除シタル土地ニ付荒地免租年期ヲ許可シタル場合ニ之ヲ準用ス

第六十條 荒地免租年期中ニ於テ地目變換、地類變換又ハ開墾ニ該當スル土地ノ異動アルモ地目變換、地類變換又ハ開墾ナキモノト看做ス此ノ場合ニ於テハ免租年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ

地目ヲ修正ス

第六十一條 荒地免租年期地ニ付テハ納稅義務者ハ年期ノ滿了スル年ノ六月三十日迄ニ年期滿了
申告書ヲ稅務署長ニ提出スベシ

第六十二條 荒地免租年期地ニ付テハ其ノ年期ノ滿了スル年ニ於テ其ノ賃賃價格ヲ設定ス

第六十三條 荒地免租年期ノ滿了ニ因リ賃賃價格ヲ設定スル場合ニ於テ必要アリト認ムルトキハ
其ノ地積ヲ改測ス

第六十四條 荒地免租年期ノ滿了ニ因リ賃賃價格ヲ設定シタル土地ニ付テハ其ノ設定ヲ爲シタル
年ノ翌年分ヨリ地租ヲ徵收ス

第三章 災害地免租

第六十五條 北海道又ハ府縣ノ全部又ハ一部ニ亙ル災害又ハ天候不順ニ因リ收穫皆無ニ歸シタル
田畑ニ付テハ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ年分地租ハ之ヲ免除ス

第六十六條 地目變換若ハ開墾成功ノ申告アリタル土地又ハ耕地整理工事完了シ賃賃價格配賦ノ
申出アリタル土地ニシテ未ダ土地臺帳ヲ更正セザルモノニ付テハ其ノ成功地目ガ田畑ナルトキ
ハ命令ノ定ムル所ニ依リ前條ノ規定ヲ準用ス

第六十七條 前二條ノ規定ニ依リ地租ノ免除ヲ受ケントスル者ハ被害現狀ノ存スル間ニ於テ其ノ

事實ヲ明ニシテ稅務署長ニ申請スベシ

第六十八條 前條ノ申請アリタルトキハ被害ノ調査中其ノ年分地租ノ徵收ヲ猶豫スルコトヲ得

第六十九條 第六十五條又ハ第六十六條ノ規定ニ依リ免除シタル地租ハ法律上總テノ納稅資格中
ヨリ之ヲ控除セズ

第四章 小農耕地免租(一)

第七十條 田畑地租ノ納期開始ノ時ニ於テ納稅義務者ノ住所地市町村及隣接市町村内ニ於ケル田
畑賃賃價格ノ合計金額ガ其ノ同居家族ノ分ト合算シ二百圓未滿ナルトキハ納稅義務者ノ申請ニ
依リ其ノ田畑ノ當該納期分地租ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ免除ス但シ耕作セザル田畑ニ付テ
ハ此ノ限ニ在ラズ(一)

民法施行前ヨリ引續キ存スル永小作權ニ付其ノ設定ノ當時舊來ノ慣行ニ依リテ小作料支拂ノ外
當該田畑ノ地租ノ全額ヲ永小作權者ニ於テ負擔スルコトヲ約シタル田畑ニ關シテハ命令ノ定ム
ル所ニ依リ永小作權者ヲ所有者ト看做シテ前項ノ規定ヲ適用ス

第七十一條 前條ノ規定ニ依リ地租ノ免除ヲ受ケントスル者ハ毎年三月中ニ住所地市町村ヲ經由
シ稅務署長ニ申請スベシ

前項ノ申請期間經過後新ニ前條ノ規定ニ該當スルニ至リタル田畑ニ付テハ次ノ納期開始前ニ於

テ前項ノ申請ヲ爲スコトヲ得

第五章 地租徵收

第七十二條 稅務署長ハ土地ノ異動其ノ他地租徵收ニ關シ必要ト認ムル事項ヲ市町村ニ通知スベシ

第七十三條 地租ハ各納稅義務者ニ付同一市町村内ニ於ケル田ノ賃賃價格ノ合計金額ト田以外ノ土地ノ賃賃價格ノ合計金額トニ依リ各別ニ算出シ之ヲ徵收ス但シ合計金額ガ五圓ニ滿タザルモノニ付テハ地租ヲ徵收セズ(一)

第七十四條 市町村ハ地租ノ納期毎ニ其ノ納期開始前十五日迄ニ賃賃價格及地租ノ總額並ニ其ノ各納期ニ於ケル納額ヲ稅務署長ニ報告スベシ但シ前報告後異動ナキトキハ此ノ限ニ在ラズ
前項ノ報告後納期開始迄ニ報告事項ニ異動ヲ生ジタルトキハ直ニ其ノ異動額ヲ稅務署長ニ報告スベシ

第七十五條 市町村ハ第七十條ノ規定ニ依リ地租ヲ免除スル田畑ノ賃賃價格ノ總額ヲ前條ノ例ニ準ジ稅務署長ニ報告スベシ

第七十六條 大藏大臣ハ稅務署長又ハ其ノ代理官ヲシテ隨時市町村ニ於ケル國稅徵收ニ關スル事務ヲ監督セシムベシ

第六章 雜則

第七十七條 他ノ法律ニ依リ一定ノ期間地租ヲ免除シタル土地ニ付テハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外第五十七條及第六十條乃至第六十四條ノ規定ヲ準用ス

第七十八條 稅務署長土地ノ異動ニ因リ地番、地目、地積又ハ賃賃價格ヲ土地臺帳ニ登録シタルトキ又ハ登録ヲ變更シタルトキハ土地所有者及納稅義務者ニ通知スベシ

第七十九條 納稅義務者其ノ土地所在ノ市町村内ニ現住セザルトキハ地租ニ關スル事項ヲ處理セシムル爲其ノ市町村内ニ現住スル者ニ就キ納稅管理人ヲ定メ當該市町村長ニ申告スベシ

第八十條 土地所有者ニ變更アリタル場合ニ於テハ舊所有者ガ爲スベカリシ申告ハ所有者ノ變更アリタル日ヨリ三十日內ニ新所有者ヨリ之ヲ爲スベシ

第八十一條 本法ニ依リ土地所有者ヨリ爲スベキ申告又ハ申請ハ質權ノ目的タル土地又ハ百年ヨリ長キ存續期間ノ定アル地上權ノ目的タル土地ニ付テハ土地臺帳ニ登録セラレタル質權者又ハ

地上權者ヨリ之ヲ爲スコトヲ得

第八十二條 本法ニ依リ申告ヲ爲スベキ義務ヲ有スル者其ノ申告ヲ爲サザルトキハ五十圓以下ノ過料ニ處ス(一・第二項ヲ削ル)

第八十三條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ依リ地租ヲ逋脫シタル者ハ其ノ逋脫シタル稅金ノ五倍ニ相

當スル罰金又ハ科料ニ處シ直ニ其ノ地租ヲ徵收ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出デタル者ハ其ノ罪ヲ問ハズ

前項ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒズ

第八十四條 本法ニ依リ申告ヲ爲スベキ義務ヲ有スル者其ノ申告ヲ爲サズ仍テ地租ニ不足額アルトキハ直ニ之ヲ徵收ス

第八十五條 前二條ノ規定ニ依リ地租ヲ徵收スル場合ニ於テハ第七十三條ノ規定ニ拘ラズ當該土地一筆毎ニ其ノ地租ヲ算出ス

第八十六條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ土地ノ検査ヲ爲シ又ハ土地ノ所有者、質權者、地上權者其ノ他利害關係人ニ對シ必要ナル事項ヲ質問スルコトヲ得

前項ノ場合ニ於テ土地ノ検査ヲ拒ミ又ハ之ヲ妨ゲタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第八十七條 市制第六條又ハ第八十二條第三項ノ市ニ於テハ本法中市ニ關スル規定ハ區ニ、市長ニ關スル規定ハ區長ニ之ヲ適用ス

第八十八條 本法ハ國有地ニ之ヲ適用セズ

第八十九條 府縣、市町村其ノ他ノ公共團體ハ第二條ノ規定ニ依リ地租ヲ課セザル土地ニ租稅其ノ他ノ公課ヲ課スルコトヲ得ズ但シ所有者以外ノ者同條第一號又ハ第二號ノ土地ヲ使用收益スル場合ニ於テ其ノ土地ニ付使用者ニ租稅其ノ他ノ公課ヲ課スルハ此ノ限ニ在ラズ

附 則

第九十條 本法ハ昭和六年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ昭和六年分地租ニ限り第十條ノ規定中百分ノ三・八トアルハ百分ノ四、第十一條ノ規定中宅地租第一期其ノ年七月一日ヨリ三十一日限トアルハ其ノ年十一月一日ヨリ三十日限、其ノ他第一期其ノ年九月一日ヨリ三十日限トアルハ翌年一月一日ヨリ三十一日限、其ノ他第二期其ノ年十一月一日ヨリ三十日限トアルハ翌年三月一日ヨリ三十一日限、第七十一條第一項ノ規定中三月中トアルハ十二月中トス

第九十一條 左ノ法律ハ之ヲ廢止ス但シ昭和五年分以前ノ地租ニ關シテハ仍舊法ニ依ル

地租條例

災害地租免除法

宅地地價修正法

明治七年第百二十號布告地所名稱區別

明治三十四年法律第三十號

明治三十四年法律第三十一號

明治三十七年法律第十二號

明治三十七年法律第十六號

大正十五年法律第四十七號

第九十二條 土地賃賃價格調査法ニ依リ賃賃價格ノ調査ヲ爲シタル土地ニ付テハ同法ニ依リ調査シタル賃賃價格ヲ以テ本法施行ノ際ニ於ケル賃賃價格トス但シ其ノ賃賃價格ニ依リ算出シタル本法ノ地租額ガ從前ノ地價ニ依リ算出シタル舊法ノ地租額ノ三倍八割ヲ超ユル土地ニ在リテハ舊法ノ地租額ノ三倍八割ニ相當スル金額ヲ百分ノ三・八ヲ以テ除シタル金額ヲ以テ其ノ賃賃價格トス

第九十三條 大正十五年四月一日後本法施行前ニ於テ地價ヲ設定シ又ハ修正シタル土地（免租年期又ハ低價年期ノ滿了ニ因リ原地價ニ復シタルモノヲ含ム）ニ付テハ第九條第三項ノ例ニ準ジ其ノ賃賃價格ヲ定ム
大正十五年四月一日後本法施行前ニ於テ分筆又ハ合筆ヲ爲シタル土地ニ付テハ第三十三條ノ例ニ準ジ前條ノ賃賃價格ヲ配分又ハ合算シ其ノ賃賃價格ヲ定ム

第九十四條 舊法ニ依リ低價年期ノ許可ヲ受ケタル土地ニシテ本法施行ノ際未ダ原地價ニ復セザルモノニ付テハ第九條第三項ノ例ニ準ジ其ノ賃賃價格ヲ定ム

第九十五條 前三條ノ規定ニ依リ賃賃價格ヲ定メタル土地ニ付テハ昭和六年分ヨリ本法ニ依リ地租ヲ徵收ス

第九十六條 本法施行前ニ於ケル土地ノ異動中本法施行ノ際未ダ舊法ニ依リ地價ノ設定又ハ修正其ノ他ノ處分ヲ爲サザルモノニシテ本法中之ニ相當スル規定アルモノニ關シテハ本法ヲ適用ス但シ第九十一條但書ノ規定ノ適用ヲ妨ゲズ

第九十七條 舊法ニ依ル届出又ハ申請ニシテ本法中之ニ相當スル規定アルモノハ之ヲ本法ニ依ル申告又ハ申請ト看做ス

第九十八條 舊法ニ依リ開墾ノ届出アリタル土地ニシテ本法施行ノ際開墾著手後未ダ二十年ヲ經過セザルモノハ第三十六條第一項ノ規定ニ依リ開墾減租年期ヲ許可セラレタルモノト看做ス但シ地類變換ヲ爲シタル後五年内ニ開墾ヲ爲シタル土地ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第九十九條 舊法ニ依リ免租年期、減租年期又ハ地價据置年期ノ許可ヲ受ケタル土地ニシテ本法施行ノ際未ダ其ノ年期ノ滿了セザルモノハ左ノ區分ニ從ヒ本法ニ依リ免租年期又ハ減租年期ヲ許可セラレタルモノト看做ス

- 一 地租條例第十六條第三項ノ歛下年期ハ第三十六條第二項ノ開墾減租年期トス
- 二 地租條例第十六條第四項ノ歛下年期ハ第十九條第一項ノ開拓減租年期トス
- 三 地租條例第十六條第五項ノ新開免租年期ハ第二十條第一項ノ埋立免租年期トス
- 四 地租條例第十六條第六項ノ地價据置年期ハ第四十六條第一項ノ地目變換減租年期トス
- 五 明治三十四年法律第三十號ノ年期延長ハ前各號ノ例ニ準ジ第十九條第二項、第二十條第二項、第三十六條第三項又ハ第四十六條第二項ノ年期延長トス
- 六 地租條例第二十條ノ荒地免租年期ハ第五十五條第一項ノ荒地免租年期トス
- 七 地租條例第二十三條又ハ第二十四條ノ免租繼年期ハ荒地ノ種類ニ從ヒ第五十五條第二項又ハ第三項ノ年期延長トス

前項ノ年期ハ舊法ニ依リ許可セラレタル年期ノ殘年期間ノ經過スル年ノ翌年ニ於テ滿了ス

第二條 地積ハ第七條ノ規定ニ拘ラズ當分ノ内左ノ各號ノ規定ニ依リ之ヲ定ム

- 一 宅地及鑛泉地ノ地積ハ六尺平方ヲ坪、坪ノ十分ノ一ヲ合、合ノ十分ノ一ヲ勾トシテ之ヲ定メ勾未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ
- 二 宅地及鑛泉地以外ノ土地ノ地積ハ六尺平方ヲ步、三十步ヲ畝、十畝ヲ段、十段ヲ町トシテ之ヲ定メ步未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ但シ一筆ノ地積一步未滿ナルモノニ付テハ步ノ十分ノ一

ヲ合、合ノ十分ノ一ヲ勾トシテ之ヲ定メ勾未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ

第一條 舊法ノ土地臺帳ハ之ヲ本法ノ土地臺帳ト看做ス

第二條 小笠原島及伊豆七島ノ地租ニ付テハ當分ノ内仍從前ノ例ニ依ル

附 則 (一)

本法ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ昭和十四年分以前ノ地租ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

土地賃賃價格改訂法第四條ノ規定中從前ノ賃賃價格ニ依ル地租額ノ四倍トアルハ昭和十五年分地租ニ付テハ從前ノ賃賃價格ノ百分ノ二ニ相當スル金額ノ四倍トス

○地租法施行規則 (昭和六年四月一日勅令第四十七號)

改正沿革 昭和十三年三月四日勅令第 百 四 號 (1)

昭和十五年四月一日勅令第百四十四號 (2)

第一章 總則

第一條 地租法第二條第一號及第二號ノ規定ニ依リ左ノ公共團體ヲ指定ス

- 一 府縣組合、市町村組合、町村組合、市町村内ノ區、北海道地方費
- 二 市町村學校組合、町村學校組合、學區
- 三 水利組合、水利組合聯合、北海道士功組合

第二條 土地ノ所有權、質權又ハ地上權ノ得喪變更ニ關スル事項ハ登記所ヨリ通知アルニ非ザレバ土地臺帳ニ之ヲ登録セズ但シ左ノ場合ニ於テハ此ノ限ニ在ラズ

- 一 新ニ土地臺帳ニ登録スベキ土地ヲ生ジタルトキ
- 二 未登記ノ土地ガ土地臺帳ニ登録ヲ要セザル土地ト爲リタルトキ
- 三 未登記ノ土地ガ收用セラレタルトキ

第三條 土地臺帳ニ登録セラレタル土地所有者、質權者又ハ地上權者其ノ住所ニ異動ヲ生ジタルトキ又ハ其ノ氏名若ハ名稱ヲ改メタルトキハ遲滯ナク之ヲ稅務署長ニ申告スベシ

第四條 土地臺帳謄本ノ交付ヲ受ケントスル者ハ土地一筆ニ付十錢ノ手数料ヲ納メ稅務署長ニ之ヲ請求スベシ

前項ノ手数料ハ收入印紙ヲ以テ之ヲ納ムベシ

謄本ハ送付ニ要スル郵便切手ヲ提供シテ之ガ郵送ヲ求ムルコトヲ得
國有地又ハ御料地ノ拂下又ハ讓與ニ係ル土地ニシテ未登記ノモノニ付テハ謄本ノ交付ヲ請求スルコトヲ得ズ

土地臺帳謄本ノ書式ハ大藏大臣之ヲ定ム

第五條 北海道、鹿兒島縣大島郡及沖繩縣ニ於ケル地租ハ左ノ納期ニ於テ之ヲ徵收ス(一)

北海道

第一期 其ノ年十二月一日ヨリ三十日限 年額ノ二分ノ一(二)

第二期 翌年三月一日ヨリ三十一日限 年額ノ二分ノ一(二)

鹿兒島縣大島郡(十島村ヲ除ク)

翌年五月一日ヨリ三十一日限 年額全部(二)

鹿兒島縣大島郡十島村

翌年五月一日ヨリ六月三十日限 年額全部(二)

沖繩縣

翌年五月一日ヨリ三十一日限 年額全部(二)

第二章 土地ノ異動

第六條 土地ノ異動ニ關スル申告書（年期滿了申告書ヲ含む）ニハ異動ノ種類ヲ表示シ原地ノ所在、地番、地目、地積及賃貸價格（無租地及免租年期地ニ付テハ賃貸價格ヲ除ク）並ニ異動シタル地番、地目、地積及賃貸價格ヲ記載スベシ

前項ノ申告書中新ニ土地臺帳ニ登錄スベキ土地ニ關スル申告書又ハ分筆ノ申告書ニハ地積ノ測量圖ヲ添附スベシ其ノ他ノ申告書ニシテ之ニ記載シタル異動地ノ地積ガ其ノ原地ノ地積ト同一ナラザルモノニ付亦同ジ

第七條 減租年期又ハ免租年期ノ申請書ニハ年期ノ種類ヲ表示シ土地ノ所在、地番、地目、地積及賃貸價格（無租地及免租年期地ニ付テハ賃貸價格ヲ除ク）ヲ記載シ尙左ノ事項ヲ附記スベシ

- 一 開拓減租年期又ハ埋立免租年期ニ付テハ有租地ト爲リタル事由
- 二 二十年ノ開墾減租年期ニ付テハ開墾ノ豫定地目及著手ノ日
- 三 四十年ノ開墾減租年期又ハ地目變換減租年期ニ付テハ開墾又ハ變換ノ豫定地目、著手ノ日及事業計畫
- 四 荒地免租年期ニ付テハ荒地ト爲リタル事由、被害ノ狀況及許可ヲ受ケントスル年期
- 五 前各號ノ年期ノ延長ニ付テハ土地ノ狀況及許可ヲ受ケントスル年期

第八條 開墾減租年期又ハ地目變換減租年期ノ許可ヲ受ケタル土地ニ付開墾若ハ變換ノ豫定地目

ヲ變更シ又ハ開墾若ハ變換ヲ廢止シタルトキハ遲滞ナク稅務署長ニ之ヲ申告スベシ

第三章 災害地免租

第九條 災害地免租ノ申請書ニハ收穫皆無ニ歸シタル事由、被害ノ狀況、土地ノ所在、地番、地目、地積及賃貸價格ヲ記載スベシ

第十條 災害地免租ノ申請ヲ爲ス者ハ稅務署長ノ承認ヲ受クル迄收穫皆無ノ事實ヲ證スルニ足ルベキ作毛ヲ存置スベシ

第十一條 地租法第六十六條ノ規定ニ依ル地租ノ免除ハ左ノ各號ノ定ムル所ニ依ル

- 一 地目變換地又ハ開墾地ニ在リテハ原地（變換又ハ開墾前ノ土地）ノ地租ヲ免除ス
- 二 耕地整理地ニ在リテハ收穫皆無ニ歸シタル換地ニ相當スル從前ノ土地ノ地租ヲ免除ス

第四章 小農耕地免租（二）

第十二條 地租法第七十條第二項ニ規定スル永小作權者ニシテ同條第一項ノ規定ノ適用ヲ受ケントスル者ハ毎年三月中ニ左ノ事項ヲ田畑所在ノ市町村長ニ申告スベシ

- 一 永小作權ノ目的タル田畑ノ所在、地番、地目、地積及賃貸價格
- 二 田畑所有者ノ住所及氏名
- 三 永小作權設定ノ年月日

前項ノ申告期間經過後新ニ地租法第七十條第一項ノ規定ニ該當スルニ至リタル場合ニ於テハ次ノ納期開始前ニ於テ前項ノ申告ヲ爲スコトヲ得

第十三條 市町村長ニ於テ必要アリト認ムルトキハ前條ノ申告ヲ爲シタル者ニ對シ永小作權ノ設定ヲ證スベキ證書其ノ他必要ナル書類ノ呈示又ハ提出ヲ求ムルコトヲ得

第十四條 第十二條ノ申告ヲ爲シタル永小作權者ハ地租法第七十條第一項ノ規定ノ適用ニ關シテハ之ヲ當該田畑ノ所有者ト看做ス

第十五條 地租法第七十一條ノ規定ニ依ル地租免除ノ申請書ニハ土地ノ所在、地番及地目ヲ記載スベシ但シ申請者ガ其ノ住所地及隣接市町村内ニ於ケル自己ノ田畑ノ全部ニ付申請ヲ爲ス場合ニ於テハ其ノ旨ヲ記載シ各筆ノ記載ヲ省略スルコトヲ得

第十六條 市町村ハ其ノ市町村内ニ於ケル田畑ニ付地租ヲ納ムベキ者（地租法第七十條第二項ノ規定ニ依リ所有者ト看做サレタル永小作權者ヲ含ム）ノ住所ガ隣接市町村内ニ在ルトキハ各人別田畑ノ賃貸價格合計金額ヲ毎年三月中ニ其ノ住所地市町村ニ通知スベシ

前項ノ通知後田畑地租ノ各納期開始迄ニ通知事項ニ異動ヲ生ジタルトキハ直ニ之ヲ住所地市町村ニ通知スベシ

第十七條 市町村ハ隣接市町村内ノ田畑ニ付地租法第七十一條ノ申請ヲ受ケタル場合ニ於テ申請

者ノ住所地市町村及隣接市町村内ニ於ケル田畑賃貸價格ノ合計金額ガ其ノ同居家族ノ分ト合算シ二百圓未満ナルトキハ其ノ旨ヲ田畑所在ノ市町村ニ通知スベシ

前項ノ通知後田畑地租ノ各納期開始ノ時迄ニ通知事項ニ異動ヲ生ジタルトキハ之ヲ田畑所在ノ市町村ニ通知スベシ

第五章 地租徵收

第十八條 市町村ハ其ノ市町村内ノ田畑ニ付地租法第七十一條ノ申請又ハ前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ同法第七十條ノ規定ニ依リ地租ヲ免除スル田畑ヲ調査シ同法第七十五條ノ報告ヲ爲スベシ

第十九條 市町村ハ其ノ市町村内ノ土地ニ付土地臺帳ノ副本及地租名寄帳ヲ設備スベシ
地租名寄帳ニ關シ必要ナル事項ハ大藏大臣之ヲ定ム

第六章 雜則

第二十條 地租法以外ノ法律ニ依リ一定ノ期間地租ノ全部又ハ一部ヲ免除スル土地ニ付テハ別段ノ規定アル場合ヲ除クノ外第六條及第七條ノ規定ヲ準用ス

第二十一條 地租法第七十八條ノ規定ニ依ル通知及減租又ハ免租ノ申請ニ對スル許否ノ通知ハ土地所在ノ市町村ヲ經由スベシ

第二十二條 市制第六條又ハ第八十二條第三項ノ市ニ於テハ本令中市ニ關スル規定ハ區ニ、市長ニ關スル規定ハ區長ニ之ヲ適用ス
町村制ヲ施行セザル地ニ於テハ本令中町村ニ關スル規定ハ町村ニ準ズベキモノニ、町村長ニ關スル規定ハ町村長ニ準ズベキモノニ之ヲ適用ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ昭和六年分地租ニ限り第五條ノ規定中北海道宅地租第一期其ノ年八月一日ヨリ三十一日限トアルハ其ノ年十一月一日ヨリ三十日限、其ノ他第一期其ノ年十一月一日ヨリ三十日限トアルハ翌年一月一日ヨリ三十一日限、沖繩縣那覇市、首里市、島尻郡、中頭郡、國頭郡宅地租及田租其ノ年八月一日ヨリ三十一日限トアルハ翌年一月一日ヨリ三十一日限、沖繩縣宮古郡(平良村字鹽川、仲坊、水納ヲ除ク)、八重郡(八重山村字波照間、與那國ヲ除ク)田租其ノ年七月一日ヨリ三十一日限トアルハ翌年一月一日ヨリ三十一日限、第十六條第一項ノ規定中三月中トアルハ十二月中トス

地租條例施行規則、土地臺帳規則、明治三十八年勅令第五百十九號及明治四十四年勅令第九十二號ハ之ヲ廢止ス但シ昭和五年分以前ノ地租ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

附 則(一)

本令ハ昭和十五年分地租ヨリ之ヲ適用ス

○地租法施行細則 (昭和六年四月一日大藏省令第六號)

沿革 昭和十五年四月一日(大藏省令第十二號)

- 第一條 土地臺帳ハ第一號書式ニ依リ之ヲ調製スベシ
- 第二條 土地臺帳ノ謄本ハ第二號書式ニ依リ之ヲ調製スベシ
- 第三條 地租名寄帳ハ第三號書式ニ依リ之ヲ調製スベシ
- 第四條 地租法第七十四條及第七十五條ノ規定ニ依ル報告書ハ第四號書式ニ依リ之ヲ調製スベシ

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
土地臺帳規則施行細則、大正三年大藏省令第五號、明治二十二年大藏省訓令第四十九號ハ之ヲ廢止ス
土地臺帳(副本ヲ含ム)及地租名寄帳ノ書式ニ付テハ當分ノ内從前ノ例ニ準ズルコトヲ得
明治三十八年大藏省令第五十號中第二號ヲ削リ第三號ヲ第二號ニ改ム
第一號書式(土地臺帳)

地目	地積	内歩	外歩	地質	等級	登記	事由	共有	住所	所有													
						年月日					地積	地積	地積	地積	地積								
貨	貨	名	名	稱	稱	年	月	日	事	由	共	有	住	所	所	有	者	氏	名	又	ハ	稱	
格	積	稱	稱	稱	稱	月	日	日	事	由	共	有	住	所	所	有	者	氏	名	又	ハ	稱	

備考 一、土地面積ハ地積ニシテ之ヲ換算シ紙數凡二百葉ヲ以テ一冊ト爲シ左記書式ノ表紙ヲ附スルモノトス

市郡	町大字
土地	地積
何稅務署	(副本ハ何市)
	(町村役場)

二 共有者ノ人員多數ニシテ一行ニ記載シ得ザル場合ハ左記書式ノ共有者氏名表ヲ添附スルモノトス

共有者氏名表

字	登記	事由	共有	住所	所有	住所	所有	者	氏	名	又	ハ	稱
年	月	日	持	分	住	所	氏	名	又	ハ	名	稱	

第二種書式(土地登記簿本)

土地登記簿本

地租 地租法施行細則 書式

年	月	日	何 稅 務 署 (印)
郡 市 町 村	大 字	字	地 番
			地 目
			地 積
			賃 賃 價 格
			事 由
			所 有 者 ノ 住 所 及 氏 名 又 ハ 名 稱

備考 一、 數字ヲ連記スルモ妨ゲナシ

第三號書式(地租名寄帳)

異動及 現在額	大 字	地 字	番 地 目 地	積	賃 賃 價 格	地 租	摘	要	「田」ノ部	納稅義務者住所 及氏名又ハ名稱	納稅管理 人ノ住所及氏名

備考

一、地租名寄帳ハ田、畑、宅地及雜地(田、畑、宅地以外ノ土地)ノ四種目ニ區分シ尙各種目ノ合計ヲ附シ左ノ書式ノ表紙ヲ附スルモノトス

地 租 名 寄 帳

何 市 町 村 役 場

第四號書式(地租納額報告書)

二、稅務署長ノ承認ヲ受ケタルトキハ本書式ト異リタル書式ニ依リ調製スルコトヲ得

年	月	日	提出
年	租第	期分	地租納額「異動」報告書
何市町村長			
摘	要	賃賃價格總額	地租總額
納	額	納	額
員			
月	日	現在額	

右ノ外小農耕地免租ニ係ルモノ及賃賃價格ノ合計金額五圓未滿ノモノ左ノ如シ

摘	要	貸賃價格總額	人	員
小農耕地免租ニ係ルモノ				
貸賃價格ノ合計金額五圓未満ノモノ				

- 備 考
- 一、田租及田以外ノ地租ニ区分シテ調製スルモノトス
 - 二、異動報告書ニハ異動額（増ハ墨書、減ハ赤書）ノミヲ當該欄ニ記載スルモノトス
 - 三、所轄稅務署長ノ承認ヲ受ケタルトキハ本書式ト異リタル書式ニ依リ調製スルコトヲ得

附 則（昭和十五年四月省令第十二號）

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ昭和十四年分地租ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

○東京府管内八丈島ノ地租ニ關スル法律（明治四十四年二月二十三日法律第一號）

東京府管内八丈島ノ地租ハ黃納一段ニ付金一圓七十二錢五厘ノ割合ニ依リ換算シ現金ヲ以テ翌年五月限リ之ヲ納付スベシ

附 則

本法ハ明治四十三年分地租ヨリ之ヲ適用ス

○土地賃賃價格改訂法（昭和十一年六月一日法律第三十六號）

第一條 政府ハ地租法第九條第一項ノ規定ニ依リ昭和十三年一月一日ニ於テ土地ノ賃賃價格ヲ改訂シ昭和十三年分ヨリ改訂賃賃價格ニ依リ地租ヲ徵收ス

第二條 改訂賃賃價格ハ各地目毎ニ昭和十一年四月一日ニ於テ土地ノ情況類似スル區域内ニ於ケル標準ト爲ルベキ土地ノ賃賃價格（標準賃賃價格）ニ依ル

前項ニ定ムルモノノ外賃賃價格ノ算定ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第三條 昭和十一年四月一日後昭和十二年十二月三十一日迄ノ間ニ於テ賃賃價格ヲ設定シ又ハ修正シタル土地ノ改訂賃賃價格ハ地租法第九條第三項ノ例ニ準ジ之ヲ定ム

昭和十一年四月一日後昭和十二年十二月三十一日迄ノ間ニ於テ分筆又ハ合筆ヲ爲シタル土地ノ改訂賃賃價格ハ其ノ分筆又ハ合筆前ノ土地ニ付前條ノ規定ニ依リ定メラルベキ賃賃價格ヲ地租法第三十三條ノ例ニ準ジ配分又ハ合算シテ之ヲ定ム

第四條 改訂賃賃價格ニ依ル各土地ノ地租額ガ從前ノ賃賃價格ニ依ル地租額ノ四倍ヲ超ユルトキハ其ノ四倍ヲ超ユル金額ニ相當スル地租ハ昭和十五年分迄之ヲ免除ス

- 第五條 第二條第一項ノ區域及標準貨貨價格ハ貨貨價格調査委員會ノ議ニ附シ政府ニ於テ之ヲ定ム
- 第六條 稅務署長ハ第二條第一項ノ區域及標準貨貨價格ノ調査書ヲ作成シ之ヲ貨貨價格調査委員會ニ提出スベシ
- 第七條 各稅務署所轄内ニ貨貨價格調査委員會ヲ置ク但シ稅務署所轄内ニ在ル市ニ付テハ命令ヲ以テ特ニ貨貨價格調査委員會ヲ置クコトヲ得
- 第八條 貨貨價格調査委員會ハ之ヲ置クベキ區域内ノ各市町村ニ於テ地租納稅義務者ノ選舉シタル調査委員ヲ以テ之ヲ組織ス
- 各市町村ニ於テ選舉スベキ調査委員ノ數ハ市ニ在リテハ十人、町村ニ在リテハ一人トス但シ市町村ノ情況ニ依リ命令ヲ以テ之ヲ増減スルコトヲ得
- 第九條 選舉期日前十五日ノ現在ニ於テ地租名寄帳ニ納稅義務者トシテ記載セラレタル個人(地租法第七十條又ハ第七十三條第一項但書ノ規定ニ依リ地租ヲ免除セラルル者又ハ地租ヲ徵收セラレザル者ヲ含ム)ハ當該市町村内ニ於テ調査委員ヲ選舉シ又ハ調査委員ニ選舉セララルコトヲ得但シ左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ此ノ限ニ在ラズ
- 一 無能力者

- 二 破産者ニシテ復權ヲ得ザルモノ
- 三 國稅滯納處分ヲ受ケタル後一年ヲ經ザル者
- 四 六年ノ懲役若ハ禁錮以上ノ刑ニ處セラレ又ハ舊刑法ノ重罪ノ刑ニ處セラレタル者
- 五 六年未滿ノ懲役又ハ禁錮ノ刑ニ處セラレタル者ニシテ其ノ刑ノ執行ヲ終リ又ハ執行ヲ受クルコトナキニ至ル迄ノモノ
- 六 地租法第八十三條又ハ第八十六條第二項ノ規定ニ依リ處罰セラレタル後五年ヲ經ザル者
- 法人ニシテ地租ノ納稅義務ヲ有スル者ハ前項ノ規定ニ準ジ調査委員ヲ選舉スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ選舉ニ關スル代表者ヲ定メ當該市町村長ニ申告スベシ
- 第一項各號ノ一ニ該當スル者ハ前項ノ規定ニ依ル法人ノ代表者タルコトヲ得ズ
- 第十條 投票及開票ニ關スル事務ハ市町村長之ヲ擔任シ其ノ他ノ選舉ニ關スル事務ハ稅務署長之ヲ擔任ス
- 第十一條 稅務署長ハ調査委員ノ選舉期日ヲ定メ之ヲ市町村長ニ通知スベシ
- 市町村長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ少クトモ選舉期日七日前ニ之ヲ公示スベシ
- 前項ノ公示ニハ投票及開票ノ日時及場所ヲ記載スベシ
- 第十二條 調査委員ノ選舉ハ無記名投票ヲ以テ之ヲ行フ

投票ハ一人一票ニ限ル

選挙人ハ選挙ノ當日投票時間内ニ自ラ投票所ニ到リ被選挙人一人ノ氏名ヲ投票用紙ニ記載シテ投票スベシ

投票用紙ハ選挙ノ當日投票所ニ於テ之ヲ選挙人ニ交付スベシ

第十五條 市町村長ハ當該市町村内ニ於テ選挙資格ヲ有スル者ノ内ヨリ二人ノ立會人ヲ選任シ投票及開票ニ立會ハシムベシ

立會人ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ手當ヲ支給ス

第十四條 投票ノ效力ハ立會人ノ意見ヲ聽キ市町村長之ヲ決定スベシ

第十五條 市町村長ハ投票ヲ調査シ直ニ左ノ事項ヲ稅務署長ニ通知スベシ

一 投票人及投票ノ數並ニ有効投票及無効投票ノ數

二 投票ヲ無効ト決定シタル事由

三 被選挙人ノ住所、氏名、生年月日及其ノ得票數

第十六條 稅務署長前條ノ通知ヲ受ケタルトキハ之ヲ調査シ當選人ヲ決定スベシ

第十七條 投票ノ多數ヲ得タル者ヲ以テ當選人トス得票數同ジキトキハ年齢多キ者ヲ取り年齢モ亦同ジキトキハ稅務署長抽籤シテ之ヲ定ム

第十八條 稅務署長當選人ヲ決定シタルトキハ其ノ氏名ヲ公示シ且之ヲ當選人及市町村長ニ通知スベシ

市町村長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ當選人ノ氏名ヲ公示スベシ

第十九條 調査委員ニ當選シタル者ハ正當ノ事由ナクシテ之ヲ辭スルコトヲ得ズ

第二十條 調査委員第九條第一項各號ノ一ニ該當スルニ至リタルトキハ其ノ職ヲ失フ

第二十一條 調査委員ニ缺員ヲ生ジタルトキハ當選人ト爲ラザリシ者ノ中得票數多キ者ヨリ順次之ヲ補充ス其ノ得票數同ジトキハ第十七條ノ規定ヲ準用ス

第十八條ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第二十二條 調査委員ノ選挙ニ於テ選挙人ノ數ガ定數ニ達セザルトキ又ハ調査委員ニ缺員ヲ生ジ前條ノ規定ニ依リ補充スベキ者ナキトキハ補缺選挙ヲ行フ但シ貸賃價格調査委員會開會後缺員

ヲ生ジタル場合ニ於テハ之ヲ行ハザルコトヲ得

第二十三條 貸賃價格調査委員會ハ稅務署長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク其ノ開會日數ハ三十日以内トス

第二十四條 貸賃價格調査委員會ハ開會ノ始ニ於テ調査委員中ヨリ會長ヲ選挙スベシ

會長事故アルトキハ出席シタル調査委員中ノ年齢多キ者會長ノ職務ヲ代理ス

第二十五條 貨貨價格調査委員會ハ定員ノ過半數ニ當ル委員出席スルニ非ザレバ決議スルコトヲ得ズ

議事ハ出席員ノ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

第二十六條 貨貨價格調査委員會ノ決議ハ會長之ヲ稅務署長ニ通知スベシ

第二十七條 昭和十二年九月三十日迄ニ貨貨價格調査委員會成立セザルトキハ稅務署長ニ於テ第

二條第一項ノ區域及標準貨貨價格ヲ定ム

貨貨價格調査委員會開會ノ日ヨリ第二十三條ノ期間内又ハ昭和十二年九月三十日迄ニ決議終了

セザルトキハ稅務署長ニ於テ第二條第一項ノ區域及標準貨貨價格ヲ定ム

第二十八條 稅務署長ハ貨貨價格調査委員會ノ決議ヲ不當ト認ムルトキハ十日以内ノ期間ヲ定メ

再議ニ付ス仍其ノ決議ヲ不當ト認ムルトキ又ハ再議期間内ニ決議終了セザルトキハ稅務署長ニ

於テ第二條第一項ノ區域及標準貨貨價格ヲ定ム

第二十九條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ貨貨價格調査委員會ニ出席シ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第三十條 調査委員ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ手當及旅費ヲ支給ス

第三十一條 第二條第一項ノ區域及標準貨貨價格ヲ定メタルトキハ稅務署長ハ之ヲ市町村長ニ通

知スベシ

市町村長前項ノ通知ヲ受ケタルトキハ二十日間關係者ノ縦覽ニ供スベシ縦覽期間ハ豫メ之ヲ公示スベシ

第三十二條 自己ノ納稅義務ヲ有スル土地ニ適用セラルベキ標準貨貨價格ニ關シテ異議アル者ハ

前條ノ縦覽期間満了ノ日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ稅務署長ヲ經由シテ稅務監督局長

ニ異議ノ申立ヲ爲スコトヲ得

前項ノ申立アリタル場合ト雖モ政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セズ

第三十三條 前條第一項ノ申立アリタルトキハ稅務監督局長ハ之ヲ審査決定シ異議申立人ニ通知

スベシ

第三十四條 前條ノ決定ニ對シ不服アルトキハ訴願ヲ爲シ又ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第三十五條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ土地ノ所有者、質權者、地上權者其ノ他利害關係人ニ對

シ貨貨價格ノ調査上必要ナル事項ヲ質問スルコトヲ得

第三十六條 貨貨價格ノ調査又ハ決議ニ從事シタル者ハ其ノ調査又ハ決議ニ關シ知リタル秘密ヲ

正當ノ事由ナクシテ他ニ漏洩スルコトヲ得ズ

第三十七條 町村組合ニシテ町村ノ事務ノ全部又ハ役場事務ヲ共同處理スルモノハ本法ノ適用ニ

付テハ之ヲ一町村、其ノ組合管理者ハ之ヲ町村長ト看做ス

町村制ヲ施行セザル地ニ於テハ本法中町村ニ關スル規定ハ町村ニ準ズベキモノニ、町村長ニ關スル規定ハ町村長ニ準ズベキモノニ之ヲ適用ス

附則

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
地租法第七十一條第一項ニ規定スル申請期間ハ昭和十三年分地租ニ限り命令ヲ以テ之ヲ變更スルコトヲ得

○土地賃貸價格改訂法施行規則 (昭和十一年六月一日大藏省令第十五號)

第一條 土地賃貸價格改訂法第二條ノ規定ニ依ル標準賃貸價格ハ田畑及鹽田ニ付テハ昭和十年以前五年ノ平均賃貸價格ニ依リ、其ノ他ノ土地ニ付テハ昭和十一年四月一日現在ノ賃貸價格ヲ基礎トシテ算出シタル一年分ノ金額ニ依リ之ヲ算定ス
前項ノ規定ニ依リ標準賃貸價格ヲ算定スルコト能ハザルトキ又ハ之ヲ不適當トスルトキハ他ノ適當ナル方法ニ依リ之ヲ算定ス

第二條 前條ノ規定ニ依リ標準賃貸價格ヲ算定スル場合ニ於ケル米其ノ他ノ物ノ價格ハ昭和十年以前五年ノ平均價格ニ依ル

第三條 稅務署長ハ土地賃貸價格改訂法第六條ノ規定ニ依リ土地賃貸價格調査書止關二通ヲ作成シ之ヲ賃貸價格調査委員會ニ提出スベシ

第四條 土地賃貸價格改訂法第七條ノ規定ニ依リ特ニ賃貸價格調査委員會ヲ置クベキ市區ハ別ニ之ヲ定ム

第五條 土地賃貸價格改訂法第八條第二項ノ規定ニ依リ調査委員ノ數ヲ増減スベキ市區町村及其ノ調査委員ノ數ハ別ニ之ヲ定ム

第六條 土地賃貸價格改訂法第九條第二項ノ規定ニ依ル法人ノ代表者ノ申告ハ選舉期日ノ前日迄ニ之ヲ爲スベシ

第七條 調査委員ニハ手當五拾圓ヲ支給ス但シ調査委員會ニ全ク出席セザル者ニハ之ヲ支給セズ
○調査委員ニハ勸導手當ノ外往復旅費ヲ支給ス

前二項ノ手當及旅費ノ支給ニ關シテハ大正二年大藏省令第二十五號第二條第四條及第五條ノ規定ヲ適用ス

第八條 調査委員ノ選舉ニ關スル立會人ニハ國庫ヨリ日當二圓ヲ支給ス

第八附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○北海道土地賃貸價格調査ニ關スル件 (大正七年一月二十一日大藏省令第二號)

改正 昭和五年三月十一日大藏省令第四號(1)

昭和六年四月 一日同 令第七號(2)

昭和八年八月二十一日同 令第二十號(3)

第一條 稅務署長ハ左ニ掲ゲタル土地ニシテ地租ヲ課スルニ至リ賃貸價格ヲ設定セムトスルトキハ當分ノ内之ヲ賃貸價格調査會ニ諮問スヘシ(2)

一 明治八年開拓使布達第三號山林荒蕪地拂下規則第二條ニ依リ地租ヲ課セサル土地

二 明治十九年關令第十六號北海道土地拂下規則第十條但書ニ依リ地租ヲ課セサル土地

三 明治二十二年法律第十八號ニ依リ地租ヲ課セサル土地

四 明治二十三年法律第七十九號屯田兵土地給與規則第三條及第八條ニ依リ地租ヲ免除シタル土地

土地

五 明治三十年法律第二十六號北海道國有未開地處分法第十八條ニ依リ地租ヲ課セサル土地

六 明治三十二年法律第二十七號北海道舊土人保護法第二條ニ依リ地租ヲ課セサル土地

七 明治四十一年法律第五十七號北海道國有未開地處分法第十九條ニ依リ地租ヲ課セサル土地

八 大正七年法律第四十三號地種變更免租年期ニ關スル法律第一條ニ依リ地租ヲ課セサル土地

九 昭和二年法律第十八號御料地拂下地ノ地租及登録稅免除ニ關スル法律第一條ニ依リ地租ヲ課セサル土地

課セサル土地

第二條 各稅務署所轄内ニ賃貸價格調査會ヲ置ク(2)

第三條 賃貸價格調査會ハ賃貸價格設定ニ關シ稅務署長ノ諮問シタル事項ヲ調査ス(2)

第四條 稅務署長ハ賃貸價格調査書ヲ作製シ之ヲ調査會ニ送付スヘシ(2)

第五條 調査委員ノ定數ハ九人トシ左ノ如ク之ヲ定ム(2)

一 北海道廳長官ノ指名シタル稅務署所轄内北海道廳支廳所管ノ官吏及公吏三人

二 稅務署所轄内市町村長ノ推薦シタル調査委員候補者ノ互選シタル者六人

前項第二號ノ互選ハ稅務署長ノ通知ニ依リ之ヲ爲ス

特別ノ事由ニ因リ第一項第二號ノ定數ヲ増減スルトキハ別ニ之ヲ告示ス

第六條 前條ニ依リ調査委員定マリタルトキハ稅務署長ハ其ノ氏名ヲ公示スヘシ

第七條 各稅務署所轄内市町村長ハ調査委員任期満了ノトキ又ハ新ニ賃貸價格調査會ヲ設置セラレタルトキハ其ノ市町村内ニ土地ヲ所有スル者ノ中ヨリ各市町村ニ付一人ノ調査委員候補者ヲ推薦シ其ノ住所氏名ヲ調査委員任期満了ノトキハ其ノ翌年四月三十日迄ニ、新ニ賃貸價格調査會ヲ設置セラレタルトキハ其ノ翌月中ニ所轄稅務署長ニ報告スヘシ(2・3)

第八條 調査委員ノ任期ハ第六條ノ公示アリタル年ヨリ二年トス、
 稅務署ノ管轄區域ニ變更アリタル場合ニ於テ其ノ區域外ト爲リタル市町村長ノ推薦ニ係ル調査委員候補者及同調査委員候補者中ヨリ選出セラレタル調査委員アルトキハ調査委員候補者ハ其ノ資格ヲ失ヒ調査委員ハ其ノ職ヲ失フ(3)

第九條 調査委員ニ職員ヲ生ジタルトキハ官吏又ハ公吏ニ在リテハ第五條ノ規定ニ準シ北海道廳長官ノ指名ニ依リ其ノ他ノモノニ在リテハ調査委員候補者中年長者ヨリ順次之ヲ補充シ年齢同シキ者アルトキハ抽籤ニ依リ之ヲ定ム

前項ノ場合ニ於テハ第六條ノ規定ヲ準用ス

第十條 補闕ニ因リ調査委員ト爲リタル者ノ任期ハ前任者ノ殘任期間トス

第十一條 調査會ハ稅務署長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク(2)

第十二條 調査委員ハ開會ノ始ニ於テ調査委員中ヨリ會長ヲ定ムヘシ

第十三條 調査會第四條ニ依リ賃貸價格調査書ノ送付ヲ受ケタルトキハ二十日以内ニ之ヲ調査シ其ノ結果ヲ會長ヨリ稅務署長ニ報告スヘシ(2)

第十四條 調査委員ニハ手當及旅費ヲ支給ス

附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附 則(1)

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附 則(2)

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附 則(3)

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

相続税

○相続税法（明治三十八年一月一日法律第十號）

- 改正沿革
- 明治四十三年三月二十五日法律第四號(1)
 - 大正三年三月三十一日法律第二十二號(2)
 - 大正十一年四月十八日法律第四十八號(3)
 - 大正十五年三月二十七日法律第十三號(4)
 - 昭和十三年三月三十一日法律第四十七號(5)
 - 昭和十五年三月二十九日法律第二十九號(6)

第一條 相続開始シタル場合ニ於テ被相続人ガ本法施行地ニ住所ヲ有スルトキ又ハ本法施行地ニ
相続財産アルトキハ本法ニ依リ相続税ヲ課ス(5)

第二條 被相続人カ本法施行地ニ住所ヲ有スルトキハ相續財産ノ全部ニ對シ相續稅ヲ課ス(5)
 被相続人カ本法施行地ニ住所ヲ有セサルトキハ本法施行地ニ在ル相續財産ニ付テノミ相續稅ヲ課ス

第二條ノ二 財産ノ所在ハ動産、不動産及不動産ノ上ニ存スル權利ニ付テハ當該動産又ハ不動産ノ所在ニ依ル但シ船舶ノ所在ハ船籍ノ所在ニ依ル(5)

前項ニ掲クルモノ以外ノ財産ノ所在ハ權利者ノ住所地ニ依ル

第三條 被相続人カ本法施行地ニ住所ヲ有スルトキハ相續稅ヲ課スヘキ相續財産ノ價額ニ相續開始前一年内ニ被相続人カ爲シタル贈與ノ價額ヲ加ヘ其ノ中ヨリ左ノ金額ヲ控除シタルモノヲ以テ課稅價格トス(5)

一 公課

二 被相続人ノ葬式費用

三 債務

第三條ノ二 被相続人カ本法施行地ニ住所ヲ有セサルトキハ相續稅ヲ課スヘキ相續財産ノ價額ニ相續開始前一年内ニ被相続人カ本法施行地ニ在ル財産ニ付爲シタル贈與ノ價額ヲ加ヘ其ノ中ヨリ左ノ金額ヲ控除シタルモノヲ以テ課稅價格トス(5)

一 其ノ財産ニ係ル公課

二 其ノ財産ヲ目的トスル留置權、特別ノ先取特權、質權又ハ抵當權ヲ以テ擔保セラルル債務

三 其ノ財産ニ關スル贈與ノ義務

第三條ノ三 被相続人ノ死亡ニ因リ相續人ノ受取ル生命保險ノ保險金ニシテ被相續人カ保險契約者タル保險契約ニ基クモノハ之ヲ相續財産ト看做ス但シ相續人ノ受取ル保險金ノ合計額中五千圓迄ノ金額ニ付テハ此ノ限ニ在ラス(5)

保險契約者カ被相續人以外ノ者ナル場合ト雖被相續人カ現實ニ保險料ノ支拂ヲ爲スモノナルトキハ被相續人ヲ保險契約者ト看做シ前項ノ規定ヲ適用スルコトヲ得

第三條ノ四 退職手當、功勞金及此等ノ性質ヲ有スル給與ニシテ被相續人ニ支給セラルヘキモノカ被相續人死亡シタル爲其ノ相續人其ノ他ノ者ニ支給セラルトキハ之ヲ相續財産ト看做ス但シ給與ノ合計額中五千圓迄ノ金額ニ付テハ此ノ限ニ在ラス(5)

前項ノ給與カ相續人以外ノ者ニ支給セラルトキハ遺贈アリタルモノト看做ス

第三條ノ五 公共團體又ハ慈善其ノ他ノ公益事業ニ對シ爲シタル贈與及遺贈ハ相續稅ノ課稅價格ニ算入セス(5)

第四條 相續財産ノ價額、相續財産ノ價額ニ加算スヘキ贈與ノ價額並ニ相續財産ノ價額中ヨリ控

- 除スヘキ公課及債務金額ハ相續開始當時ノ現況ニ依ル(5)
- 地上權、永小作權及定期金ニ付テハ政府ハ左ノ方法ニ依リ其ノ價格ヲ評定ス(4)
- 一 地上權ニ付テハ左ノ金額ヲ以テ其ノ價額トス
 - 残存期間十年以下ナルモノ 地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 二倍
 - 残存期間三十年以下ナルモノ 地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 三倍
 - 残存期間五十年以下ナルモノ又ハ存續期間ノ定ナキモノ 地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 五倍
 - 残存期間百年以下ナルモノ 地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 七倍
 - 残存期間百年ヨリ長キモノ 地上權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 十二倍
 - 二 永小作權ニ付テハ左ノ金額ヲ以テ其ノ價額トス
 - 残存期間十年以下ナルモノ 永小作權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 二倍
 - 残存期間三十年以下ナルモノ又ハ存續期間ノ定メナキモノ 永小作權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 三倍
 - 残存期間五十年以下ナルモノ 永小作權ノ目的タル土地ノ賃貸價格 五倍
 - 三 有期定期金ハ其ノ残存期間ニ於ケル總金額ヲ以テ其ノ價額トス但シ一年ノ定期金ノ二十倍

ヲ超ユルコトヲ得ス

- 四 無期定期金ハ其ノ一年ノ定期金ノ二十倍ヲ以テ其ノ價額トス
- 五 終身定期金ハ目的トセラレタル人ノ年齢ニ依リ左ノ期間ニ於ケル定期金ノ總額ヲ以テ其ノ價額トス

二十歳未満ノ者	十年
三十歳未満ノ者	八年
四十歳未満ノ者	六年
五十歳未満ノ者	四年
六十歳未満ノ者	二年
六十歳以上ノ者	一年

前項ニ於テ土地ノ賃貸價格ト稱スルハ貸主カ公課、修繕費、保険料其ノ他土地ノ維持ニ必要ナル經費ヲ負擔スル條件ヲ以テ之ヲ賃貸スル場合ニ於テ貸主ノ收得スヘキ金額ヲ謂フ

- 第五條 條件附權利、存續期間ノ不確定ナル權利、信託ノ利益ヲ受クヘキ權利又ハ訴訟中ノ權利
- ニ付テハ政府ノ認ムル所ニ依リ其ノ價格ヲ評定ス(3)
- 第三條又ハ第三條ノ二ノ規定ニ依リ控除スヘキ債務金額ハ政府カ確實ト認メタルモノニ限

第五條ノ二 本法施行地ニ住所ヲ有スル者ノ死亡ニ因ル家督相続ニシテ其ノ課税價格五萬圓以下ノモノニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ課税價格ヨリ相続開始當時ノ被相続人ノ同居家族中年齡十八歳未満者ハ六十歳以上又ハ不具廢疾ノ者一人ニ付千圓ヲ控除ス(6)

本法施行地ニ住所ヲ有スル者ノ死亡ニ因ル遺產相続ニシテ其ノ課税價格三萬圓以下ノモノニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ課税價格ヨリ相続開始當時被相続人ノ親權ニ服シ且被相続人ト同居スル子ノ中年齡十八歳未満又ハ不具廢疾ノ者一人ニ付千圓ヲ控除ス(6)

前二項ノ規定ニ依リ控除スヘキ金額ハ課税價格ヨリ遺贈ノ價額及第三條ノ規定ニ依リ相続財産ノ價額ニ加ヘタル贈與ノ價額ヲ控除シタル殘額ニ相當スル金額ヲ超ユルコトナシ(6)

第一項及第二項ニ規定スル不具廢疾者ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム(6)

第六條 課税價格カ家督相続ニ在リテハ五千圓、遺產相続ニ在リテハ千圓ニ滿タサルトキハ相続税ヲ課セス前條ノ規定ニ依リ控除ヲ爲シタル爲課税價格カ家督相続ニ在リテハ五千圓、遺產相続ニ在リテハ千圓ニ滿タサルニ至リタルトキ亦同シ(7・4・6)

第七條 軍人、軍屬ノ戰死又ハ戰爭ノ爲受ケタル傷病疾病ニ起因シタル死亡ニ因リ相続開始シタルトキハ相続税ヲ課セス但シ傷病者又ハ疾病者ニシテ負傷又ハ發病後一年ヲ經過シ死亡シタル

トキハ此ノ限ニ在ラス

第八條 相続税ハ課税價格ヲ左ノ各級ニ區分シ其ノ各區分ニ對シ相続人ノ種類ニ從ヒ遞次ニ各税率ヲ適用シテ之ヲ課ス(6)

課 税 價 格	家 督 相 承 續		
	相 續 人 カ 被 相 續 人 ノ 家 族 タ ル 直 系 卑 屬 ナ ル ト キ	相 續 人 カ 被 相 續 人 ノ 指 定 シ タ ル 者、 民 法 九 百 八 十 二 條 ノ 規 定 ニ 依 リ 選 定 セ ラ レ タ ル 者、 被 相 續 人 ノ 家 族 タ ル 直 系 卑 屬 又 ハ 入 夫 ナ ル ト キ	相 續 人 カ 民 法 第 九 百 八 十 五 條 ノ 規 定 ニ 依 リ 選 定 セ ラ レ タ ル 者 ナ ル ト キ
一萬圓以下ノ金額	千分ノ十	千分ノ十五	千分ノ二十
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ十五	千分ノ二十	千分ノ三十
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十	千分ノ三十	千分ノ四十
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二十五	千分ノ四十	千分ノ六十
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十	千分ノ五十	千分ノ八十

相続税 相続税法

五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ五十	千分ノ七十	千分ノ百
七萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ七十	千分ノ九十	千分ノ百二十
十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ九十	千分ノ百十	千分ノ百五十
十五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百十	千分ノ百三十	千分ノ百八十
二十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百三十	千分ノ百五十	千分ノ二百十
三十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百五十	千分ノ百七十	千分ノ二百四十
四十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百七十	千分ノ百九十	千分ノ二百七十
五十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百九十	千分ノ二百二十	千分ノ三百
七十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二百十	千分ノ二百五十	千分ノ三百三十
百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二百四十	千分ノ二百八十	千分ノ三百六十
二百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二百七十	千分ノ三百十	千分ノ三百九十
三百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三百	千分ノ三百四十	千分ノ四百二十
五百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三百三十	千分ノ三百七十	千分ノ四百五十

遺 産 相 續

課 稅 價 格	稅 率	
	相續人カ直系卑屬ナルトキ	相續人カ配偶者又ハ直系尊屬ナルトキ
五千圓以下ノ金額	千分ノ二十	千分ノ四十
五千圓ヲ超ユル金額	千分ノ三十	千分ノ六十
一萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四十	千分ノ八十
二萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ五十	千分ノ百
三萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ六十	千分ノ百二十
四萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ六十	千分ノ百二十
五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ八十	千分ノ百六十
七萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百	千分ノ百八十
十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百二十	千分ノ二百
十五萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百五十	千分ノ二百四十
二十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ百八十	千分ノ二百七十

相續稅 相續稅法

三十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二百四十	千分ノ二百七十	千分ノ三百
四十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ二百七十	千分ノ三百	千分ノ三百三十
五十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三百	千分ノ三百三十	千分ノ三百六十
七十萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三百三十	千分ノ三百六十	千分ノ三百九十
百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ三百七十	千分ノ四百	千分ノ四百三十
二百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四百十	千分ノ四百四十	千分ノ四百七十
三百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四百五十	千分ノ四百八十	千分ノ五百十
五百萬圓ヲ超ユル金額	千分ノ四百九十	千分ノ五百二十	千分ノ五百五十

外國ノ法律ニ依リ開始シタル相續ニ關シテハ遺產相續ニ關スル稅率ヲ準用ス但シ相續人二人以上アル場合ニ於テ其ノ適用スヘキ稅率相異ルトキハ最低キ稅率ヲ適用ス

第九條 相續人ノ廢除若ハ其ノ取消ニ關スル裁判ノ確定前又ハ相續ノ承認若ハ拋棄前ト雖政府ハ必要ニ依リ其ノ推定家督相續人又ハ推定遺產相續人ニ對スル稅率ヲ適用シ相續稅ヲ課スルコトヲ得

相續人アルコト分明ナラサルトキハ稅率ノ最高キ相續人ニ對スル稅率ヲ適用シテ相續稅ヲ課ス

前二項ニ依リ課稅シタル後相續人確定シタルトキハ稅率ノ適用ヲ改訂シ税金ノ差額ヲ追徵シ又ハ還付ス

第十條 相續稅ヲ課セラルヘキ相續開始シタル後七年以内ニ於テ更ニ相續開始シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ前ノ相續額ニ對スル相續稅ニ相當スル相續稅ヲ免除ス(1.5)

相續稅ヲ課セラルヘキ相續開始シタル後十年以内ニ於テ更ニ相續開始シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ前ノ相續額ニ對スル相續稅ノ半額ニ相當スル相續稅ヲ免除ス(1.5)

第十條ノ二 第二條第一項ノ場合ニ於テ外國ニ在ル相續財產ニ付其ノ國ノ法令ニ依リ相續稅ヲ課セラレタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ財產ノ價額ニ對スル相續稅ヲ免除ス(5)

第十條ノ三 相續人(相續人二人以上ナルトキハ各相續人)、受遺者及第三條又ハ第三條ノ二ノ規定ニ依リ相續財產ノ價額ニ加算シタル贈與ヲ受ケタル者ハ課稅價格中各自其ノ受ケタル利益ノ價額ノ占ムル割合ニ應シテ相續稅ヲ納付スル義務アルモノトス但シ相續人ハ共同相續人、受遺者及第三條又ハ第三條ノ二ノ規定ニ依リ相續財產ノ價額ニ加算シタル贈與ヲ受ケタル者ノ納付スヘキ相續稅ニ付連帶納付ノ責ニ任ス(5)

第三條又ハ第三條ノ二ノ規定ニ依リ相續財產ノ價額ニ加算シタル贈與ノ價額ニシテ第二十三條ノ規定ニ依リ相續稅ヲ課スヘキモノアルトキハ其ノ相續稅額ハ當該贈與ヲ受ケタル者カ前項ノ

規定ニ依リ當該贈與ニ付納付スヘキ相続税額ヨリ之ヲ控除ス

第十條ノ四 相続人アルコト分明ナラサルトキ又ハ相続人カ相続財産ニ付全ク處分ノ機能ナキト

キハ本法中相続人ニ關スル規定ハ別段ノ定アル場合ヲ除クノ外之ヲ相続財産管理人又ハ遺言執行者ニ適用ス(5)

第十一條 相続人ハ相続開始ヲ知リタル日ヨリ三月以内ニ相続税ヲ課セラルヘキ相続財産ノ目錄

並ニ相続財産ノ價額ニ加算セラルヘキ贈與ノ價格及相続財産ノ價額中ヨリ控除セラルヘキ金額

等ノ明細書ヲ政府ニ提出スヘシ(5)

前項ノ期間ハ遺言執行者又ハ相続財産管理人ニ就テハ就職ノ日ヨリ三月トス

被相続人又ハ相続人カ帝國內ニ住所ヲ有セサルトキハ前二項ノ期間ハ六月トス

相続人確定シタルトキハ第一項ノ書類ヲ提出スルト同時ニ又ハ其ノ確定ノ日ヨリ一月以内ニ相

續人ノ相續關係ヲ記載シタル書面ヲ政府ニ提出スヘシ

第十一條ノ二 納税義務者若本法施行地ニ住所又ハ居所ヲ有セサルトキハ前條ノ書類ノ提出、納税

其他相続税ニ關スル一切ノ事項ヲ處理セシムル爲納税管理人ヲ定メ政府ニ申告スヘシ本法施行

地外ニ住所又ハ居所ヲ移サムトスルトキ亦同シ(5)

第十二條 市町村長左ノ事項ニ關スル届書ヲ受理シタルトキハ之ヲ稅務署長ニ報告スヘシ(5)

一 死亡又ハ失踪

二 戸主ノ隱居又ハ國籍喪失

三 戸主カ婚姻又ハ養子縁組ノ取消ニ因リテ其ノ家ヲ去リタルコト

四 入夫婚姻ニ因リ女戸主カ戸主權ヲ喪失シタルコト

五 戸主タル入夫ノ離婚

前項ノ規定ハ市制第六條又ハ第八十二條第三項ノ市ニ於テハ區長ニ、町村制ヲ施行セサル地ニ

於テハ町村長ニ準スヘキモノニ之ヲ適用ス(5)

第十二條ノ二 本法施行地ニ於テ生命保險(徵兵保險ヲ含ム以下同シ)ノ保險金ヲ支拂ヒタル者ハ

命令ノ定ムル所ニ依リ支拂調書ヲ政府ニ提出スヘシ(5)

前項ノ支拂調書ヲ提出シタル者ニ對シテハ命令ノ定ムル金額ヲ交付スルコトヲ得

第十二條ノ三 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ被相続人、納税義務者又ハ納税

義務アリト認ムル者ニ質問スルコトヲ得(5・6)

第十二條ノ四 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ第十二條ノ二第一項ノ支拂調書

ヲ提出スル義務アル者ニ質問スルコトヲ得(6)

稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ被相続人、納税義務者若ハ納税義務アリト認

ムル者ニ金錢若ハ物品ヲ支拂フ義務ヲ有スト認ムル者ニ對シ被相續人、納稅義務者若ハ納稅義務アリト認ムル者ヨリ金錢若ハ物品ノ支拂ヲ受タル權利ヲ有スト認ムル者ニ對シ其ノ金額、數量、價額、支拂期日等ニ付質問スルコトヲ得(5)

第十三條 課稅價格ハ政府之ヲ決定ス

課稅價格ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘシ(5)
本法施行地ニ住所又ハ居所ヲ有サセル納稅義務者納稅管理人ノ申告ヲ爲ササルトキハ前項ノ通知ハ公告ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テ公告ノ初日ヨリ七日ヲ經過シタルトキハ其ノ通知アリタルモノト看做ス(5)

第十四條 納稅義務者前條ノ決定ニ對シ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ申立テ審査ヲ求ムルコトヲ得(5)

納稅義務者帝國內ニ住所ヲ有セサルトキハ前項ノ期間ハ之ヲ三月トス(5)

第十五條 前條ノ請求アリタルトキハ相續稅審査委員會ノ諮問ヲ經テ政府之ヲ決定ス

審査委員會ノ組織及會議ニ關スル規定ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條 前條第一項ノ決定ニ對シ不服アル者ハ訴訟ヲ爲シ又ハ行政裁判法ニ依リ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得(5)

第十七條 相續稅ハ一時ニ之ヲ納付スヘシ但シ稅金額百圓以上ナルトキハ相續稅ニ相當スル擔保

ヲ提供シ七年以内ノ年賦延納ヲ求ムルコトヲ得(1・4)

相續稅ヲ課スヘキ相續財產ノ價額中不動産及不動産ノ上ニ存スル權利並ニ信託財產タル不動産ノ元本ノ利益ヲ受クヘキ權利ノ價額ノ合計額ガ相續財產ノ價額ノ二分ノ一ヲ超ユルトキハ前項但書ノ期間ハ之ヲ十年以内トス(6)

納稅義務者前二項ノ規定ニ依リ年賦延納ヲ求メムトスルトキハ第十三條ノ通知ヲ受ケタル後二十日以内ニ政府ニ申請スヘシ但シ連帶納付ノ責アル納稅義務者ニ在リテハ其ノ一人ヨリ申請スルヲ以テ足ル(5)

納稅義務者帝國內ニ住所ヲ有セサルトキハ前項ノ期間ハ之ヲ三月トス(6)

第十八條 審査ヲ求メ訴訟又ハ行政訴訟ヲ爲シタル場合ト雖納稅義務者ハ通知ヲ受ケタル金額ニ依リ稅金ヲ納付スヘシ(5)

第十九條及第二十條 削除(5)

第二十一條 相續稅ノ審査ニ參與シタル者ハ其ノ審査ニ關スル事項ヲ他ニ漏洩スルコトヲ得ス

第二十二條 相續人期限内ニ第十一條ニ依ル書類ヲ提出セサルトキハ政府ハ期間ヲ定メテ催告ヲ爲スコトヲ得(5)

相續人二人以上ナル場合ニ於テハ政府ハ其ノ一人ニ對シテ前項ノ催告ヲナスコトヲ得
 前二項ノ場合ニ於テ相續人其ノ期間内ニ書類ヲ提出セサルトキハ政府ノ認ムル所ニ依リ課稅價
 格ヲ決定シ催告ニ關スル費用及税金ノ十分ノ一二相當スル金額ヲ相續人ヨリ徵收スルコトヲ
 得(六)

相續人二人以上ナル場合ニ於テハ各相續人ハ前項ノ徵收金ニ付連帶納付ノ責ニ任ス

第三項ノ金額ノ徵收ニ關シテハ國稅徵收法ノ規定ヲ準用ス

第二十三條 左ニ掲クル場合ニ於テ贈與ノ價額カ千圓以上ナルトキハ遺產相續開始シタルモノト

看做シ其ノ財産ノ價額ヲ課稅價格トシテ本法ニ依リ相續稅ヲ課ス但シ本法施行地ニ住所ヲ有セ

サル者ノ爲シタル贈與ニ在リテハ本法施行地ニ在ル財産ニ付爲シタルモノニ限ル(七)

一 親族ニ贈與ヲ爲シタルトキ

二 分家ヲ爲スニ際シ若ハ分家ヲ爲シタル後本家ノ戸主又ハ家族カ分家ノ戸主又ハ家族ニ贈與

ヲ爲シタルトキ

前項ノ場合ニ於テ贈與前三年以内ニ同一人ニ對シ爲シタル贈與(朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ住所ヲ
 有シタル當時爲シタル贈與ヲ含ム)ニシテ價額千圓以上ノモノアルトキハ其ノ贈與ノ價額ヲ前
 項ノ贈與ノ價額ニ加算シテ得タル金額ニ對シ第八條ノ稅率ヲ適用シテ算出シタル金額ヨリ加算

シタル贈與ノ價額(二以上ノ贈與アルトキハ其ノ價額ノ合計額)ニ對シ同條ノ稅率ヲ適用シテ算
 出シタル金額ヲ控除シタル金額ヲ以テ其ノ稅額トス

不動産又ハ船舶ノ贈與ニ付登錄稅ヲ納付シタルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ登錄稅額カ相

續ニ因ル所有權ノ取得ニ付テノ登錄稅額ヲ超過スル金額ヲ第一項又ハ前項ノ相續稅額ヨリ控除

ス

第一項又ハ第二項ノ規定ニ依リ相續稅ヲ課スル場合ニ於テハ第十條ノ規定ヲ適用セス

第二十三條ノ二 信託ニ因リ委託者カ他人ニ信託ノ利益ヲ受クヘキ權利ヲ有セシメタルトキハ左

ニ掲クル時ニ於テ信託ノ利益ヲ受クヘキ權利ヲ贈與シタルモノト看做ス此ノ場合ニ於テ不動産

又ハ船舶ノ信託ニ因ル所有權取得ノ登記ハ前條第二項ノ規定ノ適用ニ付テハ之ヲ贈與ニ因ル所

有權取得ノ登記ト看做ス

一 元本ノ利益ヲ受クヘキ權利ヲ有セシメタルトキハ受益者カ其ノ元本ヲ受ケタル時但シ數回

ニ之ヲ受タルトキハ最初ニ其ノ一部ヲ受ケタル時

二 收益ノ利益ヲ受クヘキ權利ヲ有セシメタルトキハ受益者カ其ノ收益ヲ受ケタル時但シ數回

ニ之ヲ受タルトキハ最初ニ其ノ一部ヲ受ケタル時

前項ノ場合ニ於テ受益者不特定ナルトキ又ハ未タ存在セサルトキハ委託者又ハ其ノ相續人ヲ受

益者ト看做シ受益者特定シ又ハ存在スルニ至リタル時ニ於テ新ニ信託アリタルモノト看做ス
 元本又ハ収益ノ受益者カ其ノ元本又ハ収益ノ全部又ハ一部ヲ受クル迄ハ元本又ハ収益ノ利益ヲ
 受クヘキ權利ハ委託者又ハ其ノ相續人之ヲ有スルモノト看做ス
 信託ノ利益ヲ受クル時ノ委託者ト受益者トノ身分關係カ信託ノ時ノ身分關係ト異ルトキハ其ノ
 身分關係ハ第一項ノ規定ヲ適用スル場合ニ於テハ信託ノ利益ヲ受クル時迄存續スルモノト看做
 ス

第二十三條ノ三 生命保險契約ニシテ保險金受取人カ保險契約者以外ノ者ナルトキハ保險事故ノ
 生シタル時ニ於テ保險契約者カ保險金額ニ相當スル金額ヲ保險金受取人ニ贈與シタルモノト看
 做ス但シ保險契約者ノ同一ナル保險契約ニ基キ同一事故ニ因リ同一人ノ受取ル保險金ノ合計額
 カ五千圓ヲ超ユル場合ニ於ケル其ノ超過額ニ相當スル金額ニ限ル(五)
 前項ノ規定ハ第三條ノ三ノ規定ニ依リ保險金ヲ相續財産ト看做ス場合ニ付テハ之ヲ適用セス
 保險契約者以外ノ者カ現實ニ保險料ノ支拂ヲ爲スモノナルトキハ其ノ者ヲ保險契約者ト看做シ
 第一項ノ規定ヲ適用スルコトヲ得
 前條第四項ノ規定ハ第一項ノ場合ニ之ヲ準用ス
 第二十三條ノ四 郵便年金契約ニシテ年金受取人カ年金契約者以外ノ者ナルトキハ年金支拂ノ事

由發生シタル時ニ於テ年金契約者カ當該郵便年金ノ價額ニ相當スル金額ヲ年金受取人ニ贈與シ
 タルモノト看做ス但シ年金契約者ノ同一ナル年金契約ニ基キ同一事由ニ因リ同一人ノ受取ル年
 金ノ價額ノ合計額カ五千圓ヲ超ユル場合ニ於ケル其ノ超過額ニ相當スル金額ニ限ル(五)
 第二十三條ノ二 第四項及第三項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス
 第二十三條ノ五 死亡ニ因ル相續開始後一年内ニ於テ相續人カ相續財産ニ付爲シタル贈與ニ付テ
 ハ第二十三條ノ規定ヲ適用セス但シ自己ノ直系卑屬ニ贈與ヲ爲シタルトキハ此ノ限ニ在ラ
 ス(五)

第二十四條 第十一條ニ依リ提出シタル書類ニ虚偽ノ記載ヲ爲シタル者其ノ他不正ノ所爲ヲ以テ
 相續税ノ違脱ヲ圖リ又ハ違脱シタル者ハ其ノ違脱シ又ハ違脱セムトシタル税金ノ三倍ニ相當ス
 ル罰金又ハ料科ニ處ス但シ自首シタル者ハ其ノ税金ヲ徵收シ其ノ罪ヲ問ハス(一)
 第二十四條ノ二 正當ノ事由ナクシテ第十二條ノ二第一項ノ規定ニ依リ政府ニ提出スヘキ支拂調
 書ヲ提出セス又ハ虚偽ノ記載ヲ爲シタル支拂調書ヲ提出シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス(五)
 前項ノ規定ニ依リ處罰セラレタル者ニ對シテハ其ノ提出ニ保ル支拂調書ニ付第十二條ノ二第二
 項ノ規定ニ依ル金額ヲ交付セス
 第二十四條ノ三 第十二條ノ四ノ規定ニ依ル稅務署長又ハ其ノ代理官ノ質問ニ對シ答辯ヲ爲サス

又ハ虚偽ノ陳述ヲ爲シタル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

第二十五條 第二十一條ニ違反シタル者ハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス(5)

前項ニ依リ處罰セラレタル者ハ其ノ職ヲ失フ(1)

第二十六條 府縣市町村其ノ他ノ公共團體ハ相續稅ノ附加稅ヲ課スルコトヲ得ス

第二十七條 被相續人カ朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ住所ヲ有シ其ノ地ニ於ケル法令ニ依リ相續稅ヲ課

セラルルトキハ本法施行地ニ相續財產アルモ相續稅ヲ課セス(5)

第二十八條 朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依リ相續稅ヲ課セラルヘキ相續カ其ノ地ニ於テ

開始シタル後五年又ハ七年以内ニ於テ更ニ本法施行地ニ於テ相續開始シタルトキハ第十條ノ規

定ヲ準用ス(5)

第二十九條 朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ住所ヲ有スル者カ本法施行地ニ在ル財產ニ付爲シタル贈與ニ

ハ第二十三條ノ規定ヲ適用セス(5)

第三十條 朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ於テ死亡ニ因リ相續開始シタル後一年內ニ本法施行地ニ住所ヲ

有スル相續人カ相續財產ニ付爲シタル贈與ニ付テハ第二十三條ノ五ノ規定ヲ準用ス(5)

附 則

本法ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附 則(1)

本法ハ明治四十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍舊法ヲ適用ス

附 則(2)

本法ハ大正四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍舊法ヲ適用ス

附 則(3)

本法施行ノ期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附 則(4)

本法ハ大正十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

附 則(5)

本法ハ昭和十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ本法施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

永代借地權ハ當分ノ内相續稅ノ課稅價格ニ算入セズ

附 則(6)

本法ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
本法施行前開始シタル相続ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル但シ第八條ノ改正規定ハ隱居ニ因リ開始
シタル家督相続ニ在リテハ昭和十五年一月一日以後ニ開始シタルモノ、第二十三條第一項ニ規定
スル贈與ニ在リテハ同日以後ニ爲シタルモノニ付之ヲ適用シ第二十三條ノ改正規定ハ同日以後ニ
爲シタル贈與ニ付之ヲ適用ス

○相続税法施行規則 (明治三十八年三月二十三日勅令第六十八號)

改正沿革 昭和九年六月三十日勅令第二百十三號(1)

昭和十二年三月三十一日勅令第六十號(2)

昭和十三年四月 一 日勅令第九十五號(3)

昭和十五年四月 一 日勅令第三百三十九號(4)

第一條 相続開始地ノ稅務署ヲ以テ相続稅ノ所轄稅務署トス

相続開始地カ相続税法施行地ニ在ラサルトキハ同法施行地ニ在ル相続財産所在地ノ稅務署ヲ以

テ所轄稅務署トス相続財産カ二箇以上ノ稅務署管内ニ在ルトキハ其ノ主タル財産ノ所在地ノ稅
務署ヲ以テ所轄稅務署トス

第二條 相続開始シタルトキハ相続人ハ相続税法第十一條第一項ニ定メタル期間内ニ左ニ掲タル
事項ヲ記載シタル書面ニ相続財産目録及相続財産ノ價格中ヨリ控除セラルヘキ金額ノ明細書ヲ
添附シ之ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ但シ相続人二人以上ナル場合ニ於テ其ノ一人ヨリ本條ニ依
ル書類ヲ提出シタルトキハ他ノ相続人ハ之ヲ提出スルコトヲ要セス(3)

一 被相続人ノ氏名

二 相続開始地

三 相続開始ノ日

四 家督相続、遺産相続ノ區別

五 被相続人カ相続開始前一年内ニ贈與ヲ爲シタルトキ(被相続人カ相続税法施行地ニ住所ヲ
有セサル場合ニ於テハ相続税法施行地ニ在ル財産ニ付贈與ヲ爲シタル場合ニ限ル)ハ其ノ財
産ノ價額及受贈者ノ住所氏名

六 相続人ノ住所氏名

七 相続人ト被相続人トノ續柄

前項ノ書類ヲ提出スル場合ニ於テ相續人確定セサルトキハ前項第六號及第七號ノ代リニ相續人ノ確定セサル理由ヲ記載スヘシ

前項ノ場合ニ於テ相續人確定シタルトキハ相續人ハ第一項第六號及第七號ニ掲クル事項ヲ記載シタル書面ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ

相續稅法第二十三條ニ依リ遺產相續ノ開始ト看做サルヘキ場合ニ於テハ第一項第一號乃至第三號第六號及第七號ノ事項ヲ記載シタル書面ヲ提出スルヲ以テ足ル

第二條ノ二 相續人アルコト分明ナラサルトキ又ハ相續人カ相續財產ニ付全ク處分ノ權能ナキトキハ本令中相續人ニ關スル規定ハ之ヲ相續財產管理人又ハ遺言執行者ニ適用ス(3)

第二條ノ三 相續稅法第五條ノ二ニ規定スル不具發疾者ハ心神喪失ノ常況ニ在ル者、聾者、啞者、盲者其ノ他重大ナル傷痍ヲ受ケ又ハ不治ノ疾患ニ罹リ常ニ介護ヲ要スル者ヲ謂フ(4)

第二條ノ四 相續稅法第五條ノ二第一項又ハ第二項ノ規定ニ依ル控除ヲ受ケムトスル者ハ相續稅ノ課稅價格決定前其ノ旨ヲ所轄稅務署ニ申請スヘシ(4)

前項ノ申請書ニハ年齢十八歳未満者ハ六十歳以上又ハ不具發疾ノ者ノ氏名、生年月日、職業、被相續人トノ續柄、不具發疾ノ事實及控除金額ヲ記載スヘシ(4)

稅務署長ニ於テ必要アリト認ムルトキハ前二項ノ規定ニ依ル申請ヲ爲シタル者ニ對シ戶籍ノ謄

本若ハ抄本又ハ醫師ノ診斷書其ノ他必要ナル書類ノ提出ヲ命スルコトヲ得(4)

第二條ノ五 相續稅ヲ課セラルヘキ相續開始シタル後、七年又ハ十年以内ニ於テ更ニ相續開始シタルトキハ相續開始カ七年以内ナル場合ハ相續稅額中前ノ相續稅ニ對スル前ノ相續稅ニ相當スル金額ヲ、十年以内ナル場合ハ其ノ半額ヲ免除ス但シ前ノ相續稅カ後ノ相續ニ於ケル課稅價格ヲ

超ユルトキハ相續開始カ七年以内ナル場合ハ其ノ超過額ニ對スル前ノ相續稅ニ相當スル金額、十年以内ナル場合ハ其ノ半額ニ付テハ此ノ限ニ在ラス(3)

前項ノ場合ニ於テ後ノ相續カ財產ヲ留保シテ隱居又ハ入夫婚姻ヲ爲シタル者ニ付開始シタルモノナルトキハ前ノ相續額ヨリ其ノ隱居又ハ入夫婚姻ニ因リ開始シタル家督相續ニ於ケル課稅價格ヲ控除シタル殘額ヲ以テ前ノ相續額トス

第二條ノ六 外國ニ在ル相續財產ニ付其ノ國ノ法令ニ依リ相續稅ヲ課セラレタルトキハ相續稅法第十條ノ二ノ規定ニ依リ其ノ財產ノ價額ニ對スル分ノ相續稅ヲ免除ス但シ外國ニ在ル相續財產ノ價額ニ對スル分ノ相續稅額カ當該財產ニ付其ノ國ノ法令ニ依リ課セラレタル相續稅額ヲ超ユルトキハ其ノ超過額ニ付テハ此ノ限ニ在ラス(3)

前項ノ規定ニ依ル免除ヲ受ケムトスル者ハ相續稅ノ課稅價格決定前其ノ旨ヲ所轄稅務署ニ申請スヘシ

前項ノ申請書ニハ外國ノ法令ニ依リ課セラレタル相續稅額及課稅ノ日ヲ記載シ其ノ事實ヲ證ス
ヘキ書類ヲ添附スヘシ

第二條ノ七 相續稅法第二十三條第三項ノ規定ニ依ル控除ヲ受ケムトスル者ハ相續稅ノ課稅價格
決定前其ノ旨ヲ所轄稅務署ニ申請スヘシ(3)

前項ノ申請書ニハ贈與ノ登記ニ付登錄稅ヲ納付シタル不動産又ハ船舶ノ表示、納付シタル登錄
稅及登記ノ日並ニ其ノ登記所名ヲ記載スヘシ

第三條 稅務署長ハ相續財產ノ價額ヲ評定シテ課稅價格ヲ決定シ之ヲ納稅義務者ニ通知スヘ
シ(3)

納稅義務者ハ前項ノ決定ニ對シ其ノ説明ヲ求ムルコトヲ得(3)

第三條ノ二 相續稅法第十三條第三項ノ公告ハ納稅義務者ノ氏名及課稅價格ヲ官報ニ掲載シテ之
ヲ爲スヘシ(3)

第四條 課稅價格ノ決定ニ對シ異議アル者審査ヲ求ムトスルトキハ其ノ理由ヲ詳記シ相續稅法
第十四條ニ定メタル期間内ニ所轄稅務署長ニ申出ツヘシ(3)

第五條 稅務署長審査ノ請求ヲ受ケタルトキハ相續稅審査委員會ノ諮問ヲ經テ課稅價格ヲ決定シ
之ヲ異議申立人ニ通知スヘシ(3)

第三條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第六條 各稅務署所轄内ニ相續稅審査委員會ヲ置ク但シ稅務署所轄内ニ在ル市ニ付テハ大藏大臣
ハ特ニ審査委員會ヲ置クコトヲ得(3)

第七條 審査委員會ハ大藏大臣ノ命シタル收稅官吏二名及直接國稅百圓以上ヲ納ムル者三名ヲ以
テ之ヲ組織ス

審査委員ノ任期ハ三年トス

第八條 審査委員會ハ稅務署長ノ通知ニ依リ之ヲ開ク

第九條 審査委員會ハ毎年最初ノ開會ノ時ニ於テ審査委員中ヨリ會長ヲ選舉スヘシ

第十條 審査委員會ノ會長出席セザルトキハ出席シタル審査委員中ノ年長者之ヲ代理スヘシ

第十一條 審査委員會ハ定員ノ過半數ニ當ル委員出席スルニ非サレハ決議スルコトヲ得ス

議事ハ出席員ノ多數ヲ以テ之ヲ決ス可否同數ナルトキハ會長ノ決スル所ニ依ル

第十二條 審査委員ハ自己又ハ自己ノ親族ノ相續ニ關スル審査ノ議事ニ與ルコトヲ得ス

第十三條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ審査委員會ニ出席シテ意見ヲ陳述スルコトヲ得

第十四條 削除(3)

第十五條 相續稅ノ年賦延納ヲ求ムトスル者ハ擔保ノ種類及延納期間ヲ記シ相續稅法第十七條

ノ期間内ニ所轄稅務署ニ申請スヘシ(3)

第十六條 擔保ノ種類ハ左ニ掲クルモノニ限ル

一 稅務署長ニ於テ確實ト認ムル有價證券

二 土地

三 建物

四 稅務署長ニ於テ納稅保證ニ堪フル資力アリト認ムル保證人

第十七條 擔保トシテ有價證券ヲ提供セムトスル者ハ之ヲ供託シ其ノ供託受領證ヲ提出スヘシ

第十八條 稅務署長ニ於テ擔保物ノ價格減少シタリト認ムルトキハ稅務署長ハ抵當權ノ登記ヲ登記所ニ囑託スヘシ

第十九條 年賦延納金額ハ相續稅金額ヲ延納年間ニ平分シテ之ヲ定ム

第二十條 增擔保ヲ提供スヘキ場合ニ於テ之ヲ提供セス又ハ保證人ヲ變換スヘキ場合ニ於テ之ヲ變換セサルトキハ稅務署長ハ年賦延納ノ許可ヲ取消シ稅金ヲ一時ニ徵收スヘシ年賦延納金滯納ノ場合ニ於テモ亦同シ

第二十一條 年賦延納ノ許可ヲ受ケタル者相續稅ヲ滯納シタルトキハ擔保物アルトキハ擔保物ヲ

以テ其ノ稅金ニ充テ保證人アルトキハ保證人ニ通知シテ其ノ稅金ヲ納メシム

擔保物ヲ以テ稅金ニ充ツヘキ場合ニ於テハ之ヲ公賣ニ付シ相續稅及公賣ノ費用ニ充テ不足アルトキハ之ヲ追徵シ殘餘アルトキハ之ヲ還付ス

保證人ニ於テ稅金ヲ完納セサルトキハ納稅者ニ對シ滯納處分ヲ行ヒ仍稅金ニ不足アルトキハ保證人ニ對シ滯納處分ヲ行フ

第二十二條 年賦延納ノ許可ヲ受ケタル者相續稅ヲ完納シタルトキハ稅務署長ハ擔保解除ノ手續ヲ爲スヘシ

第二十三條 相續稅法第十二條ノ二第一項ノ規定ニ依リ支拂調書ヲ提出スル義務アル者ハ毎月支拂ヒタル生命保險(徵兵保險ヲ含ム)ノ保險金ニ付翌月十五日限支拂調書ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ(3)

前項ノ支拂調書ニハ各保險契約ニ付左ノ事項ヲ記載スヘシ

一 保險ノ種類

二 保險金額

三 保險金受取人ノ住所氏名

四 保險契約者ノ住所氏名

五 被保險者ノ住所氏名

六 保險事故及其ノ生シタル日

第二十二條ノ三 前條ニ規定スル支拂調書ヲ提出シタル者ニ對シテハ其ノ請求ニ依リ一契約毎ニ

一錢ノ割合ニ依リ計算シタル金額ヲ交付ス(3)

前項ノ金額ノ交付ヲ受ケムトスル者ハ支拂調書提出後三十日以内ニ請求書ヲ所轄稅務署ニ提出スヘシ

第二十三條 相續人相續稅法第十一條ニ依ル書類ヲ期限迄ニ提出セザルトキハ所轄稅務署長ハ期間ヲ定メテ之ヲ催告スヘシ(3)

前項ノ期間内ニ書類ヲ提出セザルトキハ所轄稅務署長ハ其ノ認ムル所ニ依リ課稅價格ヲ決定スヘシ

第二十四條 納稅義務者納稅管理人ヲ定メタルトキハ其ノ氏名及住所又ハ居所ヲ當該相續稅ノ所轄稅務署ニ申告スヘシ(3)

第二十五條 朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依リ相續稅ヲ課セラルヘキ相續カ其ノ地ニ於テ開始シタル後五年又ハ七年以内ニ於テ更ニ相續稅法施行地ニ於テ相續開始シタルトキハ相續人ハ前ノ相續開始ノ際ニ於ケル相續財產ノ目錄並ニ相續財產ノ價額ニ加算セラルヘキ贈與ノ價額

及相續財產ノ價額中ヨリ控除セラルヘキ金額ノ明細書ヲ第二條第一項ノ書類ト共ニ提出スヘシ(3)

第二十六條 第二條ノ五ノ規定ハ朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依リ相續稅ヲ課セラルヘキ相續カ其ノ地ニ於テ開始シタル後五年又ハ七年以内ニ於テ更ニ相續稅法施行地ニ於テ相續開始シタル場合ニ付之ヲ準用ス(3)

附 則

本令ハ明治三十八年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

附 則(1)

本令ハ昭和九年七月一日ヨリ之ヲ施行ス

附 則(2)

本令ハ昭和十三年法律第四十七號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ本令施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

附 則(4)

本令ハ昭和十五年法律第二十九號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス但シ本令施行前開始シタル相續ニ關シテハ仍從前ノ例ニ依ル

○相續税法施行規則第二十二條ノ二ノ規定ニ依ル支拂調書ノ書式ノ件

(昭和十三年四月一日大藏省令第十七號)

相續税法施行規則第二十二條ノ二ノ規定ニ依ル支拂調書ノ書式左ノ通定ム
書式(用紙美濃判)

何年何月分生命保險(徴兵保險)支拂調書

年 月 日

何會社代表者 氏

名 印

養老	保險ノ種類	金額	保險事故ノ生シタル日	保險金受取人		保險契約者		被保險者	
				住 所	氏 名	住 所	氏 名	住 所	氏 名
■			年月日死亡						

備考

- 一 保險契約期間中ニ保險契約者ニ異動アリタルトキハ各契約者ノ住所氏名及異動ノ日ヲ記載スルモノトス
 - 二 所轄稅務署長ノ承認ヲ受ケタルトキハ本書式ト異ナリタル書式ニ依リ調製スルコトヲ得
- 附 則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

鑛區稅

○鑛區稅法 (昭和十五年三月二十九日法律第三十一號)

第一條 本法施行地ニ在ル鑛區及砂鑛區ニハ本法ニ依リ鑛區稅ヲ課ス

第二條 鑛區稅ハ左ノ稅率ニ依リ之ヲ賦課ス

一 試掘鑛區 面積千坪毎ニ 三十錢

二 探掘鑛區 面積千坪毎ニ 六十錢

三 砂鑛區 延長一町毎ニ 三十錢

河床ニ非ザルモノ 面積千坪毎ニ 三十錢

前項ノ場合ニ於テ千坪未滿又ハ一町未滿ノ端數ハ之ヲ千坪又ハ一町トシテ計算ス

第三條 鑛區稅ハ毎年十二月中ニ翌年分ヲ徵收ス

鑛區又ハ砂鑛區ノ合併又ハ分割ニ因リ設定セラレタル場合ヲ除クノ外鑛業權 (砂鑛權ヲ含ム)

下同ジ)ノ設定又ハ變更ノ登録ニ依リ新ニ負擔シ又ハ不足セル鑛區稅ニシテ其ノ登録ノ年ニ係ルモノハ直ニ之ヲ徵收ス

試掘權ノ存續期間滿了ノ年ニ係ル鑛區稅及前項ノ規定ニ依リ徵收スベキ鑛區稅ハ月割ヲ以テ之ヲ計算ス

第四條 鑛區稅ハ納期開始ノ時ニ於ケル鑛業權者(砂鑛權者ヲ含ム以下同ジ)ヨリ之ヲ徵收ス
共同鑛業權者ハ連帶シテ納稅ノ義務ヲ負フ

公賣及競賣以外ノ原因ニ因リ鑛業權ノ移轉アリタル場合ニ於テ未納ニ係ル鑛區稅アルトキハ新鑛業權者ハ當該鑛區稅ニ付舊鑛業權者ト連帶シテ納稅ノ義務ヲ負フ

第五條 鑛業權者鑛業代理人(砂鑛業代理人ヲ含ム以下同ジ)ヲ選任シタルトキハ其ノ鑛業代理人ハ鑛區稅ニ關スル事項ノ處理ヲ委任セラレタルモノト看做ス

納稅義務者及鑛業代理人鑛區又ハ砂鑛區ノ所在地ヲ管轄スル稅務署ノ管轄區域内ニ現住セザルトキハ鑛區稅ニ關スル事項ヲ處理セシムル爲其ノ地ニ於テ納稅管理人ヲ定メ政府ニ申告スベシ

附 則

第六條 本法ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第七條 砂鑛區稅法ハ之ヲ廢止ス但シ昭和十五年分以前ノ砂鑛區稅及同附加稅ニ付テハ仍從前ノ

例ニ依ル

第八條 鑛業法中左ノ通改正ス

第十三條 削除

第四十一條中「鑛業稅」ヲ「鑛區稅」ニ改ム

第七章 削除

第八十一條乃至第八十八條 削除

第一百一條 削除

第九條 昭和十五年三月三十一日以前ニ產出シタル鑛產物ニ對スル鑛產稅及同附加稅並ニ昭和十

五年分以前ノ鑛區稅及同附加稅ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル但シ昭和十五年一月一日以後昭和十

五年三月三十一日迄ニ產出シタル鑛產物ニ對スル鑛產稅ハ昭和十五年六月中ニ之ヲ徵收ス

第十條 北海道、府縣、市町村其ノ他ノ公共團體ハ昭和十六年度分迄直接鑛業又ハ砂鑛業ノ用ニ

供スル家屋ニ對シ地方稅ヲ課スルコトヲ得ズ

第十一條 砂鑛法第二十三條中「第八十七條乃至第八十九條」ヲ「第八十九條」ニ改ム

○鑛區稅法施行規則 (昭和十五年四月一日勅令第四百四十一號)

- 第一條 鑛區又ハ砂鑛區ノ所在地ヲ管轄スル稅務署ヲ以テ鑛區稅ノ所轄稅務署トス
鑛區又ハ砂鑛區ガ二以上ノ稅務署ノ管轄區域ニ互ルトキハ其ノ面積ハ (河床ヲ區域トスル砂鑛區ニ在リテハ其ノ延長) ノ大ナル部分ノ所在地ヲ管轄スル稅務署ヲ以テ所轄稅務署トス
- 第二條 鑛業權者鑛業代理人ヲ選任シタルトキ及砂鑛權者砂鑛業代理人ヲ選任シタルトキハ其ノ氏名及住所又ハ居所ヲ鑛區稅ノ所轄稅務署ニ申告スベシ
- 第三條 納稅義務者納稅管理人ヲ定メタルトキハ其ノ氏名及住所又ハ居所ヲ鑛區稅ノ所轄稅務署ニ申告スベシ

附 則

本令ハ鑛區稅法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

有價證券移轉稅

◎有價證券移轉稅法 (昭和十二年三月三十日法律第七號)

改正附則 昭和十四年四月一日法律第五十五號(一)

- 第一條 有價證券ノ賣買、交換、贈與、遺贈其ノ他ノ原因ニ因ル移轉アリタルトキハ本法ニ依リ有價證券移轉稅ヲ課ス
- 第二條 本法ニ於テ有價證券トハ國債證券、地方債證券、社債券、產業債券、商工債券及株券並ニ外國又ハ外國法人ノ發行スル此等ノ性質ヲ有スル證券ヲ謂フ
- 第三條 甲種國債登錄簿ニ登錄シタル國債ニ付テノ名義變更及會社ノ社員ノ持分ノ移轉ハ之ヲ有價證券ノ移轉ト看做ス
- 第四條 有價證券移轉稅ハ有價證券ノ取得者之ヲ納ムベシ
- 第五條 有價證券移轉稅ハ左ノ區別ニ從ヒ之ヲ納ムベシ
- 第一種 有價證券仲買人ヲ買受人トスル賣買取引ニ因ル移轉

國債證券 取得價額 萬分ノ一
其ノ他ノ有價證券 取得價額 萬分ノ二

第二種 第一種以外ノ移轉

甲 取引所ノ實物市場ニ於ケル賣買取引ニ因ル移轉
國債證券 取得價額 萬分ノ二
其ノ他ノ有價證券 取得價額 萬分ノ四

乙 其ノ他

國債證券 取得價額 萬分ノ四
其ノ他ノ有價證券 取得價額 萬分ノ八

第六條 前條ノ取得價額ハ賣買ニ因ル移轉ニ付テハ賣買價額ニ依リ其ノ他ノ原因ニ因ルモノニ付テハ移轉ノ時ノ價額ニ依ル

第七條 有價證券移轉稅ハ總テ一錢以上トス一錢未満ノ端數ハ一錢トシテ之ヲ計算ス

第八條 營利ヲ目的トセザル法人ニシテ所得稅法其ノ他ノ法律ニ依リ所得稅ヲ課セラレザル者ハ有價證券移轉稅ヲ納ムルコトヲ要セズ

第九條 左ニ掲グル有價證券ニ付テハ有價證券移轉稅ヲ納ムルコトヲ要セズ

一 一年内ノ期限ヲ以テ發行スル國債證券

二 國債證券、地方債證券、勸業債券及命令ヲ以テ指定スル社債券ニシテ額面金額二十圓以下ノモノ(一)

第十條 左ノ各號ノ一二該當スル有價證券ノ移轉ニ付テハ有價證券移轉稅ヲ納ムルコトヲ要セズ

一 相續、法人ノ合併又ハ保險業法第十三條ノ五ノ規定ニ依ル保險契約ノ全部ノ移轉ニ因ル有價證券ノ移轉

二 日本銀行ヲ賣買ノ當事者トスル國債證券ノ移轉

三 信託ノ場合ニ於ケル委託者ヨリ受託者ヘノ有價證券ノ移轉

四 信託終了ノ場合ニ於ケル受託者ヨリ委託者又ハ其ノ相續人ヘノ有價證券ノ移轉

五 消費貸借及其ノ終了ノ場合ニ於ケル無記名有價證券ノ移轉

六 短期清算取引ニ於ケル受渡調節ノ爲ノ賣買取引ヲ業トスル會員又ハ取引員ノ代引ニ因ル有價證券ノ移轉

七 第一號及第三號ノ場合ノ外會社ガ自己ノ株式ヲ取得スル場合ニ於ケル有價證券ノ移轉

八 賣出ノ方法ニ依リ發行スル場合ノ有價證券ノ移轉

第十一條 國債、地方債又ハ社債ノ總額ヲ契約ニ依リ引受ケタル者又ハ募集ノ委託ヲ受ケ自ラ其

ノ一部ヲ引受ケタル者ヨリノ引受ケタル有價證券ノ移轉ニ付テハ發行ノ日ヨリ一年内ニ限り有價證券移轉税ヲ納ムルコトヲ要セズ下引受ヲ爲シタル者ヨリノ下引受ヲ爲シタル有價證券ノ移轉ニ付亦同ジ

第十二條 有價證券移轉税ハ有價證券ノ移轉毎ニ移轉當事者ガ命令ノ定ムル所ニ依リ作成スル有價證券移轉書ニ印紙ヲ貼用シテ之ヲ納ムベシ

有價證券仲買人ノ取扱ニ依ル有價證券ノ移轉ニ付テハ前項ノ規定ニ依ラズ移轉ノ際有價證券仲買人其ノ税金ヲ徴收シ翌月十日迄ニ之ヲ政府ニ納ムベシ有價證券仲買人ヨリ移轉當事者トスル有價證券ノ移轉ニ付亦同ジ

第十三條 前條第二項ノ規定ニ依リ徴收スベキ有價證券移轉税ヲ徴收セザルトキ又ハ其ノ徴收シタル税金ヲ納付セザルトキハ國稅徴收ノ例ニ依リ之ヲ有價證券仲買人ヨリ徴收ス

第十四條 本法ニ於テ有價證券仲買人トハ有價證券ノ賣買又ハ其ノ媒介ヲ爲スヲ業トスル者ヲ謂フ

第十五條 有價證券仲買人ノ業ヲ營マントスル者ハ每營業所ニ付豫メ政府ニ申告スベシ其ノ營業ヲ廢止セントスルトキ亦同ジ

第十六條 有價證券仲買人ハ營業ニ關スル帳簿ヲ備ヘ命令ノ定ムル事項ヲ之ニ記載スベシ

第十七條 納稅義務者ハ有價證券移轉書ニ印紙ヲ貼用スルトキハ移轉書ノ紙面ト印紙ノ彩紋トニカケテ自己ノ印章又ハ署名ヲ以テ判明ニ之ヲ消スベシ

第十八條 第十二條第一項ニ規定スル有價證券移轉書ニ付テハ印紙稅法ニ依ル印紙稅ヲ納ムルコトヲ要セズ

第十九條 收稅官吏ハ有價證券仲買人ニ對シ有價證券ノ移轉ニ關スル事項ニ付質問シ又ハ其ノ帳簿書類ヲ検査スルコトヲ得

第二十條 有價證券移轉書ニ有價證券ノ取得價額ニ應ズル相當印紙ヲ貼用セザル者ハ其ノ脱稅高五倍ノ罰金又ハ科料ニ處ス但シ科料額ガ三圓ニ滿タザルトキハ之ヲ三圓トス

有價證券移轉書ヲ作成セズ因テ有價證券移轉税ヲ逃脫シタル者亦前項ニ同ジ

第二十一條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ因リ有價證券移轉税ヲ逃脫シタル有價證券仲買人ハ其ノ脱稅高五倍ノ罰金ニ處シ直ニ其ノ有價證券移轉税ヲ徴收ス但シ罰金額ガ二十圓ニ滿タザルトキハ之ヲ二十圓トス

第二十二條 第十五條ノ規定ニ違反シ政府ニ申告セズシテ有價證券仲買人ノ業ヲ營ミタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 第十七條ノ規定ニ違反シ有價證券移轉書ニ貼用シタル印紙ヲ消サザル者ハ有價證券

移轉書毎ニ消サザル貼用印紙額ノ二倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス但シ科料額ガ一圓ニ滿タザルトキハ之ヲ一圓トス

第二十四條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ百圓以下ノ罰金又ハ科料ニ處ス

一 第十六條ノ規定ニ違反シ帳簿ヲ備ヘズ又ハ之ニ虚偽ノ記載ヲ爲シタル者

二 第十九條ノ規定ニ依ル收稅官吏ノ質問ニ對シ答辯ヲ爲サズ若ハ虚偽ノ陳述ヲ爲シ又ハ其ノ職務ノ執行ヲ拒ミ、妨ゲ若ハ忌避シタル者

第二十五條 第二十條又ハ第二十三條ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第一項ノ規定ヲ適用セズ

第二十條、第二十一條又ハ第二十三條ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ規定ヲ適用セズ

第二十六條 有價證券ノ移轉當事者又ハ有價證券仲買人ノ代理人、戶主、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ガ有價證券ノ移轉ニ關シ本法ヲ犯シタルトキハ其ノ有價證券ノ移轉當事者又ハ有價證券仲買人ヲ處罰ス

附 則

本法ハ昭和十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行前ヨリ引續キ有價證券ノ賣買又ハ其ノ媒介ヲ爲スヲ業トスル者本法施行後一月内ニ其ノ旨ヲ政府ニ申告スルトキハ本法施行ノ日ニ於テ本法ニ依リ申告シタルモノト看做ス

附 則(一)

本法ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

○有價證券移轉稅法施行規則 (昭和十二年三月三十一日勅令第五十七號)

第一條 有價證券移轉稅法第九條第二號ノ規定ニ依リ左ノ有價證券ヲ指定ス

- 一 農工債券、興業債券、北海道拓殖債券、貯蓄債券、復興貯蓄債券
- 二 朝鮮殖産債券、鮮滿拓殖債券

第二條 有價證券移轉稅法第十二條第一項ニ規定スル有價證券移轉書ハ有價證券ノ移轉當事者移轉ノ際之ヲ作成シ記名捺印スベシ但シ已ムコトヲ得ザル事由アルトキハ有價證券ノ取得者有價證券移轉書ヲ作成シ記名捺印スルヲ以テ足ル

第三條 有價證券移轉書ニハ左ノ事項ヲ記載スベシ

有價證券移轉稅 有價證券移轉稅法施行規則

- 一 有價證券ノ種類、名稱、記號、番號及數
 - 二 有價證券ノ額面金額、株券ニ在リテハ拂込金額
 - 三 有價證券ノ取得價額
 - 四 有價證券移轉稅額
 - 五 移轉ノ原因及年月日
 - 六 移轉當事者ノ住所及氏名又ハ名稱
- 有價證券移轉稅法第三條ニ規定スル甲種國債登錄簿ニ登錄シタル國債ニ付テノ名義變更及會社ノ社員ノ持分ノ移轉ニ關スル有價證券移轉書ニ在リテハ前項各號ニ準ズル事項ヲ記載スベシ
- 第四條 有價證券移轉稅法第十二條第二項ノ規定ニ依リ有價證券仲買人有價證券移轉稅ヲ徵收シタルトキハ翌月十日迄ニ拂込書及計算書ヲ添ヘ之ヲ最寄ノ日本銀行ノ本店、支店又ハ代理店ニ拂込ムベシ
- 第五條 有價證券仲買人ノ業ヲ營マントスル者ハ每營業所ニ付豫メ其ノ所在地、住所及氏名又ハ名稱ヲ記載シタル申告書ヲ營業所所轄稅務署ニ提出スベシ其ノ營業ヲ廢止セントスルトキ亦同
- 第六條 有價證券仲買人營業所ヲ移轉セントスルトキハ其ノ營業所ヲ定メ移轉先ノ所轄稅務署ニ

申告スベシ

- 第七條 有價證券仲買人ノ業ヲ相續又ハ合併ニ因リ承繼シタル者ハ其ノ旨ヲ所轄稅務署ニ申告スベシ
- 第八條 有價證券仲買人ハ賣買又ハ其ノ媒介ヲ爲シタル有價證券ノ移轉ニ付少クトモ左ノ事項ヲ帳簿ニ記載スベシ
- 一 有價證券ノ種類、名稱、記號、番號及數
 - 二 有價證券ノ額面金額、株券ニ在リテハ拂込金額
 - 三 有價證券ノ賣買價額
 - 四 有價證券移轉稅額
 - 五 移轉ノ年月日
 - 六 委託ヲ受ケタル年月日
 - 七 移轉當事者ノ住所及氏名又ハ名稱
- 第九條 收稅官吏有價證券移轉稅法第十九條ノ規定ニ依リ帳簿書類ヲ検査スルトキハ検査章ヲ携帶スベシ

附 則

有價證券移轉稅 有價證券移轉稅法施行規則

本令ハ昭和十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
 有價證券移轉稅法附則第二項ノ規定ニ依リ政府ニ申告セントスル者ハ每營業所ニ付第五條ノ規定ニ準ジテ作成シタル申告書ニ同法施行前ヨリ引續キ有價證券仲買人ノ業ヲ營ムコトノ事實ヲ併セ記載シ之ヲ營業所所轄稅務署ニ提出スベシ

○有價證券移轉稅法施行細則 (昭和十二年四月一日大藏省令第七號)

- 第一條 有價證券移轉稅法施行規則第四條ノ規定ニ依ル拂込書ハ第一號書式ニ、計算書ハ第三號書式ニ依リ調製スベシ
 - 第二條 日本銀行ニ於テ有價證券移轉稅ノ拂込ヲ受ケタルトキハ第二號書式ノ領收證ヲ拂込者ニ交付シ同號書式ノ通知書ニ拂込者ノ提出シタル計算書ヲ添付シ之ヲ歳入徵收官ニ送付スベシ
 - 第三條 有價證券移轉稅ノ過誤納アリタル爲之ガ拂戻ヲ請求セントスル者ハ其ノ事由ヲ具シ有價證券移轉稅ノ所轄稅務署長ヲ經由シテ稅務監督局長ニ請求書ヲ提出スベシ
- 附 則
 本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第一號書式(用紙適宜輪廓四寸五分三三分)

有價證券移轉稅拂込書

第何號	何年度	大藏省主管		
租	稅	有價證券移轉稅	有價證券移轉稅	何稅務署
<div style="border: 1px solid black; width: 80%; margin: 0 auto; padding: 5px;"> Y 圓 </div>				
頭書ノ金額拂込候也				
何縣何郡何町何番地				
何 某 圓				
(其ノ他之ニ準ズ)				
日本銀行何店宛				
昭和何年何月何日				

備 考

本書ノ年度ハ拂込ノ日ヲ以テ區別シ記入スベシ

有價證券移轉稅 有價證券移轉稅法施行規則

備考

領收證書

日本銀行ハ本書式ノ左側ニ原符ヲ附屬セシムルコトヲ得

有價證券移轉稅 有價證券移轉稅法施行規則

第何號	何年度	有價證券移轉稅		
何縣何郡何町何番地				
何 某 納				
(其ノ他之ニ準ズ)				
<table border="1"> <tr> <td>Y</td> <td>圓</td> </tr> </table>			Y	圓
Y	圓			
昭和何年何月何日領收				
日本銀行何店 印				

通知書

第二號書式 (用紙適宜輪廓三寸五分二枚接續)

新稅法

第何號	何年度	大藏省主管		
租稅	有價證券移轉稅	有價證券移轉稅 何稅務署		
何縣何郡何町何番地				
何 某 納				
(其ノ他之ニ準ズ)				
<table border="1"> <tr> <td>Y</td> <td>圓</td> </tr> </table>			Y	圓
Y	圓			
昭和何年何月何日領收				
日本銀行何店 印				
何稅務署長官氏名殿				

昭和何年何月分
有價證券移轉稅徵收高計算書

區 分	賣買 價額	内 課			稅額	摘要
		課 稅	非課稅	其ノ他		
第一種						
國債證券						
其ノ他ノ 有價證券						
第二種甲						
國債證券						
其ノ他ノ 有價證券						
第二種乙						
國債證券						
其ノ他ノ 有價證券						
合 計						

昭和何年何月何日
何某又ハ何會社

- 備 考
- 一 賣買價格ノ欄ニハ其ノ月ニ於テ取扱ヒタル全部ノ有價證券ノ賣買價額ヲ掲グルモノトス
 - 二 非課稅ノ分ニハ有價證券移轉稅法第八條乃至第十一條ノ規定ニ依リ課稅セラレザル有價證券ノ移轉ノ分ヲ掲ゲ其ノ明細書ヲ添付スルモノトス
 - 三 其ノ他ノ分ニハ他ノ有價證券仲買人ニ於テ有價證券移轉稅ヲ徵收スベキ有價證券ノ移轉ノ分ヲ掲グルモノトス
 - 四 課稅シタル件數ヲ稅率區分別ニ摘要欄ニ記載スルモノトス

臨時利得稅

○臨時利得稅法 (昭和十年三月三十日法律第二十號)

改正沿革 昭和十二年三月三十日法律第三號(1)

昭和十三年三月三十一日法律第四十三號第四十四號第四十五號(2)

昭和十四年三月三十一日法律第四十九號(3)

昭和十五年三月二十九日法律第三十二號(4)

- 第一條 本法施行地ニ住所ヲ有シ又ハ一年以上居所ヲ有スル者ハ本法ニ依リ臨時利得稅ヲ納ムル義務アルモノトス
- 第二條 前條ノ規定ニ該當セザル者本法施行地ニ資産又ハ營業ヲ有スルトキハ其ノ利得ニ付テノ臨時利得稅ヲ納ムル義務アルモノトス
- 第三條 臨時利得稅ハ左ノ利得ニ付之ヲ賦課ス

一 法人ノ利得

二 所得税法第十條ニ掲グル營業ニ因ル個人ノ利得(營業利得ト稱ス以下同ジ)(4)

三 船舶(製造中ノ船舶ヲ含ム)又ハ鑛業若ハ砂鑛業ニ關スル權利若ハ設備ノ讓渡ニ因ル個人ノ利得(讓渡利得ト稱ス以下同ジ)

第四條 法人ノ現事業年度ノ利益ガ現事業年度ノ資本金額ニ對シ年百分ノ十ノ割合ヲ乘ジテ算出シタル金額ヲ超過スル場合ニ於テ其ノ超過額ヲ以テ法人ノ利得トス(4)

第五條 法人ノ現事業年度ノ利益ハ現事業年度ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シタル金額ニ依ル但シ相互保險會社及會員組織ノ取引所ニ在リテハ現事業年度ノ剩餘金ニ依ル(4)

法人ガ現事業年度ニ於テ納付シタル又ハ納付スベキ法人税及臨時利得税並ニ當該事業年度ニ於テ納付シタル分類所得税ニシテ法人税法第十六條ノ規定ニ依リ其ノ額ヲ法人税額ヨリ控除スベキモノハ前項ノ利益ノ計算上之ヲ損金ニ算入セズ(4)

法人ノ現事業年度開始ノ日前三年以内ニ開始シタル事業年度ニ於テ生ジタル損金ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノハ現事業年度ノ利益ノ計算上之ヲ損金ニ算入ス(4)

前二項ノ規定ハ相互保險會社又ハ會員組織ノ取引所ノ剩餘金ノ計算ニ付之ヲ準用ス(4)
本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有セザル法人ノ利益ハ本法施行地ニ於ケル資産又ハ營業

ニ付前四項ノ規定ニ準ジ之ヲ計算ス(4)

第五條ノ二 法人ガ事業年度中ニ解散シ又ハ合併ニ因リテ消滅シタル場合ニ於テハ其ノ事業年度ノ始ヨリ解散又ハ合併ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ一事業年度ト看做ス(4)

第五條ノ三 所得税法第六條及第七條ノ規定ハ臨時利得税ノ賦課ニ付之ヲ準用ス(4)
信託會社ノ現事業年度ノ利益ノ計算ニ付テハ合同運用信託ニ因ル收入及支出ハ其ノ總益金及總

損金ヨリ各之ヲ控除ス(4)
第六條 法人ノ現事業年度ノ資本金額ハ各月末ニ於ケル拂込株式金額、出資金額、基金又ハ醜金

及積立金額ノ月割平均ヲ以テ之ヲ計算ス(4)
本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有セザル法人ノ資本金額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ計

算ス
第七條 本法ニ於テ積立金額トハ積立金其ノ他名義ノ何タルヲ問ハズ法人ノ各事業年度ノ利益中

其ノ留保シタル金額ヲ謂フ(4)
法人税及臨時利得税トシテ納付スベキ金額ハ前項ノ留保シタル金額ニハ之ヲ算入セズ(4)

第八條 合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ利得ニ付臨時利得税ヲ納ムル義務アルモノトス

第九條 個人ノ利益ガ昭和十一年以前三年ノ平均利益ヲ超過スル場合ニ於テ其ノ超過額ヲ營業利得トス(4)

第九條ノ二 前條ノ規定ニ依リ營業利得ヲ計算スル場合ニ於テ昭和十一年以前三年ノ平均利益ガ七千圓又ハ現年ノ利益ノ三分ノ一ニ相當スル金額ノ何レカ多額ナル一方ノ金額ニ達セザルトキハ其ノ多額ナル一方ノ金額ヲ以テ平均利益トス(4)

第十條 個人ノ利益ハ前年中ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費(收入ヲ得ルニ必要ナル負債ノ利子ヲ含ム以下同ジ)ヲ控除シタル金額ニ依ル(4)

所得稅及臨時利得稅ハ前項ノ必要ノ經費ニ之ヲ算入セズ(4)
相續シタル營業ニ付テハ相續人ガ引續キ之ヲ爲シタルモノト看做シテ其ノ利益ヲ計算ス
營業ヲ讓渡シ又ハ廢止シタル後相續ノ開始アリタル場合ニ於テハ被相續人ノ營業利得ハ相續人ノ營業利得ト看做ス(4)

第十條ノ二 營業ヲ繼續シ又ハ營業繼續ト認ムベキ事實アル個人ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ前營業者ノ平均利益ヲ其ノ平均利益ト看做ス(2)

個人ノ營業ノ期間ガ一年未滿ナル場合ニ於ケル平均利益ノ計算ニ付テハ命令ヲ以テ之ヲ定ム
第十一條 個人ノ利益ガ一萬圓未滿ナルトキハ營業利得ニ對スル臨時利得稅ヲ課セズ(4)

第十一條ノ二 讓渡利得ハ船舶又ハ鑛業若ハ砂鑛業ニ關スル權利若ハ設備ノ讓渡ニ因ル收入金額ヨリ取得價額、設備費、改良費及讓渡ニ關スル必要ノ經費ヲ控除シタル金額ニ依ル

船舶又ハ鑛業若ハ砂鑛業ニ關スル權利若ハ設備ニシテ昭和十一年十二月三十一日以前ニ取得シタルモノニ付テハ同日ニ於ケル價額ヲ以テ前項ノ取得價額トシ同日後ニ爲シタル設備又ハ改良ニ要シタル費用ノミヲ以テ前項ノ設備費又ハ改良費トス

前二項ノ計算ニ關シテハ相續、贈與又ハ遺贈ニ因リ取得シタルモノハ相續人、受贈者又ハ受遺者ガ引續キ之ヲ有シタルモノト看做シ讓渡後相續ノ開始アリタル場合ニ於テハ被相續人ノ爲シタル讓渡ハ之ヲ相續人ノ爲シタル讓渡ト看做ス

前三項ニ定ムルモノノ外讓渡利得ノ計算ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條ノ三 讓渡利得ニ付テハ其ノ利得ノ金額ヨリ二千圓ヲ控除ス

第十二條 營利ヲ目的トセザル法人ニシテ法人稅法其ノ他ノ法律ニ依リ法人稅ヲ課セラレザルモノニハ臨時利得稅ヲ課セズ(4)

第十三條 個人ノ自己ノ收穫シタル農產物、林產物、畜產物若ハ水產物ノ販賣又ハ之ヲ原料トスル製造ノ利益ニ付テハ本法ヲ適用セズ但シ特ニ營業場ヲ設ケテ爲ス販賣又ハ製造ノ利益ハ此ノ限ニ在ラズ

第十三條ノ二 船舶ノ讓渡ニ因ル利益ニシテ第九條ノ個人ノ利益ニ屬スルモノ及昭和十四年一月一日以後ニ於テ設定セラレタル債業又ハ砂債業ニ關スル權利ニシテ命令ノ定ムルモノノ讓渡ニ付テハ本法中讓渡利得ニ關スル規定ヲ適用セズ

第十四條 法人ノ臨時利得稅ハ法人ノ利得ヲ左ノ部分ニ區分シ各部分ニ付左ノ稅率ヲ適用シテ之ヲ賦課ス(4)

一 利益金額中現事業年度ノ資本金額ニ年百分ノ十ノ割合ヲ乘ジテ算出シタル金額ヲ超エ現事業年度ノ資本金額ニ既往事業年度ノ平均利益率ヲ乘ジテ算出シタル金額以下ノ金額ヨリ成ル部分ノ利得(4)

利得金額ノ百分ノ二十五

二 利益金額中現事業年度ノ資本金額ニ既往事業年度ノ平均利益率ヲ乘ジテ算出シタル金額ヲ超エ現事業年度ノ資本金額ニ年百分ノ三十ノ割合ヲ乘ジテ算出シタル金額以下ノ金額ヨリ成ル部分ノ利得(4)

利得金額ノ百分ノ四十五

三 利益金額中現事業年度ノ資本金額ニ對シ年百分ノ三十ノ割合ヲ乘ジテ算出シタル金額ヲ超ユル金額ヨリ成ル部分ノ利得(4)

利得金額ノ百分ノ六十五

現事業年度ノ資本金額十萬圓以下ナル法人ニ限リ前項ニ規定スル稅率百分ノ二十五ハ之ヲ百分ノ十五トシ同百分ノ四十五ハ之ヲ百分ノ三十五トシ同百分ノ六十五ハ之ヲ百分ノ五十五トス(4)

第十四條ノ二 前條ノ規定ニ依リ現事業年度ノ資本金額ニ乘ズベキ既往事業年度ノ平均利益率ハ昭和十一年十二月三十一日以前三年内ニ終了シタル事業年度ノ全部ノ平均利益ノ平均資本金額ニ對スル割合トス但シ其ノ割合ガ年百分ノ十未満ナルトキ又ハ法人ノ第一次事業年度ガ昭和十二年一月一日以後ニ終了シタルトキハ其ノ割合ヲ年百分ノ十トシ其ノ割合ガ年百分ノ二十ヲ超ユルトキハ之ヲ年百分ノ二十トス(4)

第五條(第二項及第三項ヲ除ク)乃至第六條及第七條第一項ノ規定ハ前項ノ平均利益及平均資本金額算出ノ基礎タル昭和十一年十二月三十一日以前三年内ニ終了シタル各事業年度ノ利益及資本金額ノ計算ニ付之ヲ準用ス此ノ場合ニ於テ當該事業年度ニ於テ納付シタル又ハ納付スベカリシ第一種所得稅、第一種所得稅附加稅、命令ヲ以テ指定スル第一種所得稅附加稅ニ相當スル租稅及臨時利得稅並ニ當該事業年度ニ於テ納付シタル第二種所得稅ニシテ所得稅法ニ依リ其ノ額ヲ第一種所得稅額ヨリ控除シタルモノハ當該事業年度ノ利益ノ計算上之ヲ損金ニ算入セズ(4)

第十四條ノ三 前條第一項ノ規定ニ依ル既往事業年度ノ平均利益率ガ年百分ノ十ノ割合ヲ超ユル
 場合ニ於テ現事業年度ノ資本金額中ニ増加資本金額アルトキハ同項ノ規定ニ拘ラズ現事業年度
 ノ資本金額中増加資本金額ニ年百分ノ十ノ割合ヲ乘ジテ算出シタル金額ト増加資本金額以外ノ
 部分ニ同項ノ規定ニ依ル既往事業年度ノ平均利益率ニ相當スル割合ヲ乘ジテ算出シタル金額ト
 ノ合計額ノ現事業年度ノ資本金額ニ對スル割合ヲ以テ既往事業年度ノ平均利益率トス(4)

前項ノ増加資本金額トハ現事業年度ノ資本金額ガ昭和十一年十二月三十一日ニ於ケル資本金額
 又ハ同日以前三年内ニ終了シタル事業年度ノ全部ノ平均資本金額ノ何レカ多額ナル一方ノ金額
 ヲ超過スル場合ニ於ケル其ノ超過額ヲ謂フ(4)

昭和十一年十二月三十一日ニ於ケル資本金額ハ同日ニ於ケル拂込株式金額、出資金額、基金又
 ハ融金及積立金額ニ依リ之ヲ計算ス(4)

第六條第二項ノ規定ハ前項ノ計算ニ付之ヲ準用ス(4)

第十四條ノ四 法人合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存續スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル
 法人ノ昭和十一年十二月三十一日以前三年内ニ終了シタル事業年度ノ全部ノ平均利益及平均
 資本金額並ニ昭和十一年十二月三十一日ニ於ケル資本金額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ計算
 ス(4)

第十四條ノ五 個人ノ臨時利得稅ハ左ノ稅率ニ依リ之ヲ賦課ス(4)

營業利得

利得金額ノ百分ノ三十

讓渡利得

利得金額ノ百分ノ二十五

第十五條 納稅義務アル法人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ利得金額ヲ政府ニ申告スベシ

第十六條 營業利得ニ付納稅義務アル個人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ毎年三月十五日迄ニ利得金額
 ヲ政府ニ申告スベシ(4)

讓渡利得ニ付納稅義務アル個人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ利得金額ヲ政府ニ申告スベシ

第十七條 法人ノ利得金額ハ第十五條ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルト
 キハ政府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定シ營業利得金額ハ所得稅法ノ所得調査委員會ノ調査
 ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス(4)

所得調査委員會閉會後營業利得ノ金額ノ決定ニ付脱漏アルコトヲ發見シタルトキハ其ノ決定ヲ
 爲スベカリシ年ノ翌年ヨリ三年間ハ仍所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ利得金額ヲ
 決定スルコトヲ得(2・4)

所得調査委員會閉會後營業利得ニ付納稅義務アルコトヲ申出デ又ハ利得金額ノ増加アルコトヲ
 申出デタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラズ政府ニ於テ其ノ利得金額ヲ決定スス(4)

譲渡利得金額ハ前條第二項ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

第十八條 稅務署長ハ毎年營業利得ニ付納稅義務アリト認ムル者ノ利得金額ヲ調査シ其ノ調査書ヲ所得調査委員會ニ送付スベシ(4)

前項ノ規定ハ前條第二項ノ場合ニ之ヲ準用ス

第十九條 所得稅法第三十七條、第三十八條及第六十三條ノ規定ハ利得金額ノ決議及決定ニ付之ヲ準用ス(4)

第二十條 第十七條又ハ前條ノ規定ニ依リ利得金額ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ

第二十一條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル利得金額ニ對シテ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得

前項ノ請求アリタル場合ト雖モ政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セズ

第二十二條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得稅法ノ所得審査委員會ノ決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得稅法第三十八條及第六十八條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ之ヲ準用ス(4)

第二十三條 削除(4)

第二十四條 削除(4)

第二十五條 第二十二條ノ決定ニ對シ不服アル者ハ訴願ヲ爲シ又ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得(4)

第二十六條 法人ノ利得ニ付テハ事業年度毎ニ臨時利得稅ヲ徵收ス

營業利得ニ付テハ臨時利得稅ノ年額ヲ四分シ左ノ四期ニ於テ之ヲ徵收ス但シ納稅義務者納稅管理人ノ申告ヲ爲サズシテ本法施行地外ニ住所又ハ居所ヲ移ストキハ直ニ其ノ臨時利得稅ヲ徵收スルコトヲ得(4)

第一期 其ノ年八月一日ヨリ三十一日限(4)

第二期 其ノ年十月一日ヨリ三十一日限

第三期 翌年一月一日ヨリ三十一日限

第四期 翌年三月一日ヨリ三十一日限

譲渡利得ニ付テハ船舶又ハ鑛業若ハ砂鑛業ニ關スル權利若ハ設備ノ譲渡ノ際臨時利得稅ヲ徵收ス

第二十七條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ依リ臨時利得稅ヲ遁脫シタル者ハ其ノ遁脫シタル税金ノ三

倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス但シ自首シタル者又ハ稅務署長ニ申出デタル者ハ其ノ罪ヲ問ハズ

前項ノ場合ニ於テ營業利得ニ付臨時利得稅ヲ遁脫シタル者ノ利得金額ハ第十七條第二項ノ規定ニ拘ラズ政府ニ於テ之ヲ決定シ直ニ其ノ稅金ヲ徵收ス(4)

第二十八條 臨時利得稅ノ調査又ハ審査ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル祕密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ五百圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十九條 本法ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ例ヲ用ヒズ但シ前條ノ罪ヲ犯シタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

第三十條 所得稅法第三十六條第四項、第三十九條第二項、第七十五條、第七十六條、第八十一條、第八十二條及第八十四條乃至第八十六條並ニ法人稅法第二十八條ノ規定ハ臨時利得稅ニ付之ヲ準用ス(4)

第三十一條 朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ノ利得ニ付テハ臨時利得稅ヲ課セズ(4)

第八條ノ規定ハ朝鮮、臺灣、關東州又ハ樺太ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ガ朝鮮、臺

灣、關東州、樺太又ハ本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ト合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存續スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ガ本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル場合ニ付之ヲ準用ス(4)

朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ住所ヲ有シ又ハ一年以上居所ヲ有スル個人ノ利得ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ臨時利得稅ヲ課セズ(4)

第三十二條 大正十三年法律第六號ニ依リ所得稅、法人稅及營業稅ヲ免除セラルル所得及純益ニ付テハ本法ヲ適用セズ(4)

第三十三條 北海道、府縣、市町村其ノ他ノ公共團體ハ臨時利得稅ノ附加稅ヲ課スルコトヲ得ズ

附 則

本法ハ昭和十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ法人ニ付テハ昭和十年一月一日ヲ含ム事業年度分ヨリ、個人ニ付テハ昭和十年分ヨリ之ヲ適用ス

本法ニ依ル臨時利得稅ノ賦課ハ法人ニ付テハ支那事變終了ノ年ノ翌年十二月三十一日迄ニ終了スル事業年度分限リ、營業利得ニ付テハ支那事變終了ノ翌年分限リ、讓渡利得ニ付テハ支那事變終了ノ年ノ翌年十二月三十一日迄ノ讓渡ニ因ル利得ニ對スル分限リトス(2・4)

第十六條ノ規定中三月十五日トアルハ昭和十年ニ限リ四月二十五日トス

明治四十年法律第二十一號第一條第一項ニ左ノ一號ヲ加フ
六 臨時利得税

附則 (2)

- 第一條 本法ハ昭和十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
- 第二條 法人ノ臨時利得税ニ付テハ昭和十三年一月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、個人ノ臨時利得税ニ付テハ昭和十三年年度分ヨリ本法ヲ適用ス但シ第二十四條ノ二ノ規定ハ昭和十二年度分臨時利得税ヨリ之ヲ適用ス
- 第三條 臨時租税増徴法第十九條ノ規定ハ昭和十三年一月一日以後ニ終了スル法人ノ各事業年度分ノ臨時利得税及昭和十三年分以降ノ個人ノ臨時利得税ニ付テハ之ヲ適用セズ
- 第四條 昭和十三年三月三十一日迄ニ終了シタル法人ノ各事業年度分ノ臨時利得税ニ付テハ第十四條ノ改正規定ニ拘ラズ甲種利得ニ對スル臨時利得税ノ税率ヲ利得金額ノ百分ノ十五トス
- 第五條 北支事件特別税法第八條ノ規定ヲ適用スル場合ニ於テハ法人ノ甲種利得ニ對スル臨時利得税額ヲ以テ同條ニ規定スル臨時利得税額トス
- 第六條 臨時利得税法第十六條ノ規定中三月十五日トアルハ昭和十三年ニ限り四月十五日トス

附則 (3)

本法ハ昭和十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
 法人ノ臨時利得税ニ付テハ昭和十四年一月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、個人ノ甲種利得又ハ乙種利得ニ對スル臨時利得税ニ付テハ昭和十四年分ヨリ本法ヲ適用ス
 譲渡利得ニ對スル臨時利得税ニ付テハ昭和十四年一月一日以後ノ譲渡ニ因ル利得ニ對シ本法ヲ適用ス

附則 (4)

- 第一條 本法ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
- 第二條 法人ノ臨時利得税ニ付テハ昭和十五年四月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、營業利得ニ對スル臨時利得税ニ付テハ昭和十五年分ヨリ本法ヲ適用ス
- 第三條 昭和十五年四月一日ヲ含ム事業年度ノ直前事業年度分ノ第一種所得税、第一種所得税附加税、法人資本税及命令ヲ以テ指定スル第一種所得税附加税ニ相當スル租税ハ之ヲ法人税ト看做シ當該事業年度ニ於テ納付シタル第二種所得税及資本利子税ニシテ法人税法第三十八條ノ規定ニ依リ其ノ額ヲ法人税額ヨリ控除スベキモノハ之ヲ分類所得税ト看做シ第五條第二項ノ改正規定ヲ適用ス
- 法人ガ本法施行前ニ合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタ

ル法人ノ合併ノ日ヲ含ム事業年度ガ本法施行後ニ終了スル場合ニ於ケル合併ニ因リ消滅シタル法人ノ最後ノ事業年度分ノ第一種所得稅、第一種所得稅附加稅、法人資本稅及命令ヲ以テ指定スル第一種所得稅附加稅ニ相當スル租稅並ニ清算所得ニ對スル第一種所得稅及第一種所得稅附加稅ハ之ヲ法人稅ト看做シ第五條第二項ノ改正規定ヲ適用ス

第四條 本法施行後終了スル事業年度ニ於テ納付シタル第二種所得稅及資本利子稅ニシテ法人稅法第三十八條ノ規定ニ依リ其ノ額ヲ法人稅額ヨリ控除スベキモノハ之ヲ分類所得稅ト看做シ第五條第二項ノ改正規定ヲ適用ス

第五條 昭和十五年四月一日ヲ含ム事業年度ノ直前事業年度前ノ各事業年度分ノ臨時利得稅ハ第五條第二項ノ改正規定ニ拘ラズ法人ノ現事業年度ノ利益ノ計算上之ヲ損金ニ算入ス

第六條 昭和十四年一月一日ヨリ昭和十六年一月一日ニ至ル期間引續キ爲シタルニ非ザル營業ニ因ル個人ノ利得ニ付テハ政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ昭和十五年分又ハ昭和十六年分ニ限り臨時利得稅ヲ輕減若ハ免除シ又ハ營業利得金額ノ計算ニ關シ特例ヲ設クルコトヲ得

第七條 第十六條ノ改正規定中三月十五日トアルハ昭和十五年ニ限り四月十五日トス

○臨時利得稅法施行規則 (昭和十年三月三十日勅令第三十七號)

改正沿革 昭和十三年四月一日勅令第九十四號(1)

昭和十四年四月一日勅令第七十一號(2)

昭和十五年四月一日勅令第四百四十二號(3)

第一條 法人ノ前事業年度ヨリ繰越シタル益金ハ其ノ事業年度ノ利益ノ計算上益金ニ之ヲ算入セズ(3)

法人ノ前事業年度ヨリ繰越シタル損金ハ臨時利得稅法第五條第三項ニ規定スルモノヲ除クノ外其ノ事業年度ノ利益ノ計算上損金ニ之ヲ算入セズ(3)

第二條 法人ノ各事業年度開始ノ日前三年以内ニ開始シタル事業年度ニ於テ生ジタル損金ニシテ其ノ損金ノ生ジタル事業年度以後ノ事業年度ノ利益ノ計算上總益金ヨリ控除セラレザリシモノノ金額ハ臨時利得稅法第五條第三項ノ規定ニ依リ各事業年度ノ利益ノ計算上損金ニ之ヲ算入ス(3)

第三條 臨時利得稅法第四條ニ規定スル現事業年度ノ資本金額ニ對シ年百分ノ十ノ割合ヲ乘ジテ

算出シタル金額ハ現事業年度ノ月數ヲ現事業年度ノ資本金額ニ乗ジ之ヲ十二分シタル金額ニ百分ノ十ヲ乗ジテ之ヲ計算ス(3)

前項ノ月數ハ曆ニ從ヒ之ヲ計算シ一月未滿ノ端數ヲ生ジタルトキハ之ヲ一月トス

前二項ノ規定ハ臨時利得税法第十四條第一項ニ規定スル現事業年度ノ資本金額ニ年百分ノ十ノ割合ヲ乗ジテ算出シタル金額、現事業年度ノ資本金額ニ平均利益率ヲ乗ジテ算出シタル金額又ハ現事業年度ノ資本金額ニ年百分ノ三十ノ割合ヲ乗ジテ算出シタル金額ノ計算ニ付之ヲ準用ス(2)(3)

第四條 削除(3)

第五條 削除(3)

第六條 臨時利得税法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有セザル法人ノ資本金額ハ總資産價額ニ對スル臨時利得税法施行地ニ於ケル資産價額ノ割合ヲ總資本金額ニ乗ジ之ヲ計算ス
前項ノ場合ニ於テ資産價額ノ割合ニ依ルヲ不適當トスルトキハ收入金又ハ利益ノ割合其ノ他適當ナル方法ニ依リ之ヲ計算ス

第七條 削除(3)

第八條 削除(3)

第九條 營業利得金額ヲ計算スル場合ニ於テ營業ヲ繼續シ又ハ營業繼續ト認ムベキ事實アルトキハ納稅義務者ノ申告ニ依リ前營業者ノ昭和十一年以前三年ノ平均利益ヲ其ノ昭和十一年以前三年ノ平均利益ト看做ス(2)(3)

前項ノ場合ニ於テ前營業者ガ法人ナルトキハ法人ノ營業ニ付臨時利得税法第十條第一項ノ規定ヲ準用シテ其ノ利益ヲ計算ス

第十條 個人ノ營業ノ期間ガ一年未滿ナル場合ニ於テハ臨時利得稅ヲ課スベキ年ノ營業ノ期間ノ月數ニ應ジ月割ヲ以テ昭和十一年以前三年ニ屬スル各年ノ利益ヲ算出シテ平均利益ヲ計算ス(3)
第三條第二項ノ規定ハ前項ノ月數ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第十一條 個人ノ利益ハ臨時利得稅ヲ課スベキ營業ニ付其ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シテ之ヲ計算ス

第十二條 臨時利得税法第十條第一項ノ規定ニ依リ總收入金額ヨリ控除スベキ經費ハ仕入品ノ原價、原料品ノ代價、場所物件ノ修繕費又ハ借入料、場所物件又ハ營業ニ係ル公課、雇人ノ給料、收入ヲ得ルニ必要ナル負債ノ利子其ノ他收入ヲ得ルニ必要ナルモノニ限ル但シ家事上ノ費用及之ニ關聯スルモノハ之ヲ控除セズ(3)

第十二條ノ二 讓渡利得ノ金額ハ臨時利得税法第十一條ノ二ノ規定ニ依ルノ外左ノ各號ノ規定ニ

依リ之ヲ計算ス(2)

一 船舶又ハ鑛業若ハ砂鑛業ニ關スル權利若ハ設備ニシテ昭和十一年十二月三十一日後ニ於テ取得シタルモノノ取得價額ハ製造又ハ創設ニ因リ取得シタルモノニ付テハ其ノ製造費又ハ創設費(鑛業又ハ砂鑛業ニ關スル權利ニ在リテハ探鑛ノ費用ヲ含ム)ニ依リ他人ヨリ讓渡ヲ受ケタルモノニ付テハ其ノ對價(取得ニ關スル必要ノ經費ヲ含ム)ニ依ル(2)

二 相續、贈與又ハ遺贈アリタル船舶又ハ鑛業若ハ砂鑛業ニ關スル權利若ハ設備ハ之ヲ被相續人、贈與者又ハ遺言者ガ取得シタル時ニ於テ相續人、受贈者又ハ受贈者ガ取得シタルモノト看做シ被相續人、贈與者又ハ遺言者ノ支出シタル設備費、改良費又ハ讓渡ニ關スル必要ノ經費ハ之ヲ相續人、受贈者又ハ受遺者ノ支出シタルモノト看做ス(2)

三 被相續人ノ爲シタル讓渡ヲ相續人ノ爲シタル讓渡ト看做ス場合ニ於ケル讓渡利得ノ金額ハ被相續人ノ爲シタル讓渡ニ付計算シタル讓渡利得ノ金額ニ依ル(2)

第十二條ノ三 昭和十四年一月一日以後ニ於テ左ニ掲グル原因ニ因ラズシテ自己ガ原始的ニ取得シタル鑛業又ハ砂鑛業ニ關スル權利ノ讓渡ニ付テハ臨時利得稅法第十三條ノ二ノ規定ニ依リ讓渡利得ニ關スル規定ヲ適用セズ(2)

一 鑛區又ハ砂鑛區ノ合併、分割又ハ分合

二 試掘權ノ設定アル鑛區ニ付テノ探掘權ノ取得

三 試掘權ノ存續期間滿了ニ因ル更新

第十三條 臨時利得稅法第十四條ノ二第一項ノ平均利益ハ昭和十一年十二月三十一日以前三年内ニ終了シタル各事業年度(既往各事業年度ト稱ス以下同ジ)ノ總數ヲ以テ其ノ各事業年度ノ利益ノ合計額ヲ除シテ之ヲ計算ス(3)

前項ノ場合ニ於テ既往各事業年度ノ期間ガ現事業年度ノ期間ト異ルトキハ既往各事業年度ノ利益ハ既往各事業年度ノ月數ノ現事業年度ノ月數ニ對スル割合ニ依リ之ヲ換算ス(3)

前項ノ月數ハ曆ニ從ヒ之ヲ計算シ一月未滿ノ端數ヲ生ジタルトキハ既往各事業年度ニ在リテハ之ヲ切捨テ現事業年度ニ在リテハ之ヲ一月トス(3)

第十三條ノ二 臨時利得稅法第十四條ノ二第一項ノ平均資本金額ハ既往各事業年度ノ總數ヲ以テ其ノ各事業年度ノ資本金額ノ合計額ヲ除シテ之ヲ計算ス(3)

第十三條ノ三 臨時利得稅法第十四條ノ二第一項ニ規定スル平均利益率ハ現事業年度ノ月數ヲ平均資本金額ニ乘シ之ヲ十二分シタル金額ヲ以テ平均利益ヲ除シテ之ヲ計算ス(3)

第三條第二項ノ規定ハ前項ノ月數ノ計算ニ付之ヲ準用ス(3)

第十三條ノ四 臨時利得稅法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ノ朝鮮、臺灣、樺太又

ハ南洋群島ニ於ケル資産又ハ營業ニ對シ各該當地ニ於ケル法令ニ依リ賦課スル特別所得稅ハ之ヲ第十四條ノ二第二項ニ規定スル第一種所得稅附加稅ニ相當スル租稅トス(3)

第十四條 臨時利得稅法第十四條ノ三第一項ノ規定ニ依リ既往事業年度ノ平均利益率ヲ計算スル場合ニ於テ現事業年度ノ資本金額中增加資本金額以外ノ部分ニ乘ズベキ既往事業年度ノ平均利益率ニ相當スル割合ハ臨時利得稅法第十四條ノ二第一項但書ノ規定ヲ適用シタル割合トス(3)

第十五條 法人合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ハ既往各事業年度ノ全部ノ平均資本金額及平均利益並ニ昭和十一年十二月三十一日ニ於ケル資本金額ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ既往各事業年度ノ資本金額及利益並ニ昭和十一年十二月三十一日ニ於ケル資本金額ヲ合算シテ之ヲ計算ス(3)

第十六條 法人ノ利得金額ハ每事業年度決算確定ノ日若ハ合併ノ日ヨリ十四日內又ハ清算著手ノ日ヨリ二十日內ニ利得算出ノ基礎ヲ明記シ之ヲ所轄稅務署ニ申告スベシ但シ法人稅法ニ依ル所得及資本ノ申告書ニ附記シテ之ヲ爲スコトヲ妨グズ(3)

第十七條 營業利得ニ付納稅義務アル者ハ營業ノ種類、營業場所在地、利得金額及利得算出ノ基礎ヲ明記シ所轄稅務署ニ申告スベシ但シ所得稅法ニ依ル所得ノ申告書ニ附記シテ之ヲ爲スコトヲ妨グズ(2)(3)

第十八條 讓渡利得ニ付納稅義務アル者ハ讓渡ノ日ヨリ二十日內ニ利得金額及利得算出ノ基礎ヲ明記シ所轄稅務署ニ申告スベシ(2)

第十九條 前項ノ申告書ニハ讓渡シタル船舶又ハ鑛業若ハ砂鑛業ニ關スル權利若ハ設備ノ明細書ヲ添付スベシ(2)

第二十條 第九條ノ規定ノ適用ヲ受ケントスル者ハ前營業者ノ營業ノ種類、營業場所在地、氏名又ハ名稱及住所又ハ居所並ニ昭和十一年以前三年ノ平均利益ヲ臨時利得稅法第十六條第一項ノ申告ト同時ニ所轄稅務署ニ申告スベシ(2)(3)

第二十一條 稅務署長臨時利得稅法第十七條、第十九條又ハ第二十七條第二項ノ規定ニ依リ利得金額ヲ決定シタルトキハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ(3)

第二十二條 臨時利得稅法第二十一條第一項ノ審査ノ請求ヲ爲サントスル者ハ事由ヲ具シ證據書類ヲ添ヘ利得金額ノ決定ヲ爲シタル稅務署長ヲ經由シ稅務監督局長ニ申出ツベシ

第二十三條 稅務監督局長臨時利得稅法第二十二條ノ規定ニ依リ利得金額ヲ決定シタルトキハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ

第二十四條 營業利得ニ對スル臨時利得稅ノ納稅義務者災害、失業其ノ他ノ理由ニ因リ著シク資力ヲ喪失シ納稅困難ト認ムルトキハ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ營業利得ニ對スル臨時利得稅

ニ付之ヲ輕減又ハ免除ス
所得税法施行規則第八十三條乃至第八十五條ノ規定ハ前項ノ規定ニ依ル臨時利得税ノ輕減又ハ免除ニ付之ヲ準用ス

第二十二條 削除(3)

第二十三條 削除(3)

第二十四條 所得税法施行規則第五十九條、第七十七條、第七十九條、第一百條乃至第一百四條ノ規定ハ臨時利得税ニ付之ヲ準用ス(3)

第二十五條 朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ住所ヲ有スル個人又ハ臨時利得税法施行地ニ住所若ハ一年以上居所ヲ有セズシテ朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ一年以上居所ヲ有スル個人ノ利得ニ付テハ左ニ掲グル場合ヲ除クノ外臨時利得税ヲ課セズ

一 臨時利得税法施行地ニ住所ヲ有スル者利得金額決定後朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ住所ヲ移轉シタルトキ

二 朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ住所ヲ有スル者朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ於ケル法令ニ依ル利得金額決定前臨時利得税法施行地ニ住所ヲ移轉シタルトキ(2)

三 臨時利得税法施行地、朝鮮、臺灣又ハ樺太ニ住所又ハ一年以上居所ヲ有スル者ノ住所又ハ

居所ニ付前二號ニ準ズベキ事由ノ生ジタルトキ

附 則

本令ハ昭和十年四月一日ヨリ之ヲ施行ス但シ法人ニ付テハ昭和十年一月一日ヲ含ム事業年度分ヨリ、個人ニ付テハ昭和十年分ヨリ之ヲ適用ス

本令施行前決算確定シ若ハ合併ヲ爲シ又ハ清算ニ著手シタル法人ノ當該事業年度分ノ利得金額ニ付テハ第十五條ノ申告ハ本令施行後十四日內又ハ二十日內ニ之ヲ爲スベシ

第十七條ノ規定中三月十六日トアルハ昭和十年ニ限り四月二十六日トス

附 則(一)

本令ハ昭和十三年法律第四十五號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス
法人ノ臨時利得税ニ付テハ昭和十三年一月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、個人ノ臨時利得税ニ付テハ昭和十三年分ヨリ本令ヲ適用ス但シ第十七條ノ二ノ規定ハ昭和十二年分臨時利得税ヨリ之ヲ適用ス

昭和十三年一月一日以後本令施行前ニ於テ決算確定シ若ハ合併ヲ爲シ又ハ清算ニ著手シタル法人ノ當該事業年度分ノ利得金額ノ申告ハ既ニ之ヲ爲シタルト否トヲ問ハズ本令施行ノ日ヨリ決算確定又ハ合併ノ場合ニ在リテハ二十四日內ニ、清算著手ノ場合ニ在リテハ二十日內ニ之ヲ爲スベシ

附 則(2)

本令ハ昭和十四年法律第四十九號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス
法人ノ臨時利得税ニ付テハ昭和十四年一月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、個人ノ甲種利得
又ハ乙種利得ニ對スル臨時利得税ニ付テハ昭和十四年分ヨリ、讓渡利得ニ對スル臨時利得税ニ付
テハ昭和十四年一月一日以後ノ讓渡ニ因ル利得ニ對スル分ヨリ本令ヲ適用ス
昭和十四年一月一日以後本令施行前ニ於テ決算確定シ若ハ合併ヲ爲シ又ハ清算ニ著手シタル法人
ノ當該事業年度分ノ利得金額ノ申告ハ既ニ之ヲ爲シタルト否トヲ問ハズ本令施行ノ日ヨリ決算確
定又ハ合併ノ場合ニ在リテハ十四日以内ニ、清算著手ノ場合ニ在リテハ二十日以内ニ之ヲ爲スベ
シ

昭和十四年一月一日以後同年三月三十一日迄ノ讓渡ニ因ル讓渡利得ニ對スル臨時利得税ニ付テハ
第十六條ノ二ノ規定ニ拘ラズ利得金額ノ申告期限ヲ昭和十四年四月二十日トス

附 則(3)

第一條 本令ハ昭和十五年法律第三十二號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第二條 法人ノ臨時利得税ニ付テハ昭和十五年四月一日以後終了スル事業年度分ヨリ、個人ノ臨
時利得税ニ付テハ昭和十五年分ヨリ本令ヲ適用ス

第三條 法人ノ現事業年度開始ノ日前三年以内ニ開始シ本令施行前ニ終了シタル事業年度ニ於テ
生ジタル損金ノ算定ニ關シテハ臨時利得税法第五條第二項ノ規定ヲ適用セズ

第四條 臨時利得税法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ノ朝鮮、臺灣、樺太又ハ南洋
群島ニ於ケル資産又ハ營業ニ對シ各當該地ニ於ケル法令ニ依リ賦課スル特別所得税ハ之ヲ昭和

十五年法律第三十二號附則第三條ニ規定スル第一種所得税附加税ニ相當スル租税トス

第五條 昭和十五年法律第三十二號附則第六條ノ規定ニ依ル昭和十五年分若ハ昭和十六年分ノ臨
時利得税ノ輕減若ハ免除又ハ昭和十五年分若ハ昭和十六年分ノ營業利得金額ノ計算ニ關スル特
例ハ左ノ各號ニ定ムル所ニ依ル

- 一 昭和十四年一月一日以後同年十二月三十一日迄ニ新ニ開業シ又ハ相續ニ因ルニ非ズシテ營
業ヲ繼續シ當該營業ノ外他ニ營業ヲ有セザル個人ニハ昭和十五年分ノ營業利得ニ對スル臨時
利得税ヲ免除ス但シ昭和十四年ノ所得調査委員會閉會後ニ於テ個人ノ乙種利得ニ付納稅義務
アルニ至リタル者ニシテ改正前ノ臨時利得税法第十七條第三項ノ規定ニ依リ個人ノ乙種利得
金額ノ決定ヲ受ケザリシモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ
- 二 昭和十四年十二月三十一日迄ニ營業ノ全部ヲ廢止シタル個人ニハ昭和十五年分ノ營業利得
ニ對スル臨時利得税ヲ免除ス

三 昭和十五年一月一日以後昭和十五年分營業利得金額決定前ニ營業ノ全部ヲ廢止シタル個人ニ付テハ昭和十五年分ノ營業利得計算ノ基礎タル利益ハ其ノ年一月一日ヨリ營業ヲ廢止スル迄ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額ニ依リ之ヲ計算ス

四 昭和十四年分營業利得金額決定後昭和十五年分營業利得金額決定前ニ於テ營業ヲ法人ニ繼續セシメタル個人ノ當該營業ノ營業利得金額ニ付テハ第二號又ハ第三號ノ規定ニ依ラズ當該營業ノ營業利得金額ニ對スル昭和十五年分ノ臨時利得稅ニ付當該營業ノ昭和十四年分ノ乙種利得ニ對スル臨時利得稅額ニ相當スル金額ヲ輕減ス

五 昭和十五年一月一日以後同年十二月三十一日迄ニ營業ノ全部ヲ廢止シタル個人ニハ昭和十六年分ノ營業利得ニ對スル臨時利得稅ヲ免除ス但シ其ノ營業ヲ法人ニ繼續セシメタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

臨時租稅措置

○臨時租稅措置法 (昭和十三年三月三十日法律第五十二號)

改正沿革 昭和十四年三月三十一日法律第五十號(一)

昭和十五年三月二十九日法律第五十四號(二)

第一條 當分ノ内本法ニ依リ所得稅、法人稅、田畑地租、營業稅、砂糖消費稅、織物消費稅、登錄稅及臨時利得稅ヲ輕減又ハ免除ス(一)

第二條ノ二 法人ノ各事業年度ノ所得中留保シタル金額ガ其ノ事業年度ニ於ケル普通所得ノ十分ノ三ニ相當スル金額ヲ超過スル場合ニ於テ其ノ超過部分ノ全部又ハ一部ニ相當スル金額ヲ命令ヲ以テ定ムル方法ニ依リ運用スルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ運用金額ニ百分ノ三・六ヲ乘ジテ算出シタル金額ニ相當スル法人稅ヲ輕減ス(二)

前項ノ各事業年度ノ所得及所得中留保シタル金額ハ其ノ事業年度ノ所得及資本ニ課セラルベキ

法人税額(前項ノ規定ニ依リ輕減スル税額ヲ控除セザル事)ニ依ルル及法人税法第十四條ノ規定ニ依リ控除スベキ臨時利得税額ヲ其ノ事業年度ノ所得及其ノ所得中留保シタル金額ノ双方ヨリ控除シタル殘額ニ依ル(2)

第二條ノ三 所得税法第五條、法人税法第十二條及營業税法第十二條ノ規定ニ依リ指定シタル物産ノ製造、採掘又ハ採取ノ事業ニ付其ノ設備ヲ増設シタル者ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ設備増設ノ年及其ノ翌年ヨリ三年間其ノ増設シタル設備ニ依ル物産ノ製造、採掘又ハ採取ノ業務ヨリ生ズル所得及純益ニ付所得税、法人税及營業税ヲ免除ス(2)

命令ヲ以テ指定スル製造方法ニ依ル物産ノ製造ヲ開始シタル者又ハ其ノ設備ヲ増設シタル者ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ製造開始又ハ設備増設ノ年及其ノ翌年ヨリ三年間其ノ製造方法ニ依ル物産ノ製造業務又ハ其ノ増設シタル設備ニ依ル物産ノ製造業務ヨリ生ズル所得及純益ニ付所得税、法人税及營業税ヲ免除ス(2)

第一條ノ四 左ニ掲グル事項ニ付テハ所得税法ニ依ル所得、法人税法ニ依ル所得、營業税法ニ依ル純益及臨時利得税法ニ依ル利益ノ計算ニ關シ命令ヲ以テ特例ヲ設クルコトヲ得(2)

一 命令ヲ以テ指定スル國庫補助金ノ收入
二 命令ヲ以テ指定スル事業ニ關シ研究ヲ爲スニ要シタル支出

三 命令ヲ以テ指定スル事業ノ用ニ供スル建物(工場用以外ノ建物ヲ除ク)、機械其ノ他ノ設備及船舶ノ價額ノ償却

第一條ノ五 法人ノ各事業年度ノ所得中ニ本邦(關東州及南洋群島ヲ含ム)外ニ於ケル營業ヨリ生ズル所得アルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ營業ヨリ生ズル所得金額ニ百分ノ四ヲ乘ジテ算出シタル金額ニ相當スル法人税ヲ輕減ス(2)

個人ノ甲種ノ事業所得中ニ本邦(關東州及南洋群島ヲ含ム)外ニ於ケル營業ヨリ生ズル所得アルトキハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ營業ヨリ生ズル所得金額ニ百分ノ二ヲ乘ジテ算出シタル金額ニ相當スル分類所得税ヲ輕減ス(2)

第一條ノ六 命令ヲ以テ指定スル礦物又ハ其ノ礦產物ヲ產出スル礦業權者ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該礦業ヨリ生ズル所得金額ニ百分ノ二ヲ乘ジテ算出シタル金額ニ相當スル分類所得税又ハ法人税ヲ輕減ス(2)

第一條ノ七 事業ノ經營ヲ主タル目的トスル同族會社ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノニ對シ法人税法第十七條ノ規定ヲ適用スル場合ニ於テハ同條第一項第一號ニ規定スル割合十分ノ三ハ之ヲ十分ノ六トシ同項第二號ニ規定スル割合十分ノ一ハ之ヲ十分ノ四トス(2)

第一條ノ八 本法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル生命保險會社ノ甲種ノ配當利子所得ニ

付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ昭和十四年十二月三十一日以前ヨリ引續キ所有スル株式ニ對スル利益又ハ利息ノ配當ニ限リ所得税法第二十一條ニ規定スル税率百分ノ十ヲ百分ノ六トシタル場合ノ差減額ニ相當スル分類所得税ヲ輕減ス(2)

第二條 個人ノ田畑自作ノ所得ガ平常所得ニ對シ二割五分以上減少シタルトキハ其ノ納付スル田畑地租ヲ輕減ス

第三條 田畑地租ノ輕減額ハ田畑自作ノ所得ガ平常所得ニ對シ減少シタル割合ニ從ヒ左ノ割合ノ金額トス

減少割合ガ二割五分以上三割五分未満ナルトキ 田畑地租額ノ二割

同三割五分以上五割未満ナルトキ 田畑地租額ノ三割

同五割以上七割未満ナルトキ 田畑地租額ノ四割

同七割以上ナルトキ 田畑地租額ノ五割

前項ノ輕減額ハ自作ノ田畑ニ對スル其ノ年分ノ地租額ニ付之ヲ計算ス

第四條 平常所得ハ昭和十一年以前三年ノ田畑自作ノ平均所得ニ依ル但シ昭和十二年一月一日ヨリ新ニ田畑自作ヲ開始シタル者ニ付テハ昭和十二年ノ所得ニ依ル
前項ニ規定スルモノヲ除クノ外平常所得ノ算定ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第五條 田畑地租ノ輕減ヲ受ケントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ旨ヲ政府ニ申請スベシ

第六條 田畑地租ノ輕減ヲ申請シタル者ノ田畑自作ノ所得ハ政府ノ調査ニ依リ其ノ年乙種ノ事業所得ノ金額ヲ決定スル時期ニ於テ政府之ヲ確定ス(2)

第七條 所得税法第十二條第一項第四號ノ規定及同條第五項中相續シタル資産ノ所得計算ニ關スル規定ハ本法ニ依ル田畑自作ノ所得ノ計算ニ付之ヲ準用ス(2)

第八條 法人又ハ個人ノ營業(個人ニ付テハ營業税法第二條ニ掲グル營業ヲ謂フ以下同シ)ノ純益ガ平常純益ニ對シ二割五分以上減少シタルトキハ其ノ納付スル營業稅ヲ輕減ス(2)

第九條 營業稅ノ輕減額ハ營業ノ純益ガ平常純益ニ對シ減少シタル割合ニ從ヒ左ノ割合ノ金額トス(2)

減少割合ガ二割五分以上三割五分未満ナルトキ 營業稅額ノ二割

同三割五分以上五割未満ナルトキ 營業稅額ノ三割

同五割以上七割未満ナルトキ 營業稅額ノ四割

同七割以上ナルトキ 營業稅額ノ五割

第十條 法人ノ平常純益ハ昭和十一年以前三年内ニ終了シタル各事業年度ノ平均純益ニ依ル但シ

第一次ノ事業年度ガ昭和十二年中ニ終了シタル法人ニ付テハ昭和十二年中ニ終了シタル各事業年度ノ平均純益ニ依ル
個人ノ平常純益ハ昭和十一年以前三年ノ平均純益ニ依ル但シ昭和十二年一月一日ヨリ新ニ營業ヲ開始シタル個人ニ付テハ昭和十二年ノ純益ニ依ル
前二項ニ規定スルモノヲ除クノ外法人又ハ個人ノ平常純益ノ算定ニ關シ必要ナル事項ハ命令ヲ以テ之ヲ定ム

第十一條 營業稅ノ輕減ヲ受ケントスル者ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ旨ヲ政府ニ申請スベシ(2)

第十二條 左ノ各號ノ一ニ該當スル場合ニ於テハ營業稅ヲ輕減セズ(2)

一 法人ノ營業ノ純益ガ年六千圓以上ナルトキ又ハ資本金額ニ對シ年百分ノ七ノ割合ヲ以テ算出シタル金額ヲ超ユルトキ

二 個人ノ營業ノ純益ガ六千圓以上ナルトキ

三 法人ノ資本金額ガ二十萬圓以上ナルトキ

第十三條 營業稅法第四條ノ規定ハ本法ニ依ル法人ノ營業ノ純益ノ計算ニ付、同法第十條ノ規定ハ本法ニ依ル個人ノ營業ノ純益ノ計算ニ付之ヲ準用ス(2)

臨時利得稅法第六條及第七條ノ規定ハ本法ニ依ル法人ノ資本金額ノ計算ニ付之ヲ準用ス(2)

第十四條乃至第二十條 (削除)

第二十一條 政府ノ承認ヲ受ケ命令ヲ以テ定ムル樽以外ノ容器ニ容レタル黑糖及白下糖ハ之ヲ砂糖消費稅法第三條第一種甲ノ砂糖ト看做ス但シ分蜜シタルモノ、黑糖及白下糖以外ノ砂糖ニ加工シテ製造シタルモノ竝ニ全部又ハ一部ノ新式機械ニ依リ製造シタルモノハ此ノ限ニ在ラズ(2)

第二十二條 人造絹絲ヲ用ヒタル織物ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノハ織物消費稅法第一條但書ノ織物ト看做ス(2)

第二十三條ノ二 耕作ヲ目的トスル土地(其ノ土地ニ附隨シテ利用セララルル土地ヲ含ム)ノ所有權ノ交換ヲ爲シタル場合ニ於テハ交換ニ因ル所有權ノ取得又ハ交換ノ爲ニスル所有權ノ保存ノ登記ニ付テハ命令ノ定ムル所ニ依リ登録稅ヲ免除ス

前項ノ規定ハ永小作權ノ交換又ハ前項ノ土地ノ所有權ト永小作權トノ交換ヲ爲シタル場合ニ之ヲ準用ス

第二十三條 本法ニ依リ輕減又ハ免除セララルル租稅ハ法令上ノ納稅資格要件ニ關シテハ輕減又ハ免除セラレザルモノト看做ス但シ第一條ノ二乃至第一條ノ八ノ規定ニ依リ輕減又ハ免除セララル

ル租税ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ(2)

第二十三條ノ二 樟太ニ於テハ本法ノ施行ニ關シ必要アルトキハ勅令ヲ以テ別段ノ定ヲ爲スコトヲ得(2)

附 則

第二十四條 本法ハ昭和十三年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第二十五條 田畑地租ニ付テハ昭和十三年分ヨリ、營業收益税中法人ノ營業收益税ニ付テハ昭和十三年一月一日以後ニ終了スル事業年度分、個人ノ營業收益税ニ付テハ昭和十三年分ヨリ本法ヲ適用ス但シ第十六條ノ規定ハ昭和十二年分營業收益税ヨリ之ヲ適用ス

第二十六條 礦産税及特別礦産税ニ付テハ昭和十三年分ヨリ本法ヲ適用ス

第二十七條 昭和十三年分ノ特別砂礦區税ニ付テハ昭和十三年四月以後ノ月割ヲ以テ其ノ税額ヲ計算シ同年五月三十一日迄ニ之ヲ納付セシム

第二十八條 左ニ掲グル織物又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

一 本法施行前消費税ヲ課スベカリシモノ

二 本法施行前輸出若ハ朝鮮移出ノ目的ヲ以テ又ハ織物消費税法第七條ノ規定ニ依リテ消費税ヲ納付セズシテ製造場又ハ保税地域ヨリ引取リタルモノ

三 本法施行前消費税ノ徵收ヲ猶豫シタルモノ

四 本法施行前消費税ヲ納付シテ輸出シ又ハ朝鮮ニ移出シタルモノ

第二十九條 本法施行前消費税ヲ納付シタル織物ニシテ本法ニ依ル消費税ヲ課セザルコトト爲リタルモノ又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ヲ本法施行後輸出シ又ハ朝鮮ニ移出スルモ織物消費税法

第三條第二項ノ規定及大正九年法律第五十一號ヲ適用セズ

第三十條 本法ハ支那事變終了後其ノ年ノ翌年十二月三十一日迄ニ之ヲ廢止スルモノトス

附 則(1)

本法ハ昭和十四年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第一種所得税、法人ノ營業收益税及法人ノ臨時利得税ニ付テハ昭和十四年四月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、第三種所得税、個人ノ營業收益税及個人ノ臨時利得税ニ付テハ昭和十四年分ヨリ本法ヲ適用ス

左ニ掲グル織物又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

一 本法施行前消費税ヲ課スベカリシモノ

二 本法施行前輸出若ハ朝鮮移出ノ目的ヲ以テ又ハ織物消費税法第七條ノ規定ニ依リテ消費税ヲ納付セズシテ製造場又ハ保税地域ヨリ引取リタルモノ

三 本法施行前消費税ノ徴收ヲ猶豫シタルモノ
 四 本法施行前消費税ヲ納付シテ輸出シ又ハ朝鮮ニ移出シタルモノ
 本法施行前消費税ヲ納付シタル織物ニシテ第二十一條又ハ第二十二條ノ改正規定ニ依リ消費税ヲ課セザルコトト爲リタルモノ又ハ之ヲ以テ製造シタル物品ヲ本法施行後輸出シ又ハ朝鮮ニ移出スルモノ織物消費税法第三條第二項ノ規定及大正九年法律第五十一號ヲ適用セズ

附 則(2)

本法ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

法人税及法人ノ營業税ニ付テハ昭和十五年四月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、個人ノ所得税及營業税ニ付テハ昭和十五年分ヨリ本法ヲ適用ス但シ第一條ノ六ノ規定中分類所得税ニ關スルモノハ昭和十六年分ヨリ之ヲ適用ス

昭和十五年三月三十一日以前ニ産出シタル鑛産物ニ對スル鑛産税及特別鑛産税ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

前項ノ規定ニ依リ昭和十五年一月一日以後同年三月三十一日以前ニ産出シタル鑛物又ハ鑛産物ニ付改正前ノ第十九條ノ規定ヲ適用スル場合ニ於テハ昭和十二年中ニ於ケル鑛物又ハ鑛産物ノ産出數量ノ十二分ノ三ニ相當スル數量ヲ以テ同條ニ規定スル昭和十二年中ニ於ケル産出數量ト看做

ス

昭和十四年分以前ノ田畑地租、昭和十四年分以前ノ個人ノ營業收益税及昭和十五年分以前ノ特別砂鑛區税ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

○臨時租税措置法施行規則 (昭和十三年四月一日大藏省令第二十一號)

改正沿革 昭和十四年四月一日大藏省令第十三號(1)

昭和十五年四月一日大藏省令第十九號(2)

第一條 法人ガ超過留保金額ノ全部又ハ一部ヲ別表ニ掲グル事業ノ用ニ供スル設備(船舶ヲ含ム)ノ新設、擴張又ハ改良ヲ爲スニ要スル資金ニ充テ又ハ國債證券、興業債券(臨時資金調整法第六條第四項ノ規定ニ依リ元本ノ償還及利息ノ支拂ニ付政府ノ保證アルモノニ限ル)其ノ他大藏大臣ノ指定シタル有價證券ヲ取得スルニ要スル資金ニ充テタルトキハ臨時租税措置法第一條ノ二ノ規定ニ依リ法人税ヲ輕減ス

本令ニ於テ超過留保金額トハ臨時租税措置法第一條ノ二第二項ノ規定ニ依ル法人ノ各事業年度

ノ所得中留保シタル金額ガ其ノ事業年度ノ所得ノ十分ノ三ニ相當スル金額ヲ超過スル場合ニ於ケル其ノ超過部分ノ金額ヲ謂フ(2)

第一條ノ二 法人ガ各事業年度ノ超過留保金額ノ全部又ハ一部ヲ前條ニ定ムル設備ノ新設、擴張又ハ改良ヲ爲スニ要スル資金ニ充テントスルトキハ當該事業年度ノ利益金ノ處分ニ當リ其ノ金額ヲ確定シ之ヲ「設備擴張留保金」勘定(貸方勘定)ニ繰入ルベシ(1)

第一條ノ三 法人ガ各事業年度ノ超過留保金額ノ全部又ハ一部ヲ第一條ニ定ムル有價證券ノ取得ニ要スル資金ニ充テントスルトキハ當該事業年度ノ利益金ノ處分ニ當リ其ノ金額ヲ確定シ之ヲ「證券保有留保金」勘定(貸方勘定)ニ繰入ルベシ(1)

前項ノ「證券保有留保金」勘定ニ繰入レタル金額ヲ以テ第一條ニ規定スル有價證券ヲ取得シタルトキハ「指定證券運用」勘定(借方勘定)ヲ設ケ他ノ財産ト分別シテ之ヲ計理スベシ(1)

第一條ノ四 「設備擴張留保金」勘定又ハ「證券保有留保金」勘定ニ繰入レタル金額ハ左ノ期間内ニ各所定ノ運用ノ爲ニ支出スルコトヲ要ス(1)

一「設備擴張留保金」勘定繰入金額ニ付テハ其ノ繰入レタル利益金ノ屬スル事業年度終了ノ日ヨリ二年

二「證券保有留保金」勘定繰入金額ニ付テハ其ノ繰入レタル利益金ノ屬スル事業年度終了ノ日

ヨリ六月

第一條ノ五 法人ガ前條ニ定ムル期間内ニ於テ「設備擴張留保金」勘定ニ繰入レタル金額ヲ「證券保有留保金」勘定ニ振替ヘ又ハ「證券保有留保金」勘定ニ繰入レタル金額ヲ「設備擴張留保金」勘定ニ振替ヘ其ノ運用ノ方法ヲ變更セントスルトキハ稅務署長ノ承認ヲ受クベシ此ノ場合ニ於テハ振替ヘタル金額ヲ直ニ變更後ノ運用ノ爲ニ支出スルコトヲ要ス(1)

法人ガ「指定證券運用」勘定ヲ以テ分別計理シタル有價證券ヲ處分シ設備ノ新設、擴張又ハ改良ノ爲ノ支出ニ充テントスルトキハ稅務署長ノ承認ヲ受クベシ(1)

第一條ノ六 「設備擴張留保金」勘定又ハ「證券保有留保金」勘定ニ繰入レタル金額ニシテ第一條ノ四ニ定ムル期間内ニ各所定ノ運用ノ爲ニ支出セザリシモノアルトキハ繰入金額ニ付輕減セラレタル法人稅額中運用ノ爲ニ支出セザリシ金額ニ對スル輕減稅額ニ相當スル金額ヲ追徵ス前條第一項ノ場合ニ於テ直ニ變更後ノ運用ノ爲ニ支出セザリシ金額アルトキ亦同ジ(1)(2)

「證券保有留保金」勘定ニ繰入レタル金額ヲ以テ取得シタル有價證券ヲ處分シタルトキ又ハ有價證券ニ付元本ノ償還アリタル後直ニ之ニ代ルベキ有價證券ヲ取得セザリシトキハ繰入金額ニ付輕減セラレタル法人稅額中當該有價證券ノ取得ニ要シタル金額ニ對スル輕減稅額ニ相當スル金額ヲ追徵ス但シ其ノ處分ニ付稅務署長ノ承認ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラズ(1)(2)

前二項ノ追徴稅額ハ第一條ノ四ニ定ムル期間滿了ノ日又ハ有價證券ヲ處分シ若ハ有價證券ニ付元本ノ償還アリタル日ノ屬スル事業年度分ノ法人稅ヲ徵收スル際之ヲ徵收ス(1.2)

第一條ノ七 法人稅ヲ課スベキ所得ト其ノ他ノ所得トヲ有スル法人ノ超過留保金額ハ其ノ留保金額中所得總額ノ十分ノ三ニ相當スル金額ヲ超過スル金額ニ所得總額ニ對スル法人稅ヲ課スベキ所得ノ割合ヲ乘ジ之ヲ計算ス(1.2)

第一條ノ八 臨時租稅措置法第一條ノ二ノ規定ニ依リ法人稅ノ輕減ヲ受ケントスル法人ハ「設備擴張留保金」勘定又ハ「證券保有留保金」勘定ニ繰入レタル金額及其ノ運用豫定計畫ヲ記載シタル書類ヲ添附シ法人稅法第十八條ノ申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ(1)

第一條ノ九 臨時租稅措置法第一條ノ二ノ規定ニ依リ法人稅ノ輕減ヲ受ケタル法人ハ「設備擴張留保金」勘定又ハ「證券保有留保金」勘定ニ繰入レタル金額ニ付每事業年度其ノ運用明細書ヲ法人稅法第十八條ノ申告ト同時ニ所轄稅務署ニ提出スベシ(2)

第一條ノ十 臨時租稅措置法第一條ノ三ノ規定ニ依リ所得稅、法人稅及營業稅ノ免除ヲ受クベキ製造、採掘又ハ採取ノ事業ノ設備ノ増設ハ製造事業ニ在リテハ昭和十四年四月一日以後爲シタル設備ノ増設、採取又ハ採取ノ事業ニ在リテハ昭和十五年四月一日以後爲シタル設備ノ増設ニシテ増設前ノ製造又ハ產出能力ニ對シ十分ノ三以上ニ相當スル製造又ハ產出能力ヲ増加シタル

モノニ限ル(1.2)

前項ノ規定ニ該當スル設備ノ増設ヲ爲シタル製造、採掘又ハ採取ノ事業ヲ繼續シ又ハ其ノ繼續ト認ムベキ事實アル者ハ其ノ製造、採掘又ハ採取ノ事業ノ設備ノ増設ニ付所得稅、法人稅及營業稅ノ免除期間ノ殘存スルトキニ限り其ノ免除期間ヲ繼承ス(1.2)

第一條ノ十一 臨時租稅措置法第一條ノ三ノ規定ニ依リ所得稅、法人稅及營業稅ノ免除ヲ受ケントスル者ハ所得稅法第三十四條若ハ法人稅法第十八條又ハ營業稅法第十五條若ハ第十六條ノ申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ(1.2)

前項ノ場合ニ於テ増設シタル設備ニ依ル製造、採掘又ハ採取ノ事業ヨリ生ズル所得又ハ純益ト其ノ他ノ所得又ハ純益トヲ有スルトキハ其ノ増設シタル設備ニ依ル製造、採掘又ハ採取ノ事業ヨリ生ズル所得又ハ純益ト其ノ他ノ所得又ハ純益トヲ區別シタル計算書ヲ添附スベシ(1.2)

第一條ノ十二 大藏大臣ノ指定スル國庫補助金ノ收入ハ所得稅法ニ依ル所得、法人稅法ニ依ル所得、營業稅法ニ依ル純益及臨時利得稅法ニ依ル利益ノ計算上大藏大臣ノ定ムル割合ニ依リ其ノ全部又ハ一部ヲ益金又ハ收入金額ニ算入セズ(1.2)

前項ノ國庫補助金ノ種類及割合ハ大藏大臣之ヲ告示ス(1)
第一條ノ十三 別表ニ掲グル事業ニ關シ研究ヲ爲スニ要シタル支出金額(土地ニ關スル支出金額

ヲ除ク)ニシテ昭和十四年四月一日以後支出シタルモノハ資本的支出ニ屬スル場合ニ於テモ所得税法ニ依ル所得、法人税法ニ依ル所得、營業税法ニ依ル純益及臨時利得税法ニ依ル利益ノ計算上之ヲ損金又ハ必要經費ニ算入ス(1・2)

前項ノ場合ニ於テ法人ガ其ノ支出金額ヲ資産トシテ計算シタルトキハ法人ニ對スル法人税、營業税及臨時利得税ノ課税ニ關シテハ之ヲ資産トシテ計算セザリシモノト看做ス(2)

第一項ノ規定ノ適用ヲ受ケントスル者ハ豫メ研究ノ目的及研究ヲ爲スニ要スル支出ノ詳細ヲ記載シタル書類ヲ所轄稅務署ニ提出スベシ(1)

第一條ノ十四 第一條ノ十二又ハ前條ノ規定ノ適用ヲ受ケントスル者ハ所得税法第三十四條若ハ法人税法第十八條、營業税法第十五條若ハ第十六條又ハ臨時利得税法第十五條若ハ第十六條第一項ノ申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ(1・2)

第一條ノ十五 別表ニ掲グル事業ノ用ニ供スル建物(工場用以外ノ建物ヲ除ク)、機械其ノ他ノ設備及船舶ニシテ昭和十四年四月一日以後新設、増設又ハ製造シタルモノニ付新設、増設又ハ製造後三年間左ノ各號ノ金額ノ合計額以内ノ價格ノ償却ヲ爲シタル場合ニ於テハ其ノ償却金額ハ所得税法ニ依ル所得、法人税法ニ依ル所得、營業税法ニ依ル純益及臨時利得税法ニ依ル利益ノ計算上之ヲ損金又ハ必要經費ニ算入ス(1・2)

一 取得價額ノ三分ノ一ニ相當スル金額ニ付堪久年數ヲ三年トシテ均等償却ノ方法ニ依リ算出シタル償却金額

二 取得價額ノ三分ノ二ニ相當スル金額ニ付堪久年數ニ依リ算出シタル償却金額

第一條ノ十六 臨時租稅措置法第一條ノ五第一項ノ規定ニ依ル輕減稅額算出ノ基礎タル法人ノ本邦(關東州及南洋群島ヲ含ム以下同ジ)外ニ於ケル營業ヨリ生ズル所得金額ニハ法人税法其ノ他ノ法律ニ依リ法人税ヲ課セラレザルモノノ金額ハ之ヲ算入セズ(2)

第一條ノ十七 臨時租稅措置法第一條ノ五第二項ノ規定ニ依ル輕減稅額算出ノ基礎タル個人ノ本邦外ニ於ケル營業ヨリ生ズル所得金額ハ其ノ者ノ所得税法第十七條又ハ第十八條ノ規定ニ依ル控除前ノ甲種ノ事業所得金額ニ對スル同控除後ノ甲種ノ事業所得金額ノ割合ヲ其ノ者ノ本邦外ニ於ケル營業ヨリ生ズル所得金額ニ乘ジ之ヲ計算ス(2)

前項ノ本邦ニ於ケル營業ヨリ生ズル所得金額ニハ所得税法其ノ他ノ法律ニ依リ所得税ヲ課セラレザルモノノ金額ハ之ヲ算入セズ(2)

第一條ノ十八 臨時租稅措置法第一條ノ五ノ規定ニ依リ法人税又ハ分類所得税ノ輕減ヲ受ケントスル者ハ法人税法第十八條又ハ所得税法第三十四條ノ規定ニ依リ申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ(2)

第一條ノ十九 臨時租稅措置法第一條ノ六ノ規定ニ依リ左ノ鑛物ヲ指定ス(2)

- 一 金鑛、銀鑛、銅鑛、鉛鑛、錫鑛、亞鉛鑛、鐵鑛、硫化鐵鑛、滿俺鑛、ニッケル鑛、水銀鑛及クロム鐵鑛
- 二 石油及石炭

第一條ノ二十 第一條ノ十六及第一條ノ十七ノ規定ハ臨時租稅措置法第一條ノ六ノ規定ニ依ル輕減稅額算出ノ基礎タル鑛業ヨリ生ズル所得金額ノ計算ニ付之ヲ準用ス(2)

第一條ノ二十一 臨時租稅措置法第一條ノ六ノ規定ニ依リ分類所得稅又ハ法人稅ノ輕減ヲ受ケントスル者ハ所得稅法第三十四條又ハ法人稅法第十八條ノ規定ニ依ル申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ(2)

第一條ノ二十二 事業ノ經營ヲ主タル目的トスル同族會社ニシテ臨時租稅措置法第一條ノ七ノ規定ノ適用ヲ受クベキモノヲ定ムルコト左ノ如シ(2)

- 一 事業ノ經營ニ直接關係ナキ資産(保全資産ト稱ス以下同ジ)ノ價額ガ其ノ總資産價額ノ百分ノ三十以下ナル同族會社
- 二 保全資産ノ價額ガ其ノ總資産價額ノ百分ノ三十ヲ超エ同百分ノ四十以下ニシテ事業ヨリ生ズル所得(事業所得ト稱ス以下同ジ)ノ金額ガ總所得金額ノ百分ノ五十ヲ超ユル同族會社

三 保全資産ノ價額ガ其ノ總資産價額ノ百分ノ四十ヲ超エ同百分ノ五十以下ニシテ事業所得ノ金額ガ其ノ總所得ノ百分ノ七十ヲ超ユル同族會社

第一條ノ二十三 生命保險會社ノ所有スル株式ヨリ生ズル甲種ノ配當利子所得ニシテ臨時租稅措置法第一條ノ八ノ規定ニ依リ分類所得稅ヲ輕減スベキモノハ同法ノ規定ニ該當スルモノナルコトヲ證スル主務官廳ノ證明書ヲ當該配當利子所得ノ支拂確定前所轄稅務署長ヲ經由シ其ノ支拂者ニ届出タルモノニ限ル(2)

第一條ノ二十四 田畑自作ノ期間一年未滿ニシテ其ノ所得ガ一年分ノ所得ニ非ズト認メラル場合ニ於テハ田畑地租ノ輕減ヲ受クベキ年ニ於ケル自作ノ時期ト同一ノ時期ニ付昭和十一年以前三年又ハ昭和十二年ニ於テ自作ヲ爲シタルモノトシテ其ノ所得ヲ見積リ算出シ平常所得ヲ計算ス(1)

第二條 田畑地租ノ輕減ヲ受ケントスル者ハ毎年三月十五日迄ニ土地所在ノ市町村(市制第六條又ハ第八十二條第三項ノ市ニ在リテハ區、以下同ジ)ヲ經由シ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ前項ノ申請書ニハ土地ノ所在、番地、地目、地積及賃賃價格ヲ記載シ田畑自作ノ所得及平常所得ノ計算書ヲ添附スベシ但シ申請者ガ自己ノ田畑ノ全部ニ付申請ヲ爲ス場合ニ於テハ地目毎地積又賃賃價格ノ合計額ヲ記載シ各筆ノ記載ヲ省略スルコトヲ得

第一項ノ申請ヲ爲シタル後自作ヲ爲スニ至リタル田畑ニ付テハ其ノ際前二項ニ準ジ其ノ地租ノ輕減ノ申請ヲ爲スコトヲ得

第三條 稅務署長ハ前條第一項ノ申請ヲ爲シタル者ノ田畑自作ノ所得ヲ調査シ其ノ年乙種ノ事業所得ノ金額ヲ決定スル時期ニ於テ之ヲ確定スベシ

第四條 第二條第一項ノ申請アリタル場合ニ於テ稅務署長其ノ年ノ田畑自作ノ所得ガ平常所得ニ對シ二割五分以上減少セズト認メタルトキハ之ヲ却下スベシ

第五條 稅務署長田畑地租ノ輕減ノ決定ヲ爲シタルトキハ之ヲ納稅義務者及土地所在ノ市町村ニ通知スベシ

第六條 稅務署長第二條ノ申請ヲ受理シタル場合ニ於テ申請者ノ住所地ガ其ノ管轄區域内ニ在ラザルトキハ申請者ノ住所地ヲ管轄スル稅務署長ニ協議シ之ガ處分ヲ爲スベシ

第七條 市町村ハ田畑地租ノ輕減額ヲ地租法第七十四條ノ例ニ準ジ稅務署長ニ報告スベシ

第八條 法人ノ平常純益ハ昭和十一年以前三年内ニ終了シタル事業年度ノ總數ヲ以テ其ノ各事業年度ノ純益ノ合計額ヲ除シテ之ヲ計算ス但シ第一次ノ事業年度ガ昭和十二年中ニ終了シタル法人ニ付テハ昭和十二年中ニ終了シタル事業年度ノ總數ヲ以テ其ノ各事業年度ノ純益ノ合計額ヲ除シテ之ヲ計算ス

第九條 法人ノ平常純益ヲ計算スルニ當リ營業稅ノ輕減ヲ受クベキ事業年度ノ期間ガ昭和十年以前三年内又ハ昭和十二年中ニ終了シタル各事業年度ノ期間ト異ル場合ニ於テハ昭和十一年以前三年内又ハ昭和十二年中ニ終了シタル各事業年度ノ純益ハ營業稅ノ輕減ヲ受クベキ事業年度ノ月數ニ應ジ月割ヲ以テ之ヲ換算ス

前項ノ月數ハ曆ニ從ヒ之ヲ計算シ一月未滿ノ端數ヲ生ジタルトキハ昭和十一年以前三年内又ハ昭和十二年中ニ終了シタル各事業年度ニ在リテハ之ヲ切捨テ營業稅ノ輕減ヲ受クベキ事業年度ニ在リテハ之ヲ一月トス

第十條 法人合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存續スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ノ平常純益ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ純益ヲ合算シテ之ヲ計算ス

第十一條 個人ノ營業ノ期間ガ一年未滿ナル場合ニ於テハ營業稅ノ輕減ヲ受クベキ年ノ營業ノ期間ノ月數ニ應ジ月割ヲ以テ昭和十一年以前三年又ハ昭和十二年ノ純益ヲ算出シテ平常純益ヲ計算ス

第九條第二項ノ規定ハ前項ノ月數ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第十二條 營業稅ノ輕減ヲ受ケントスル者ハ營業稅法ニ依ル純益金額ノ申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ

前項ノ申請書ニハ平常純益ノ計算書ヲ添附スベシ

第十三條 前條ノ申請アリタル場合ニ於テ稅務署長其ノ營業ノ純益ガ平常純益ニ對シ二割五分以上減少セズト認メタルトキハ之ヲ却下スベシ

第十四條 稅務署長營業稅ノ輕減ノ決定ヲ爲シタルトキハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ

前項ノ通知ハ營業稅法ニ依ル純益金額ノ決定通知書ニ附記シテ之ヲ爲スコトヲ妨ゲズ

第十五條 臨時租稅措置法第十二條第一號ノ年六千圓ノ金額ハ事業年度ノ月數ヲ六千圓ニ乘ジ之ヲ十二分シタル金額ニ依ル

前項ノ月數ハ曆ニ從ヒ之ヲ計算シ一月未滿ノ端數ヲ生ジタルトキハ之ヲ一月トス

第十六條 臨時租稅措置法第十二條第一號ノ年百分ノ七ノ割合ノ金額ハ事業年度ノ月數ヲ資本金額ニ乘ジ之ヲ十二分シタル金額ニ百分ノ七ヲ乘ジテ之ヲ計算ス

前條第二項ノ規定ハ前項ノ月數ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第十七條乃至第二十條 削除(2)

第二十一條 臨時租稅措置法第二十一條ノ規定ニ依リ稅務署長ノ承認ヲ受ケ繼、箱其ノ他類似ノ

容器ニ容レタル黒糖及白下糖ハ之ヲ砂糖消費稅法第三條第一種甲ノ砂糖ト看做ス(2)

第二十二條 臨時租稅措置法第二十二條ノ規定ニ依リ左ニ掲グル絲ト人造絹絲トヲ以テ組成シ其

ノ人造絹絲ノ重量ガ全重量百分中五十ヲ超エザル織物ハ之ヲ織物消費稅法第一條但書ノ織物ト看做ス(2)

一 絹絲

二 全重量百分中五十ヲ超ユル綿トステールフアイバートノ混紡絲(2)

第二十三條 臨時租稅措置法第二十二條ノ規定ニ依リ織物消費稅ヲ課セザルコトト爲リタル織物

ヲ製造セントスル者ハ織物消費稅法施行規則第二條ノ規定ニ依ル申告ノ際同條但書ニ規定スル

事項ノ外第二十二條第二號ニ規定スル混紡絲ニ付其ノ原料及重量割合ヲ併セ申告スベシ(2)

第二十四條 耕作ヲ目的トスル土地(其ノ土地ニ附隨シテ利用セラルル土地ヲ含ム)ノ所有權ノ交

換ヲ爲シタル場合ニ於ケル交換ニ因ル所有權ノ取得又ハ交換ノ爲ニスル所有權ノ保存ノ登記ニ

關シテ交換ガ左ニ掲グル條件ヲ具備スルコトニ付地方長官ノ證明アルモノニハ臨時租稅措置法第

二十二條ノ二ノ規定ニ依リ登録稅ヲ免除ス

一 交換ガ農地委員會又ハ國、北海道若ハ府縣ノ補助金ノ交付ヲ受ケテ設置セラレタル市町村ノ經濟更生委員會ノ斡旋ニ基クモノナルコト

二 交換地ノ雙方又ハ一方ガ自作地ナルコト

三 交換地ノ價額ノ差ガ價額ノ多額ナル一方ノ十分ノ三以内ナルコト

前項ノ規定ハ永小作權ノ交換又ハ前項ノ土地ノ所有權ト永小作權トノ交換ヲ爲シタル場合ニ付之ヲ準用ス

附 則

本令ハ臨時租稅措置法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス
第二條ノ規定中三月十五日トアルハ昭和十三年ニ限り四月三十日トス

昭和十三年一月一日以後本令施行前ニ於テ決算確定シ若ハ合併ヲ爲シ又ハ清算ニ著手シタル法人ノ當該事業年度分營業收益稅ニ對スル第十二條ノ申請ハ本令施行ノ日ヨリ決算確定又ハ合併ノ場合ニ在リテハ十四日內ニ、清算著手ノ場合ニ在リテハ二十日內ニ之ヲ爲スベシ

個人ノ昭和十三年分營業收益稅ニ對スル第十二條ノ申請ハ昭和十三年四月十五日迄ニ之ヲ爲スベシ
本令施行前ヨリ引續キ臨時租稅措置法第二十一條又ハ第二十二條ノ規定ニ依リ新ニ織物消費稅ヲ課セザルコトト爲リタル織物ヲ製造スル者ハ本令施行後一月內ニ第二十三條ニ規定スル事項ヲ所轄稅務署ニ申告スベシ

附 則(一)

本令ハ昭和十四年法律第五十號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第一種所得稅、法人ノ營業收益稅及法人ノ臨時利得稅ニ付テハ昭和十四年四月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、第三種所得稅、個人ノ營業收益稅及個人ノ臨時利得稅ニ付テハ昭和十四年分ヨリ本令ヲ適用ス

第二十條ノ改正規定ハ昭和十四年分礦產稅ヨリ之ヲ適用ス

本令施行前ヨリ引續キ臨時租稅措置法第二十一條ノ改正規定ニ依リ新ニ織物消費稅ヲ課セザルコトト爲リタル織物ヲ製造スル者ハ本令施行後一月以內ニ第二十三條ノ改正規定ニ規定スル事項ヲ所轄稅務署ニ申告スベシ

附 則(二)

本令ハ昭和十五年法律第五十四號施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

法人稅及法人ノ營業稅ニ付テハ昭和十五年四月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、個人ノ所得稅及營業稅ニ付テハ昭和十五年分ヨリ本令ヲ適用ス但シ第一條ノ二十及二十一ノ規定中分類所得稅ニ關スルモノハ昭和十六年分ヨリ之ヲ適用ス

昭和十五年三月三十一日以前ニ產出シタル礦產物ニ對スル礦產稅及特別礦產稅ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

昭和十四年分以前ノ田畑地租、昭和十四年分以前ノ個人ノ營業收益稅及昭和十五年分以前ノ特別

砂鐵區稅ニ付テハ仍從前ノ例ニ依ル

別表 第三十三号 第三十一号 第三十二号 第三十三号 第三十四号 第三十五号 第三十六号 第三十七号 第三十八号 第三十九号 第四十号 第四十一号 第四十二号 第四十三号 第四十四号 第四十五号 第四十六号 第四十七号 第四十八号 第四十九号 第五十号 第五十一号 第五十二号 第五十三号 第五十四号 第五十五号 第五十六号 第五十七号 第五十八号 第五十九号 第六十号 第六十一号 第六十二号 第六十三号 第六十四号 第六十五号 第六十六号 第六十七号 第六十八号 第六十九号 第七十号 第七十一号 第七十二号 第七十三号 第七十四号 第七十五号 第七十六号 第七十七号 第七十八号 第七十九号 第八十号 第八十一号 第八十二号 第八十三号 第八十四号 第八十五号 第八十六号 第八十七号 第八十八号 第八十九号 第九十号 第九十一号 第九十二号 第九十三号 第九十四号 第九十五号 第九十六号 第九十七号 第九十八号 第九十九号 第一百号

第一 金屬鑛業

第二 石炭鑛業

第三 石油鑛業

第四 製鐵業

第五 非鐵金屬製鍊業

第六 輕金屬製造業

第七 鋼船製造業

第八 蒸汽機製造業

第九 原動機製造業

第十 電氣機械器具製造業但シ家庭用電氣器具製造業ヲ除ク

第十一 採鑛、選鑛及製鍊機械器具製造業

第十二 金屬工機械製造業

第十三 工具及刀具類製造業

第十四 化學工業用機械裝置製造業

第十五 自動車及同部分品製造業但シ小型自動車及同部分品製造業ヲ除ク

第十六 鐵道用及軌道用車輛製造業

第十七 航空機及同部分品製造業

第十八 軸受及鋼球製造業

第十九 兵器及同部分品製造業

第二十 硫酸製造業但シ乾式製鍊所ヨリ排棄セラルル鑛煙中ノ亞硫酸瓦斯ヲ回收シテ製造スルモノニ限ル

第二十一 石炭酸製造業

第二十二 コールタール分溜物製造業

第二十三 代用燃料製造業

第二十四 硝酸製造業

第二十五 染料中間物其ノ他コールタール分溜物誘導體製造業

第二十六 バルブ製造業

- 二十七 硫酸アンモニア製造業
- 二十八 石油精製業
- 二十九 人造石油製造業
- 三十 海運業

○臨時租稅措置法施行規則ノ規定ニ依リ國庫補助金ノ

種類及割合指定ノ件 (昭和十四年七月三日大藏省告示第二百三號)

臨時租稅措置法施行規則第一條ノ十二ノ規定ニ依リ國庫補助金ノ種類及割合ヲ左ノ通指定ス
昭和十四年度一般會計歳出豫算ニ掲上セラレタル左ノ費途ニ屬スル國庫補助金ノ收入金額ノ全部

- 選礦場及製鍊場建設獎勵金
- 金鑛山送配電助成金
- 瓦斯發生爐設置及普及施設費補助
- 木炭瓦斯發生機普及獎勵金
- 定置式薪炭瓦斯發生裝置助成金

船舶建造助成金

昭和十四年度一般會計歳出豫算ニ掲上セラレタル左ノ費途ニ屬スル國庫補助金ノ收入金額ノ百分ノ五十

- 探鑛獎勵金
- 石油試掘助成金
- 北樺太石油資源開發助成金
- 代用品製造試驗費補助

營業稅

○營業稅法 (昭和十五年三月三十一日法律第三十三號)

- 第一條 本法施行地ニ本店、支店其ノ他ノ營業場ヲ有スル營利法人ニハ本法ニ依リ營業稅ヲ課ス
- 第二條 本法施行地ニ營業場ヲ有シ左ニ掲グル營業ヲ爲ス個人ニハ本法ニ依リ營業稅ヲ課ス
- 一 物品販賣業(動植物其ノ他普通ニ物品ト稱セザルモノノ販賣ヲ含ム)
 - 二 金錢貸付業
 - 三 物品貸付業(動植物其ノ他普通ニ物品ト稱セザルモノノ貸付ヲ含ム)
 - 四 製造業(瓦斯電氣ノ供給、物品ノ加工修理ヲ含ム)
 - 五 運送業(運送取扱ヲ含ム)
 - 六 倉庫業
 - 七 請負業
 - 八 印刷業

- 九 出版業
 - 十 寫真業
 - 十一 席貨業
 - 十二 旅人宿業 (運送を含む)
 - 十三 料理店業 (飲食店、酒場、喫茶店、工務店を含む)
 - 十四 周旋業 (通譯、通商、通商、通商を含む)
 - 十五 代理業
 - 十六 仲立業 (通譯、通商、通商、通商を含む)
 - 十七 問屋業 (通譯、通商、通商、通商を含む)
 - 十八 鑛業 (通譯、通商、通商、通商を含む)
 - 十九 砂鑛業
 - 二十 湯屋業 (昭和十五年十二月三十一日法律第三十三號)
 - 二十一 理髮美容業
 - 二十二 其ノ他命令ヲ以テ定ムル營業
- 第三條 營業稅ハ左ノ純益ニ付之ヲ賦課ス

- 一 法人
 - 各事業年度ノ純益
 - 清算純益
 - 二 個人
 - 前條ニ掲グル營業ノ純益
- 第四條 法人ノ各事業年度ノ純益ハ各事業年度ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シタル金額ニ依ル
- 法人ガ各事業年度ニ於テ納付シタル又ハ納付スベキ法人稅及臨時利得稅並ニ當該事業年度ニ於テ納付シタル分類所得稅ニシテ法人稅法第十六條ノ規定ニ依リ其ノ額ヲ法人稅額ヨリ控除スベキモノハ前項ノ純益ノ計算上之ヲ損金ニ算入セズ
- 法人ノ各事業年度開始ノ日前三年以内ニ開始シタル事業年度ニ於テ生ジタル損金ニシテ命令ヲ以テ定ムルモノハ第一項ノ純益ノ計算上之ヲ損金ニ算入ス
- 第五條 法人ガ事業年度中ニ解散シ又ハ合併ニ因リテ消滅シタル場合ニ於テハ其ノ事業年度ノ始ヨリ解散又ハ合併ニ至ル迄ノ期間ヲ以テ一事業年度ト看做ス
- 第六條 所得稅法第六條及第七條ノ規定ハ營業稅ノ賦課ニ付之ヲ準用ス
- 信託會社ノ各事業年度ノ純益ノ計算ニ付テハ合同運用信託ニ因ル收入及支出ハ其ノ總益金及總

損金ヨリ各之ヲ控除ス

第七條 法人解散シタル場合ニ於テ其ノ残余財産ノ價格ガ解散當時ノ拂込株式金額又ハ出資金額及積立金額ノ合計金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ヲ以テ法人ノ清算純益トス

法人合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ株主又ハ社員ガ合併後存続スル法人若ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ヨリ合併ニ因リテ取得スル株式ノ拂込済金額又ハ出資金額及金銭ノ總額ガ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ合併當時ノ拂込株式金額又ハ出資金額及積立金額ノ合計金額ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ハ之ヲ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ清算純益ト看做ス

法人ノ清算期間中ニ生ジ又ハ合併ニ因リ生ジタル純益ニシテ本法其ノ他ノ法律ニ依リ營業稅ヲ課セラレザルモノノ金額ハ清算純益金額ヨリ之ヲ控除ス
第一項又ハ第二項ニ於テ積立金額トハ積立金其ノ他名義ノ何タルヲ問ハズ法人ノ各事業年度ノ純益中其ノ留保シタル金額ヲ謂フ

法人稅及臨時利得稅トシテ納付スベキ金額ハ前項ノ留保シタル金額ニハ之ヲ算入セズ

第八條 合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ハ合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ純益ニ付營業稅ヲ納ムル義務アルモノトス

第九條 法人ノ各事業年度分ノ臨時利得稅額ハ當該事業年度ノ純益金額ヨリ之ヲ控除ス

營業稅ヲ課スベキ純益ト其ノ他ノ純益トヲ有スル法人ノ純益金額ヨリ控除スベキ臨時利得稅額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ之ヲ計算ス

第十條 個人ノ純益ハ前年中ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費（收入ヲ得ルニ必要ナル負債ノ利子ヲ含ム以下同ジ）ヲ控除シタル金額ニ依ル

所得稅及臨時利得稅ハ前項ノ必要ノ經費ニ之ヲ算入セズ
營業利得ニ對スル臨時利得稅額ハ當該臨時利得稅ヲ課セラルベキ年分ノ純益金額ヨリ之ヲ控除ス

前條第二項ノ規定ハ營業稅ヲ課スベキ純益ト其ノ他ノ純益トヲ有スル個人ノ純益金額ヨリ前項ノ規定ニ依リ控除スベキ臨時利得稅額ノ計算ニ付之ヲ準用ス

相續シタル營業ニ付テハ相續人ガ引續キ之ヲ爲シタルモノト看做シテ其ノ純益ヲ計算ス

第十一條 左ニ掲グル營業ノ純益ニハ營業稅ヲ課セズ
一 政府ノ發行スル印紙切手類ノ賣捌

二 度量衡ノ製作、修覆又ハ販賣
三 新聞紙法ニ依ル出版

四 本法施行地外ニ在ル營業場ニ於テ爲ス營業

五 個人ノ自己ノ收穫シタル農産物、林産物、畜産物若ハ水産物ノ販賣又ハ之ヲ原料トスル製造但シ特ニ營業場ヲ設ケテ爲ス販賣又ハ製造ヲ除ク

第十二條 命令ヲ以テ指定スル重要物産ノ製造、採掘又ハ採取ヲ業トズル者ニハ命令ノ定ムル所ニ依リ、製造、採掘、又ハ採取ノ事業ヲ開始シタル年及其ノ翌年ヨリ三年間其ノ營業ヨリ生ズル純益ニ付營業稅ヲ免除ス

第十三條 個人ノ純益金額四百圓ニ滿タザルトキハ營業稅ヲ課セズ

第十四條 營業稅ノ稅率ハ百分ノ一・五トス
法人ガ各事業年度ニ於テ納付シタル地租額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該事業年度ノ營業稅額ヨリ之ヲ控除ス

個人ガ其ノ營業用ノ土地ニ付納付シタル地租額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ營業稅額ヨリ之ヲ控除ス

前二項ノ場合ニ於テ控除スベキ地租ハ純益計算上之ヲ損金又ハ必要經費ニ算入セズ

第二項及第四項ノ規定ハ法人ノ清算純益ニ對スル營業稅ニ付之ヲ準用ス

第十五條 納稅義務アル法人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ純益金額ヲ政府ニ申告スベシ

第十六條 納稅義務アル個人ハ命令ノ定ムル所ニ依リ毎年三月十五日迄ニ純益金額ヲ政府ニ申告スベシ

第十七條 法人ノ純益金額ハ第十五條ノ申告ニ依リ、申告ナキトキ又ハ申告ヲ不相當ト認ムルトキハ政府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定シ個人ノ純益金額ハ所得稅法ノ所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得調査委員會閉會後個人ノ純益金額ノ決定ニ付脱漏アルコトヲ發見シタルトキハ其ノ決定ヲ爲スベカリシ年ノ翌年ヨリ三年間ハ仍所得調査委員會ノ調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ純益金額ヲ決定スルコトヲ得

所得調査委員會閉會後個人ノ營業ニ付納稅義務アルコトヲ申出デ又ハ純益金額ノ増加アルコトヲ申出デタルトキハ前二項ノ規定ニ拘ラズ政府ニ於テ其ノ純益金額ヲ決定ス

納稅義務者營業ヲ讓渡シ又ハ廢止シタル後納稅管理人ノ申告ヲ爲サズシテ本法施行地ニ住所又ハ居所ヲ有セザルニ至ルトキハ第一項ノ規定ニ拘ラズ政府ノ調査ニ依リ政府ニ於テ其ノ純益金額ヲ決定スルコトヲ得

第十八條 稅務署長ハ毎年個人ノ營業ニ付納稅義務アリト認ムル者ノ純益金額ヲ調査シ其ノ調査書ヲ所得調査委員會ニ送付スベシ

前項ノ規定ハ前條第二項ノ場合ニ付之ヲ準用ス

第十九條 所得稅法第三十七條、第三十八條及第六十三條ノ規定ハ純益金額ノ決議及決定ニ付之ヲ準用ス

第二十條 第十七條又ハ前條ノ規定ニ依リ純益金額ヲ決定シタルトキハ政府ハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ

本法施行地ニ住所及居所ヲ有セザル納稅義務者營業ヲ讓渡又ハ廢止シタル後納稅管理人ノ申告ヲ爲サザルトキハ前項ノ通知ハ公告ヲ以テ之ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テ公告ノ初日ヨリ七日ヲ經過シタルトキハ其ノ通知アリタルモノト看做ス

第二十一條 納稅義務者前條ノ規定ニ依リ政府ノ通知シタル純益金額ニ對シ異議アルトキハ通知ヲ受ケタル日ヨリ二十日以内ニ不服ノ事由ヲ具シ政府ニ審査ノ請求ヲ爲スコトヲ得前項ノ請求アリタル場合ト雖モ政府ハ税金ノ徵收ヲ猶豫セズ

第二十二條 前條第一項ノ請求アリタルトキハ所得稅法ノ所得審査委員會ノ決議ニ依リ政府ニ於テ之ヲ決定ス

所得稅法第三十八條及第六十八條第二項ノ規定ハ前項ノ場合ニ付之ヲ準用ス

第二十三條 所得稅法第七十五條及第七十六條ノ規定ハ營業稅ニ付之ヲ準用ス

第二十四條 納稅義務者第二十二條ノ決定ニ對シ不服アルトキハ訴願ヲ爲シ又ハ行政裁判所ニ出訴スルコトヲ得

第二十五條 法人ノ營業稅ハ事業年度毎ニ之ヲ徵收ス但シ清算純益ニ對スル營業稅ハ清算又ハ合併ノ際之ヲ徵收ス

個人ノ營業稅ハ年額ヲ二分シ左ノ二期ニ於テ之ヲ徵收ス但シ納稅義務者營業ヲ讓渡シ又ハ廢止シタル後納稅管理人ノ申告ヲ爲サズシテ本法施行地ニ住所及居所ヲ有セザルニ至ルトキハ直ニ其ノ營業稅ヲ徵收スルコトヲ得

第一期 其ノ年八月一日ヨリ三十一日限

第二期 翌年一月一日ヨリ三十一日限

第二十六條 法人解散シタル場合ニ於テ各事業年度ノ純益ニ對スル營業稅又ハ清算純益ニ對スル營業稅ヲ納付セズシテ殘餘財産ヲ分配シタルトキハ其ノ税金ニ付清算人連帶シテ納稅ノ義務アルモノトス

第二十七條 個人ノ營業稅ハ納稅義務者ノ住所地、住所ナキトキハ主タル營業場ノ所在地ヲ以テ納稅地トス但シ所得稅法ノ甲種ノ事業所得ニ付所得稅ヲ納ムル者ニ在リテハ所得稅ノ納稅地ヲ以テ營業稅ノ納稅地トス

第二十八條 納稅義務者營業ヲ讓渡シ又ハ廢止シタル後納稅地ニ現住セザルトキハ其ノ純益ノ申告、納稅其ノ他營業稅ニ關スル一切ノ事項ヲ處理セシムル爲其ノ地ニ於テ納稅管理人ヲ定メ政府ニ申告スベシ營業ヲ讓渡シ又ハ廢止シタル後本法施行地外ニ住所又ハ居所ヲ移サントスルトキ亦同ジ

第二十九條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ納稅義務者又ハ納稅義務アリト認ムル者ニ質問ヲ爲シ又ハ其ノ帳簿書類其ノ他ノ物件ヲ検査スルコトヲ得

第三十條 稅務署長又ハ其ノ代理官ハ調査上必要アルトキハ納稅義務者若ハ納稅義務アリト認ムル者ニ金錢若ハ物品ヲ支拂フノ義務ヲ有スト認ムル者ニ對シ又ハ納稅義務者若ハ納稅義務アリト認ムル者ヨリ金錢若ハ物品ノ支拂ヲ受クルノ權利ヲ有スト認ムル者ニ對シ其ノ金額、數量、價格、支拂期日等ニ付質問スルコトヲ得

第三十一條 政府ハ營業者ノ組織スル團體ニ對シ營業稅ニ關スル事項ヲ諮問スルコトヲ得前項ノ諮問ヲ受ケタル團體ハ命令ノ定ムル所ニ依リ調査ヲ提出スベシ

第三十二條 法人稅法第二十八條及所得稅法第八十六條ノ規定ハ純益金額ノ計算ニ付之ヲ準用ス第三十三條 詐偽其ノ他不正ノ行爲ニ依リ營業稅ヲ逋脫シタル者ハ其ノ逋脫シタル稅金ノ三倍ニ相當スル罰金又ハ科料ニ處ス但シ自首シ又ハ稅務署長ニ申出デタル者ハ其ノ罪ヲ問ハズ

前項ノ場合ニ於テ個人ノ營業ニ付營業稅ヲ逋脫シタル者ノ純益金額ハ第十七條第二項ノ規定ニ拘ラズ政府ニ於テ之ヲ決定シ直ニ其ノ稅金ヲ徵收ス

第三十四條 第二十九條ノ規定ニ依ル帳簿書類其ノ他ノ物件ノ検査ヲ拒ミ、妨ゲ若ハ忌避シ又ハ虛偽ノ記載ヲ爲シタル帳簿書類ヲ呈示シタル者ハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十五條 純益ノ調査又ハ審査ノ事務ニ從事シ又ハ從事シタル者其ノ調査又ハ審査ニ關シ知得タル秘密ヲ正當ノ事由ナクシテ漏洩シタルトキハ千圓以下ノ罰金ニ處ス

第三十六條 第三十三條第一項ノ罪ヲ犯シタル者ニハ刑法第三十八條第三項但書、第三十九條第二項、第四十條、第四十一條、第四十八條第二項、第六十三條及第六十六條ノ規定ヲ適用セズ

附 則

第三十七條 本法ハ昭和十五年四月一日ヨリ之ヲ施行ス

第三十八條 法人ノ各事業年度ノ純益ニ對スル營業稅ニ付テハ昭和十五年四月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、清算純益ニ對スル營業稅ニ付テハ昭和十五年四月一日以後ニ於ケル解散又ハ合併ニ因ル分ヨリ、個人ノ營業稅ニ付テハ昭和十五年分ヨリ本法ヲ適用ス但シ個人ノ鑛業ノ純益ニ付テハ昭和十六年分ヨリ之ヲ適用ス

第三十九條 昭和十五年四月一日ヲ含ム事業年度ノ直前事業年度分ノ第一種所得稅、第一種所得

税附加税、法人資本税及命令ヲ以テ指定スル第一種所得税附加税ニ相當スル租税ハ之ヲ法人税ト看做シ當該事業年度ニ於テ納付シタル第二種所得税及資本利子税ニシテ法人税法第三十八條ノ規定ニ依リ其ノ額ヲ法人税額ヨリ控除スベキモノハ之ヲ分類所得税ト看做シ第四條第二項ノ規定ヲ適用ス

法人ガ本法施行前ニ合併ヲ爲シタル場合ニ於テ合併後存続スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人ノ合併ノ日ヲ含ム事業年度ガ本法施行後ニ終了スル場合ニ於ケル合併ニ因リ消滅シタル法人ノ最後ノ事業年度分ノ第一種所得税、第一種所得税附加税、法人資本税及命令ヲ以テ指定スル第一種所得税附加税ニ相當スル租税並ニ清算所得ニ對スル第一種所得税及第一種所得税附加税ハ之ヲ法人税ト看做シ第四條第二項ノ規定ヲ適用ス

第四十條 昭和十五年四月一日ヲ含ム事業年度ノ直前事業年度前ノ各事業年度分ノ臨時利得税ハ第四條第二項ノ規定ニ拘ラズ法人ノ各事業年度ノ純益ノ計算上之ヲ損金ニ算入ス

第四十一條 本法施行後終了スル事業年度ニ於テ法人ノ納付シタル第二種ノ所得ニ對スル所得税及資本利子税ニシテ法人税法第三十八條ノ規定ニ依リ其ノ額ヲ法人税額ヨリ控除スベキモノハ之ヲ分類所得税ト看做シ第四條第二項ノ規定ヲ適用ス

第四十二條 本法施行後終了スル事業年度ニ於テ法人ノ納付シタル礦産税額、特別礦産税額又ハ

取引所營業税額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ其ノ全部又ハ一部ヲ當該事業年度ノ營業税額ヨリ控除ス

第四十三條 昭和十四年一月一日ヨリ昭和十六年一月一日ニ至ル期間引續キ爲シタルニ非ザル個人ノ營業ノ純益ニ付テハ政府ハ命令ノ定ムル所ニ依リ昭和十五年分又ハ昭和十六年分ニ限り營業税ヲ輕減若ハ免除シ又ハ純益金額ノ計算ニ關シ特例ヲ設クルコトヲ得

第四十四條 昭和十五年一月一日以後産出シタル礦産物ニ對スル礦産税額又ハ特別礦産税額ハ命令ノ定ムル所ニ依リ當該礦業ノ純益ニ對スル昭和十六年分ノ營業税額ヨリ之ヲ控除ス

第四十五條 第十六條ノ規定中三月十五日トアルハ昭和十五年ニ限り四月三十日トス

第四十六條 貯蓄銀行法第二十二條ヲ削除ス

○營業税法施行規則 (昭和十五年三月三十一日勅令第四百四十三號)

第一條 左ニ掲グル營業ハ營業税法第二條ノ規定ニ依リ營業税ヲ課スベキ營業トス

- 一 兩替業
- 二 演劇興行業
- 三 寄席業

四 遊技場業

五 遊覽所業

六 藝妓置屋業

七 貨座敷業

第二條 法人ノ純益ハ營業稅ヲ課スベキ營業ニ付其ノ總益金ヨリ總損金ヲ控除シテ之ヲ計算ス

第三條 法人ノ前事業年度ヨリ繰越シタル益金ハ其ノ事業年度ノ純益ノ計算上益金ニ之ヲ算入セ

法人ノ前事業年度ヨリ繰越シタル損金ハ營業稅法第四條第三項ニ規定スルモノヲ除クノ外其ノ

事業年度ノ純益ノ計算上損金ニ之ヲ算入セズ

第四條 法人ノ各事業年度開始ノ日前三年以内ニ開始シタル事業年度ニ於テ生ジタル損金ニシテ

其ノ損金ノ生ジタル事業年度以後ノ事業年度ノ純益ノ計算上總益金ヨリ控除セラレザリシモノ

ノ金額ハ營業稅法第四條第三項ノ規定ニ依リ各事業年度ノ純益ノ計算上損金ニ之ヲ算入ス

第五條 營業稅法第四條ノ規定ハ同法第七條第三項ニ規定スル法人ノ清算期間中ニ於テ生ジ又ハ

合併ニ因リ生ジタル純益ニシテ營業稅法其ノ他ノ法律ニ依リ營業稅ヲ課セラレザルモノノ金額

ノ計算ニ付之ヲ準用ス

第六條 營業稅ヲ課スベキ純益ト其ノ他ノ純益トヲ有スル法人ノ純益金額ヨリ控除スベキ臨時利

得稅額ハ營業稅ヲ課スベキ純益金額ノ總純益金ニ對スル割合ヲ臨時利得稅總額ニ乘ジ之ヲ計算

ス

第七條 個人ノ純益ハ營業稅ヲ課スベキ營業ニ付其ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シテ之ヲ

計算ス

第八條 營業稅法第十條第一項ノ規定ニ依リ總收入金額ヨリ控除スベキ經費ハ仕入品ノ原價、原

料品ノ代價、場所物件ノ修繕費又ハ借入料、場所物件又ハ營業ニ係ル公課、雇人ノ給料、收入

ヲ得ルニ必要ナル負債ノ利子其ノ他收入ヲ得ルニ必要ナルモノニ限ル但シ家事上ノ費用及之ニ

關聯スルモノハ之ヲ控除セズ

第九條 左ニ掲グル物産ノ製造業ヲ營ム者ニハ營業稅法第十二條ノ規定ニ依リ營業稅ヲ免除ス

一 金、銀、銅、鉛、亜鉛、錫、ニッケル、クロム、コバルト、鐵、アルミニウム及マガネシ

ウムノ地金並ニ水銀

二 鐵ノ條、竿、丁形山形類、軌條、板、線及管(鑄鐵管ヲ除ク)

三 銅ノ合金ノ條、竿、板及管

四 アルミニウムノ合金及マガネシウムノ合金

- 五 球軸受、コロ軸受及同部分品
 - 六 汽機、原動機(機關車ヲ含ム)及動力ヲ以テ運轉スル鐵製ノ機械
 - 七 アルミナ、クリオリット、チタン白、カーボンブラック、石灰、窒素、硫酸カリ、磷酸アンモン、硫酸アンモン、硝酸(アンモニア酸化ニ依ルモノ)、石炭酸、グリコール、グリセリン、メタノール、アセトン、ブタノール、合成イソブチルアルコール、合成ベンゾール、合成トルオール、アセチルセルロース、人造ゴム、人造レジン(フェノールレジンヲ除ク)、人造タンニン、タンニンエキス及タンニン代用エキス(バルブ廢液ヨリ製造スルモノ)
 - 八 纖維素バルブ、蛋白人造纖維、ガラス纖維、岩石纖維及石棉
 - 九 光學用ガラス
 - 十 コンデンスドミルク、カゼイン、大豆カゼイン及落花生カゼイン
 - 十一 感光性乳劑用ゼラチン
 - 十二 鯨革及鯨革
- 左ニ掲グル物産ノ採掘又ハ採取ノ事業ヲ營ム者ニハ營業税法第十二條ノ規定ニ依リ營業税ヲ免除ス
- 一 金鑛、銀鑛、銅鑛、鉛鑛、錫鑛、亞鉛鑛、鐵鑛、硫化鐵鑛、滿俺鑛、ニッケル鑛、水銀鑛

及クロム鐵鑛

二 石油及石炭

三 砂鑛

第十條 前條ノ製造、採掘若ハ採取ノ事業ヲ繼續シ又ハ其ノ繼續ト認ムベキ事實アル者ハ其ノ製造、採掘又ハ採取ノ事業ニ付營業税ノ免除期間ノ殘存スルトキニ限り其ノ免除期間ヲ繼承ス

第十一條 營業税法第十二條ノ規定ニ依リ營業税ノ免除ヲ受ケントスル者ハ同法第十五條又ハ第十六條ノ申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ

前項ノ場合ニ於テ第九條ノ製造、採掘又ハ採取ノ事業ヨリ生ズル純益ト其ノ他ノ純益トヲ有スルトキハ第九條ノ製造、採掘又ハ採取ノ事業ヨリ生ズル純益ト其ノ他ノ純益トヲ區別シタル計算書ヲ添附スベシ

第十二條 營業税法第十四條第二項ノ規定ニ依リ營業税額ヨリ控除スベキ地租額ハ營業税ヲ課スベキ營業ノ用ニ供スル土地ニ付納付シタルモノニ限ル但シ貸付ケタル土地ニ對スル地租額ノ控除ハ其ノ土地ニ付生ジタル純益ノ總額ニ百分ノ一・五ヲ乘ジタル金額ヲ超ユルコトヲ得ズ
前項ノ場合ニ於テ營業税ヲ課スベキ營業ト其ノ他ノ營業トニ共通シテ使用スル土地アルトキハ其ノ地租總額ヲ營業税ヲ課スベキ營業ニ屬スル收入金額ト其ノ他ノ營業ニ屬スル收入金額トニ

按分シテ控除額ヲ計算ス但シ收入金額ノ割合ニ依ルヲ不適當トスルトキハ資産價額又ハ純益ノ割合其ノ他適當ナル方法ニ依リ之ヲ計算スルコトヲ得

第十三條 營業稅法第十四條第二項ノ規定ニ依リ營業稅額ヨリ地租額ノ控除ヲ受ケントスル者ハ營業稅法第十五條ノ申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ

前項ノ申請ヲ爲ス場合ニ於テハ土地ノ地目別ニ其ノ賃貸價格、納付シタル稅額及控除ヲ受クベキ稅額ニ關スル明細書ヲ提出スベシ

第十四條 稅務署長ニ於テ必要アリト認ムルトキハ前條ノ申請ヲ爲シタル者ニ對シ其ノ計算ヲ證明スベキ書類又ハ帳簿ノ呈示又ハ提出ヲ命ズルコトヲ得

第十五條 營業稅法第十四條第三項ノ規定ニ依リ營業稅額ヨリ控除スベキ地租額ハ其ノ營業用ノ土地ニシテ家事ニ關聯セザルモノニ付納付シタルモノニ限ル

前項ノ地租額ハ前年中ニ納付シタル金額ニ依リ之ヲ計算ス

第十二條第二項ノ規定ハ營業稅ヲ課スベキ營業ト其ノ他ノ營業トニ共通シテ使用スル土地ニ對スル地租額ノ控除ニ付之ヲ準用ス

第十六條 營業稅法第十四條第三項ノ規定ニ依リ營業稅額ヨリ地租額ノ控除ヲ受ケントスル者ハ營業稅法第十六條ノ申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ

前項ノ申請ヲ爲ス場合ニ於テハ地番、地目、賃貸價格及地租額ニ關スル明細書ヲ提出スベシ

第十七條 法人ノ各事業年度ノ純益ハ每事業年度決算確定ノ日若ハ合併ノ日ヨリ十四日以内又ハ清算著手ノ日ヨリ二十日以内ニ之ヲ所轄稅務署ニ申告スベシ

第十八條 解散シタル法人ノ清算純益ハ殘餘財産確定シタルトキ其ノ分配前ニ清算期間中ノ收支計算書ヲ添附シ之ヲ所轄稅務署ニ申告スベシ殘餘財産ヲ數回ニ分チテ分配スル場合ニ於テハ其ノ分配スベキ殘餘財産確定ノ都度之ヲ申告スベシ

第十九條 合併ニ因リテ消滅シタル法人ノ清算純益ハ合併ノ日ヨリ十四日以内ニ合併ニ關スル書類及合併ニ因リテ繼承シタル資産ノ明細書ヲ添附シ合併後存續スル法人又ハ合併ニ因リテ設立シタル法人之ヲ所轄稅務署ニ申告スベシ

第二十條 前三條ノ申告ハ法人稅法ニ依ル所得及資本ノ申告書ニ附記シテ之ヲ爲スコトヲ妨グズ

第二十一條 個人ノ營業ニ付納稅義務アル者ハ營業ノ種類、營業場所在地、純益金額及純益算出ノ基礎ヲ詳記シ所轄稅務署ニ申告スベシ

第二十二條 稅務署長營業稅法第十七條、第十九條又ハ第三十三條第二項ノ規定ニ依リ純益金額ヲ決定シタルトキハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ

第二十三條 營業稅法第二十二條第一項ノ審査ノ請求ヲ爲サントスル者ハ事由ヲ具シ證憑書類ヲ

添へ純益金額ノ決定ヲ爲シタル稅務署長ヲ經由シ稅務監督局長ニ申出ツベシ

第二十四條 所得稅法施行規則第七十七條及第七十九條ノ規定ハ營業稅ニ付之ヲ準用ス

第二十五條 稅務監督局長營業稅法第二十二條ノ規定ニ依リ純益金額ヲ決定シタルトキハ之ヲ納稅義務者ニ通知スベシ

第二十六條 個人ノ營業稅ノ納稅義務者災害、失業其ノ他ノ事由ニ因リ著シク資力ヲ喪失シ納稅困難ト認ムルトキハ納稅義務者ノ申請ニ依リ其ノ營業稅ニ付之ヲ輕減又ハ免除ス
所得稅法施行規則第八十三條乃至第八十五條ノ規定ハ前項ノ規定ニ依ル營業稅ノ輕減又ハ免除ニ付之ヲ準用ス

第二十七條 納稅義務者納稅地ノ稅務署所轄外ニ營業場ヲ有スルトキハ其ノ營業場所在地ノ稅務署ニ納稅地ヲ申告スベシ

第二十八條 納稅義務者納稅地ヲ變更スルトキハ其ノ旨新納稅地ノ稅務署ニ申告スベシ

第二十九條 稅務署長又ハ其ノ代理官營業稅法第二十九條ノ規定ニ依リ營業ニ關スル帳簿書類其ノ他ノ物件ヲ検査スルトキハ検査章ヲ携帯スベシ

第三十條 稅務署長ハ所轄内ニ事務所ヲ有スル商業組合、工業組合、同業組合其ノ他ノ營業者ノ團體ニ對シ其ノ團體ニ屬スル各營業者ノ純益金額ノ推定額又ハ順位ヲ諮問スルコトヲ得

前項ノ諮問ヲ受ケタル團體ハ諮問事項ニ對スル調書ヲ作成シ稅務署長ノ指定スル期間迄ニ之ヲ所轄稅務署ニ提出スベシ

附 則

第三十一條 本令ハ營業稅法施行ノ日ヨリ之ヲ施行ス

第三十二條 法人ノ各事業年度ノ純益ニ對スル營業稅ニ付テハ昭和十五年四月一日以後ニ終了スル事業年度分ヨリ、清算純益ニ對スル營業稅ニ付テハ昭和十五年四月一日以後ニ於ケル解散又ハ合併ニ因ル分ヨリ、個人ノ營業稅ニ付テハ昭和十五年分ヨリ本令ヲ適用ス但シ個人ノ鑛業ノ純益ニ付テハ昭和十六年分ヨリ之ヲ適用ス

第三十三條 法人ノ各事業年度開始ノ日前三年以内ニ開始シ本令施行前ニ終了シタル事業年度ニ於テ生ジタル損金ノ算定ニ關シテハ營業稅法第四條第二項ノ規定ヲ適用セズ

第三十四條 營業稅法施行地ニ本店又ハ主タル事務所ヲ有スル法人ノ朝鮮、臺灣、樺太又ハ南洋群島ニ於ケル資産ニ對シ各當該地ニ於ケル法令ニ依リ賦課スル特別所得稅ハ之ヲ營業稅法第三十九條ニ規定スル第一種所得稅附加稅ニ相當スル租稅トス

第三十五條 營業稅法第四十二條ノ規定ニ依リ營業稅額ヨリ控除スベキ鑛產稅額及特別鑛產稅額ハ本令施行後終了スル事業年度ニ於テ產出シタル鑛產物ニ對シ納付シタル鑛產稅額及特別鑛產

稅額ノ合計額ニ限ル但シ其ノ控除額ハ當該事業年度ニ於ケル鑛業ノ純益金額ニ百分ノ一・五ヲ乘シタル金額ヲ超ユルコトヲ得ズ

營業稅法第四十二條ノ規定ニ依リ營業稅額ヨリ控除スベキ取引所營業稅額ハ本令施行後終了スル事業年度ニ於テ爲シタル賣買取引ニ基ク賣買手數料收入金額ニ對シ納付シタル取引所營業稅額ノ十一分ノ三ニ相當スル金額ニ限ル但シ其ノ控除額ハ當該事業年度ニ於ケル取引所ノ純益金額ニ百分ノ一・五ヲ乘シタル金額ヲ超ユルコトヲ得ズ

前三項ノ規定及法人稅法施行規則第三十條ノ規定ニ依リ營業稅額及所得ニ對スル法人稅額ヨリ控除スベキ鑛產稅額、特別鑛產稅額又ハ取引所營業稅額ハ法人ノ各事業年度ノ純益ノ計算上之ヲ損金ニ算入セズ

第三十六條 營業稅法第四十二條ノ規定ニ依リ營業稅額ヨリ鑛產稅額、特別鑛產稅額又ハ取引所營業稅額ノ控除ヲ受ケントスル法人ハ營業稅法第十五條ノ申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ

前項ノ申請ヲ爲ス場合ニ於テハ鑛產稅及特別鑛產稅ニ在リテハ鑛產物ノ種類別ニ其ノ價額、納付シタル鑛產稅額及特別鑛產稅額並ニ控除ヲ受クベキ鑛產稅額及特別鑛產稅額ニ關スル明細書ヲ、取引所營業稅ニ在リテハ毎月ノ賣買手數料收入金額、納付シタル取引所營業稅額及控除ヲ

受クベキ取引所營業稅額ニ關スル明細書ヲ提出スベシ

第三十七條 營業稅法第四十三條ノ規定ニ依ル昭和十五年分若ハ昭和十六年分ノ營業稅ノ輕減若ハ免除又ハ昭和十五年分若ハ昭和十六年分ノ純益金額ノ計算ニ關スル特例ハ左ノ各號ニ定ムル所ニ依ル

- 一 昭和十四年一月一日以後同年十二月三十一日迄ニ新ニ開業シ又ハ相續ニ因ルニ非ズシテ營業ヲ繼續シ當該營業ノ外ニ營業ヲ有セザル個人ニハ昭和十五年分ノ營業稅ヲ免除ス但シ昭和十四年ノ所得調査委員會閉會後ニ於テ個人ノ營業ニ付納稅義務アルニ至リタル者ニシテ營業稅法第十三條第三項ノ規定ニ依リ純益金額ノ決定ヲ受ケザリシモノニ付テハ此ノ限ニ在ラズ
- 二 昭和十四年十二月三十一日迄ニ營業ノ全部ヲ廢止シタル個人ニハ昭和十五年分ノ營業稅ヲ免除ス
- 三 昭和十五年一月一日以後昭和十五年分純益金額決定前ニ營業ノ全部ヲ廢止シタル個人ニ付テハ昭和十五年分ノ純益金額ハ其ノ年一月一日ヨリ營業ヲ廢止スル迄ノ總收入金額ヨリ必要ノ經費ヲ控除シタル金額ニ依リ之ヲ計算ス
- 四 昭和十四年分純益金額決定後昭和十五年分純益金額決定前ニ於テ營業ヲ法人ニ繼續セシメ

タル個人ノ當該營業ノ純益金額ニ付テハ第二號又ハ第三號ノ規定ニ依ラズ當該營業ノ純益金額ニ對スル昭和十五年分ノ營業稅ニ付當該營業ノ純益ニ對スル昭和十四年分ノ營業收益稅額ニ相當スル金額ヲ輕減ス

五 昭和十五年一月一日以後同年十二月三十一日迄ニ營業ノ全部ヲ廢止シタル個人ニハ昭和十六年分營業稅ヲ免除ス但シ其ノ營業ヲ法人ニ繼續セシメタル者ニ付テハ此ノ限ニ在ラズ

前項第三號ノ場合ニ於テ營業稅法第十四條第三項ノ規定ニ依リ營業稅額ヨリ控除スベキ地租額ハ其ノ年一月一日ヨリ營業ヲ廢止スル迄ニ納付シタル金額ニ依リ之ヲ計算ス

第三十八條 營業稅法第四十四條ノ規定ニ依リ個人ノ鑛業ノ純益ニ對スル昭和十六年分ノ營業稅額ヨリ控除スベキ鑛產稅額及特別鑛產稅額ハ昭和十五年一月一日以後產出シタル鑛產物ニ對シ納付シタル鑛產稅額及特別鑛產稅額ニ限ル但シ其ノ控除額ハ昭和十五年一月一日以後同年三月三十一日迄ニ產出シタル鑛產物ニ付生ジタル純益金額ニ百分ノ一・五ヲ乘ジタル金額ヲ超ユルコトヲ得ズ

前項ノ規定ニ依リ營業稅額ヨリ控除スベキ鑛產稅額又ハ特別鑛產稅額ハ純益ノ計算上之ヲ必要經費ニ算入セズ

第三十九條 營業稅法第四十四條ノ規定ニ依リ個人ノ鑛業ノ純益ニ對スル昭和十六年分ノ營業稅

額ヨリ昭和十五年一月一日以後產出シタル鑛產物ニ對スル鑛產稅額又ハ特別鑛產稅額ノ控除ヲ受ケントスル者ハ營業稅法第十六條ノ申告ト同時ニ其ノ旨所轄稅務署ニ申請スベシ
前項ノ申請ヲ爲ス場合ニ於テハ鑛產物ノ種類別ニ其ノ價額、納付シタル鑛產稅額及特別鑛產稅額並ニ控除ヲ受クベキ鑛產稅額及特別鑛產稅額ニ關スル明細書ヲ提出スベシ